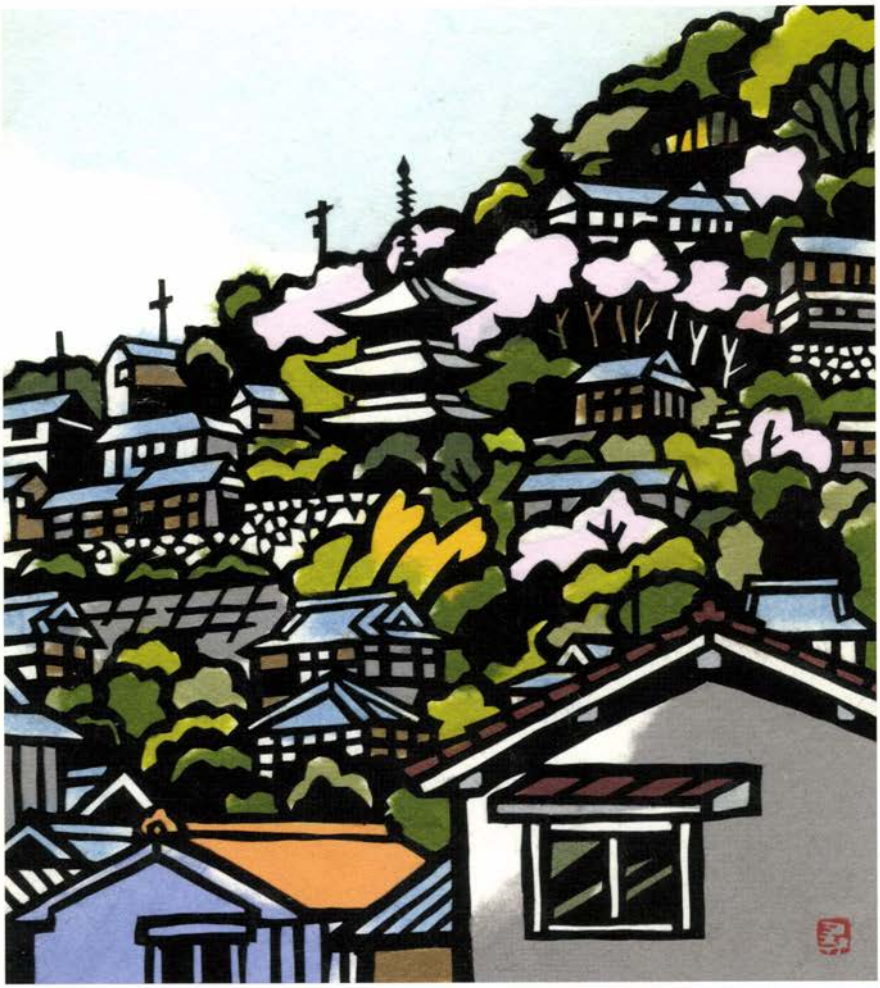
川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十三年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇〇七号



日川協加盟

橘高薫風七回忌特集

No. 1007

四月号

ご宿泊　10,500円～
ご宴会　15名以上からの受付
※送迎可、片道1時間迄送迎範囲あります。

『春夏秋冬溢れる自然
吟行句会に最適』

牛滝温泉
いよやかの郷

川柳に
出逢える温泉郷

ご予約・お問い合わせ
TEL 072-479-2641
〒596-0114 大阪府岸和田市大沢町1156
http://www.iyoyaka.jp/

いよやか　検索

■ (土)(日)のご利用は混み合いますのでお申込みは早い目に。
■ 岸和田川柳会　井伊東吉（TEL 072-444-3227）にご連絡頂ければお取次ぎ致します。

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保険取扱　看護2A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター

診療時間
月～金　8:30～16:00
土　8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp

電話 大阪(06) 6771-4861(代)

橘高薫風先生

小島蘭幸

平成13年7月7日、尾道市文学公園で麻生路郎・葭乃句碑建立除幕式が行われました。そこには晴れやかな表情の薫風先生のお姿がありました。

『ふる里へいのちが還る句碑一つ

という感慨に浸りました。私の青春時代に「カルメン故郷に帰る」という題で確か最初のカラー映画であったと思いますが、その伝で言うと〝路郎故郷に帰る〟であります。』

これは句碑除幕式記念川柳大会を無事終えた後に頂いた薫風先生のお便りの一節です。路郎先生の句碑をふる里尾道へ…誰よりも一番熱く待ち望んでおられた先生の執念、喜びが文面に満ち溢れています。

平成15年2月8日、岸本水府句碑建立50周年記念第54回三原市神明祭協賛川柳大会に、薫風先生は出席されました。「路郎先生の句碑建立に尽力された八島白龍氏に是非お礼が言いたいんや」と、お会いするたびに言っておられたのも懐かしい思い出です。

『水平線今にどんでん返しある　薫風

水平線を見ている迷い消えている　蘭幸

前者は、蘭幸が挙げた愛誦の一句で、後者は、「作者のことば」に掲げたものである。両者の句に共通する一本の水平線！この二つの間に川柳の地獄と浄土が揺曳する。』これは「川柳木馬」の連載〝昭和二桁生れの作家群像〟の私の作品に対して作品論・作家論を執筆して下さった先生の文章の一節です。「川柳塔の旗手小島蘭幸」と題して5頁に渡る重厚な文章は、23年経った今も光り輝いています。当時「蘭幸さんはいい人に書いて貰って良かったですね」と多くの方からお便りを頂いたものです。

淋し夜は句集檸檬と眠ります　蘭幸

薫風先生をお見送りしてから早いもので、もう6年の歳月が経ちました。本年4月は七回忌にあたります。私は今、書物、色紙、短冊、テレホンカードを並べて、一人静かに薫風先生を偲んでいます。

座右の句
秋風に傷なきものはなかりけり　（薫　風）
私の句
プライドを背なに縫い込み生きている　原田すみ子

川柳塔　四月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「尾　道」

■巻頭言　橘高薫風先生……小島蘭幸：（1）
なぜ、川柳塔なのか……斉藤劦：（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選：（4）
自選集……（48）
温故知新……（51）
川柳塔の川柳讃歌(76)……木津川計：（52）
麻生路郎句抄……（53）
水煙抄……西出楓楽選：（54）
■薫風七回忌特集　橘高薫風の世界
雨の日―薫風の誕生……野沢省悟：（78）
町の祭り……芳賀博子：（80）
強靭な抒情……桒原道夫：（82）
薫風　この一句……（89）
橘高薫風略歴……（96）
橘高薫風50句……（97）

なぜ、川柳塔なのか

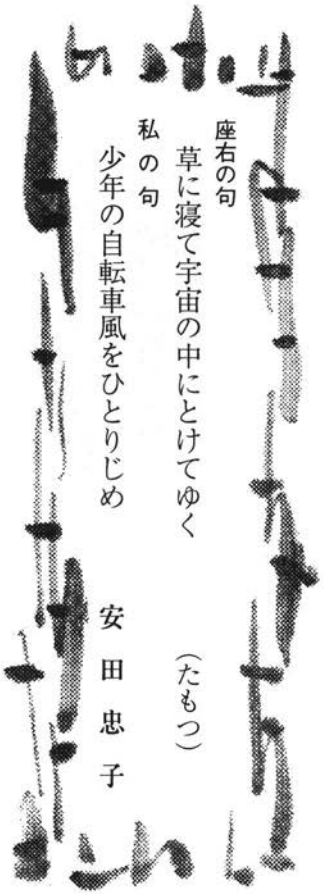
斉藤　劦

みちのくの弘前から、なぜ、東京を飛び越えて、大阪の川柳塔社なのかについてここに記しておきたい。その訳は、麻生路郎先生に心酔して、青森からはるばる川柳塔の門をたたいた工藤安亭氏と工藤甲吉氏の川柳探求者がいたからだと波多野五楽庵氏は言う。

工藤安亭氏は、明治三十六年弘前生まれ。東京歯科医専を卒えると渡満し、三江省で開業、引揚げ帰国の船中で古川柳を愛読して、人間川柳にひかれる。昭和二十四年歯科医開業の青森県蟹田町で漆戸凡々子、杉野十佐一さんらと「おかじょうき吟社」を創立。二十五年蟹田町から平内町に移転開業、三十七年には「川柳ひらない吟社」を創立。川柳への貢献はけだし大なるものがあった。昭和四十四年没。安亭氏は波多野五楽庵氏の伯父さんにあたり、五楽庵氏に川柳を勧め、五楽庵という柳号の名付け親である。「私を長男のように可愛がった安亭は、私に川柳を残してくれた。したがって私の川柳は路郎先生が伯父を通して私に教えて下さったと考えるのが至当である」と五楽庵氏は述べている。

次に工藤甲吉氏と言えば、平川市の猿賀公園内に「人生はよいしょこらしょにどっこい

俳風柳多留一一篇研究 68 …… 新川洋洋 …… (98)
『麻生路郎読本』に思う …… 新川洋洋 …… (100)
■エッセー 俳諧師松木淡々(半時庵)とその時代 …… 小沢淳 …… (103)
愛染帖 …… 新家完司選 …… (104)
檸檬抄「くっきり」 …… 三宅保州・山本希久子共選 …… (108)
『麻生路郎読本』余滴 (2) …… 柒原道夫 …… (111)
一路集「前向き」 …… 山口光久選 …… (114)
「つかむ」 …… 春木圭一郎選 …… (114)
「いよいよ」 …… 石原淑子選 …… (115)
初歩教室「チーム」 …… 鈴木公弘 …… (116)
秀句鑑賞「同人吟」 …… 伊達郁夫 …… (118)
「水煙抄」 …… 森村美花 …… (120)
せんりゅう飛行船 (4) …… 新家完司 …… (121)
■エッセー 熊本川柳会を語る …… 髙野宵草 …… (122)
三月本社句会 …… (124)
各地柳壇(佳句地十選/白根ふみ) …… (128)
四月各地句会案内 …… (142)
柳界展望 …… (144)
■編集後記(ひとこと/小谷小雪) …… 朱夏・能子 …… (146)



座右の句

草に寝て宇宙の中にとけてゆく (たもつ)

私の句

少年の自転車風をひとりじめ 安田忠子

しょ」の句碑のある方である。平成二十一年没。甲吉氏は大正二年尾上町生まれ、十五歳で川柳の道に入る。小林不浪人、長谷川霜鳥に師事。みちのく吟社の同人となる。「国民川柳(のちに川柳研究)」、「番傘」、「きやり」、「せんりゅう」などに投句。その後あこがれの麻生路郎門下に入る。麻生路郎先生を偲んで甲吉氏は、路郎先生が青森にお出でになった時のことを次のように述べている。

「思い起こせば昭和三十七年七月二十日、路郎先生は橘高薫風子さんと藤村〆女さんを伴って長い長い深夜の青森駅ホームに降りられた。路郎先生には東奥日報社の第十六回青森県川柳大会へ特別選者としてお出でを願ったのである。大会は二十二日だった。先生は「川柳一筋に」と題して講演。大会翌日には四人で十和田湖を遊覧し、その帰り、街にネオンがきらめき出した頃、青森の街と青森湾を眼下に、俳句は自然が相手だから山がいいだろうが川柳は人間が相手だからやはり里がいいと車の中でもらした先生の一言が今でも私の耳の奥に生きている。あの温顔と共に。」このように「路郎先生と甲吉氏と青森」を知る上でとても貴重な文を甲吉氏は残されている。

路郎先生から安亭と甲吉の両氏を通して五楽庵氏へと繋がる川柳塔みちのくである。川柳塔みちのくは今、五楽庵氏の指導のもとに会員一同川柳を通して大いに人生を楽しんでいるのだ。

小島蘭幸選

和歌山市　木本朱夏

建国日　襖のように雪が降る
着ぶくれてバレンタインに遠く居る
立春のピクリと動く猫の耳
口中に飴玉ひとつ春隣
捨てるもの捨てしたたかに冬木立
しあわせが歯の隙き間から逃げそうだ

和歌山市　牛尾緑良

特急に抜かれてふるさとに降りる
一の糸張って亡母に会いにゆく
雪が降る日を待っている別離
菜の花が一面に咲き望郷よ
金平糖とお別れをする少女の死
青春の背景に居た栃錦

鳥取県　細田裕花

辛抱にもう慣れました雪続く
細胞が凍って愛が届かない
プレイバック愛しき日日よチョコに酔う
晴耕雨読やっと自由のコツ掴む
寒空へ生業の手が荒れてくる
ぶつぶつと輪の外にいて泡を吹く

香芝市　大内朝子

躍動の春へスキップするいのち
菜の花の匂いへ亡母を抱きしめる
療養の友の電話と共に泣く
干からびた女心に春の雨
力まずに生きると風が和らかい
ほろ酔いの脳はピンクの花畠

八尾市　村上ミツ子

八百長騒ぎ浪速に春は来ない
いつからか女子が元気になっている
うちの家計簿赤エンピツと仲が良い
国に金貸して倹しく生きている
不平めがねを感謝メガネにかけ替える
人生を飾る寄り道まわり道

川柳にいのちをもらう古机
ああ春だ痛みも憎しみも消える
こころよく招いてくれる里の風
化けること覚えてからの自信なり
もうあかん言いつつ湿布痛み止め
腹いっぱい泣いて笑って人間だ

大阪市　神夏磯　典子

二階まで子供手当が届かない
負け組を囲む寒波が動かない
生き恥も晒しひたすら虹を追う
尊厳死そんな言葉と冬ごもり
もう少し飲んだら雲に乗れそうだ
許し合える花が花屋の軒先に

神戸市　両川　無限

今年また家族が増えた福寿草
心を映し出す玄関の鏡
人には勝てぬが自分には負けない
遺影用に描いた自画像修正
混浴は足湯と分かり大笑い
禁酒禁煙句会席に貼り紙

さいたま市　星野　育子

しゃぼん玉弾けて我に返るなり
守りたいモノがあるから憶病に
自画像を描き上げた日の嫌悪感
生兵法ネット世界に迷い込む
温故知新改めて読む柳多留
根気よく煮込んだ母のお豆さん

藤井寺市　鈴木　いさお

びん付けが匂う浪華の春よ来い
わけもなく神様は生かしていない
リフレッシュ出来た楽しい無駄話
探すまい　いずれ出てくる探し物
仕事した部屋です散らかっています
稼ぐのが生き甲斐だったかも知れぬ

堺市　志田　千代

注連縄を外した街にある静寂
見守っています笑顔が戻るまで
繊細で大胆わたしの裏おもて
のど飴で治るくらいの憂さだった
靴下を二枚重ねて冬ごもり
相槌を打ってしまった日の空虚

藤井寺市　太田　扶美代

煽てるとソロバン外す友を持つ
満足は長持ちしないものらしい
人並みの迷惑かけて逝くつもり
ロボットに戦力外と仕分けされ
餅いくつ食べたか自慢した昔
五七五に収り難い雪五尺

三田市　北野　哲男

そのうちという弁解の雪がふる
為す術がない豪雪のテロリズム
雪かきを止めて寝溜める他はなし
あいさつをして振り向けば雪地蔵
後継者ない大屋根の雪下ろす
春の香がランドセルから立ち始め

鳥取市　鈴木公弘

命日の姉と対話をして過ごす
旅先でまずコンビニを確かめる
敵のない人の口ぐせ真似てみる
愛されず溶けてしまったチョコレート
距離おいて見ればシミなど気にならぬ
役割を演じる椅子を拭いておく

鳥取市　稲村遊子

街の顔チャイナも杖もハングルも
恋ごころなくし乾燥注意報
年金日まず亡母さんへ花を買う
辿ってゆくと病院がある花の道
かすり傷またニアミスをしてしまう
普通のことを普通にしたい休みの日

河内長野市　山岡冨美子

太陽が眩しい旬を過ぎてから
太陽の下では裸眼でも読める
毛穴からくたびれていく冬いちご

京都市　高島啓子

席蹴って立って悪女にされました
中年が朝からうどん券売機
端っこに春が来ているカウンター

岸和田市　岩佐ダン吉

距離少しおいて私を考える
捨て石になろうと決めた青い空
粋なこと言うて淋しくなっている
スピーチに彬の一句鏤める
九条の深い思いに触れてみる
基本ばかり追うて淋しい僕になる

大阪市　川端一歩

考える葦になるよりキューピッド
悪役を買った男の背が丸い
勝ったのはフロック負けは実力で
一日が早い年金日は遠い
ちょっとしたことに絡んで自己嫌悪
字を踏むな叱った父が懐しい

羽曳野市　吉川寿美

気に入った写真も決めて身のまわり
実りあるひと日一日の縄を綯う
正座して病夫と深い話する
自分史に顔の知らない母が生き
甘口のワイン大人になり切れぬ
豆腐やの声が昔を売りにくる

愛知県　早川遡行

アナログで頑張ってます四帖半
めしにする机の上を片付けて
名刺交換したっきり会ってない
遅刻して履くスリッパの色違い
盆栽を誉められてから顔馴染
ポールモーリアを聴きながら焼きイモ

大阪市　井丸昌紀

ミリ単位の話が好きで友はなし
煙草なぞ止める自信はあったけど
夏冬夏冬にならない保証ありません
宮崎を捨ててあんたはどげんする
四月には四月の風が吹くはずや
国語辞典引くことだけがうまくなり

尼崎市　春城年代

まだ一人で行けると思う繁華街
滑稽な求愛ダンス春ですね
十指みな風に透して淋しい日
三宮も心斎橋も遠くなる
早春や亡夫の湯呑掌で囲む
歩兵第一〇九聯隊とある湯呑み

三田市　堀　正和

予報見て起床時間を決めてます
時刻表眺めて旅をふくらます
ややこしい話へ脳はフリーズで
駅裏にパワーポイント二三軒
呑み足らぬ顔へお茶漬さっと出る
末吉のおみくじしかと抱いている

大和郡山市　坊農柳弘

沈思黙考自分探しの花遍路
香焚いてお招きします十三夜
喜寿悠々平均寿命に遠く居る
愛される形で人恋ゆるさくら
フィクションを重ね昭和のエキストラ
春霞み土筆ぬくっと自己主張

西宮市　西口いわゑ

花あられ華やぐ女たちに似る
小正月安倍川餅でくつろぎぬ
紅梅へ女の気概極まれり
二日月おぼつかなくも浮いている
無理を通して負の風の中ひとり
天まで届けわたしの初春の願いごと

八尾市　宮崎シマ子

外へ出ぬ日は一日中もの言わず
呼んだら返事ぐらいしてよ亡夫
雪に友噴火の地にも友がいる
元気だよひとりでいても腹がへる
今日も留守やったねと娘に叱られる
赤い靴と赤いセーター買いました

二月号の表紙が僕の住む田舎

大洲市　中居善信

駆け抜けた昭和の話などしよう
耐え忍ぶ事を習ったのは昭和
生きてきた過去が大事な宝物
ゴキブリをひょいと掴んだのは美人
鳥籠へ水はたっぷりやっている

大阪市　谷口義

春が来るらしいので窓拭いておく
うつむいているうち大抵は終る
輪郭のはっきりしない顔になり
処方箋通りに一日が終る
陰日向なく毒舌冴えている
丁度よいところへ夜が来てくれた

出雲市　伊藤玲子

シュワシュワと炬燵のビールよく喋る
肩寄せて見る豪雪の冴えた月
耳澄ます冬の出口の花の声
記念樹にそっと耳あて声を聴く
お辞儀した男(ひと)の名前が出てこない
芯一本曲げずふんわり生きていく

藤井寺市　髙田美代子

人並みに花にうかれていて孤独
歯に衣を着せない友と午後のお茶
物の値打ち有用性で決められる
戻る気の無い椅子だから振り向かず
成人よこれから値札付けられる
飲む話花見の話して楽し

和泉市　横山捷也

どたん場でいつものように妻に折れ
神妙に生きております主治医様
探られるほどの噂もない私
ふるさとに叱ってくれる人は無い
口だけは萎えぬ母親車イス
ふるさとに帰れる橋を残しとく

藤井寺市　鴨谷瑠美子

同じ夢見られるのなら引き返す
友達のビデオにわたくしの昔
シクラメン少し愛していいですか
山茶花も水仙も咲く街しずか
思惑があって眼鏡を買いかえる
影絵などちょっとおどけて春を待つ

芦屋市　竹山千賀子

春風に乗り明日への種子をまく
誕生日君にあげたい僕の歳
一筆を添えてふくらむプレゼント
寄りかかる樹もないままに陽が沈む
梅一輪競うことなく笑んでいる
登り窯炎の中にある命

竹槍に転向もした竹の過去
賑やかで寒い偽物ばかり持つ
一隅を照らしてほほえみの人
しっかりと結ぶひと世の縁なら
平均台歩き通して定年日
遺言は精一杯に生きなさい

橿原市　居谷真理子

柊に鰯昔を偲ばせる
豪雪へ胸を痛める温い部屋
お互いをいたわりあっている加齢
温泉で夕陽眺めている至福
三姉妹揃い眠れぬ旅の宿
寒中にめげぬアロエの花が咲く

大阪市　津守なぎさ

充電と言う駄弁の鍋をつつき合う
傘寿の底に弱気な俺を沈ませる
二三回転けてとうとう杖を買い
笑い転げる過去の話を種にする
町内の役目回ってきて八十路
軟弱な本音に鍼を打ってやる

吹田市　太田昭

エプロンに潜ませてある破裂音
こっそりと老妻の寝言を聞いている
私の影にも赤いシャツ着せる

富田林市　中井アキ

少しづつ春になってゆく音符
ぶがぶかの帽子で隠している微罪
火だるまで男と抜けた砂あらし

鳥取市　奥谷彩子

巣立つ子の恵方を祈る鬼瓦
思慮深く男は広い海を抱く
三角波たえた親父の羅針盤
満足に生きた男の背が光る
咲き切って人もサクラも地に還る
千の風亡夫のメールを乗せて来る

倉吉市　牧野芳光

充電をしなけりゃ雷は落ちぬ
悪いことしていないのに春一番
お達しがあるまで鼻を高くする
神仏に言葉がわかるはずがない
野心持つ男は溝によく落ちる
岩ツバメのツバうまそうに食べている

松江市　川本畔

頷きがだんだん深くなる茶礎よ
そこ此処に埃日射しは正直な
遅刻した理由は言わぬがよさそうだ
寒ざむの心揺さぶるシンフォニー
裏山の梨は落ちたか主は亡く
一枚の喪中ハガキが音立てる

東かがわ市　原　賢

想うより時間は早く過ぎてゆく
今日生きて明日を生きる夢を追う
もう一度脳を磨いて明日に賭け
言い訳はせず遅咲きの花は散る
ユーモアが一つ飛び出し座が和む

東かがわ市　川崎ひかり

衣紋掛け光る明日を吊っている
光るもの外し介護の手に戻る
いろいろを越えて六度の年女
呆けぬ内会って詫びたい人が居る
栄光の裏に辛苦の汗のあと

東かがわ市　清川玲子

凧上げた原っぱどこへ消えたやら
原石の値打ち見る目は持って居る
タレントを呼んで開催盛り上げる
その時になって気が付くメモがない
自転車の百歳と今すれ違う

東かがわ市　伊勢八重子

癒される菜園猫の額ほど
思い切り話して垣根取りのぞく
今日のウツ包んでしまうおぼろ月
行きずりのときめきもらう一人旅
正直な鏡が年齢を皆しゃべる

高知市　小澤幸泉

カラオケに酔って世代が手を結び
このホールだけ暖かいブラームス
白鷺よおまえ独りか俺一人
幾度もぬり変えられた家族地図
あがれない人生すごろくまだ続き

高知市　小川てるみ

鬼の面とれば意外と好好爺
かみかみの口体操をして元気
新聞の訃報欄へは目を凝らす
三寒四温風の便りを待っている
さよならがとぎれとぎれになる氷雨

松山市　古手川光

マグマ溜まって噴火火山も独裁も
なんでやねん牛に鶏噴火まで
たっぷりと時間が有って捗らぬ
ミステークぼけたぼけたと言うておく
ＩＴの世に国会の速記録

松山市　宮尾みのり

こんなにも坂東京のど真ん中
サザエさん現象同居しています
運のいい人を神様依怙ひいき
死神がすごすご消えたオペ終る
庇われてハウス育ちに四季が無い

松山市　髙橋宏臣

デジタルの世にアナログの自負消える
お互いの深いところにある砂漠
崩すのが楽しい時もある積木
定年や雲の形に無頓着
かすんだ歌が峠の道を越えて行く

西予市　黒田茂代

まだ夢があるから今日も顔洗う
日常はジーンズお出掛けは和服
帯締めの緩み私の気の緩み
欧米のミュージカル日本の歌舞伎
人前で蟹を頬張りたくはない

唐津市　樋口輝夫

アメリカがまだ押さえてる首根っ子
達筆で綺麗な嘘が書いてある
無位無冠七人の敵ちゃんといる
居酒屋で学ぶ処世の裏表
子には子の人生がある流れ雲

唐津市　井上勝視

卒寿間近か洒落気色気で生きている
生かされて卒寿峠の陽を拝む
水をやり鉢に命を貰ろてます
九十の名もなき母は宝もの
妻の留守難儀な塩のひとつまみ

唐津市　坂本蜂朗

将門の首塚首都のど真ん中
北の島思案投げ首策がない
ギブアップだから小首をかしげてる
笑ってはいるが不安な物忘れ
焼き物の値札のゼロを数えてる

唐津市　山口高明

静寂をやぶる警策禅の寺
弱音吐くわたし励ます空の蒼
眉キリリ描いておんなはもう他人
妻よりも三歩遅れてカート押す
青い目の武者練り歩く子供の日

熊本市　永田俊子

杖つく身になり頑固の紐ゆるむ
風呂敷がしゃべり出したエコ時代
寄らば大樹キャスティングボードがゆれる
石蕗の絮　風に四散す核家族
晩節を全うしたい手を洗う

熊本県　髙野宵草

柏手に今年も屠蘇が呑めました
四十年生かしてくれた医師も老い
いい場所が破れアップリケが似合う
宇宙まで望む地球で飢える国
宗教の集いで眠るエキストラ

食欲出た夫に迷う台所
早朝の収集消えてあわをふく（ポスト）
商魂のポイント増に弱くなる
引き継ぎはご覚悟入院かも知れぬ
陽光に草取り春耕刻惜しむ

熊本県　岩切康子

現金はないが笑顔を贈ります
佑ちゃん像人気スポット雪まつり
机上整理して夫に叱られる
昭和一桁まだポマードを光らせる
コンクリートの箱に孤独の住む団地

札幌市　三浦強一

雑魚生きる忘れ上手で寝たふりで
年輪を重ね用心深くなる
間引き菜に浮き世を託つ雨しとど
昭和とは耐えた楽しさ負の遺産
哲学が易しくなった妻の老い

札幌市　小沢淳

やき鳥の匂い引っ張り込まれそう
肩書を外し似合いの年となる
あみだ様その手に握られてる命
どの道を行けどきれいな海へ出る
思い出の旅を楽しむわんこそば

砂川市　大橋政良

泣き笑う死ぬまできっと活火山
かたわらでなにくわぬ顔あり地獄
隊列を自在に変えて渡り鳥
雪除くパントマイムの仕草にて
春耕の合図のように辛夷咲く

黒石市　佐藤古拙

飲むまでは殊勝な彩でいる天女
横顔を描くと鼻筋高くする
公平に裁いているかエンマ様
婆さんと言ってはならぬ処世術
老春は灰になっても捨て難い

黒石市　相馬一花

抱いている石にもあった温かさ
腹が減っているから猫は媚を売る
人形に気持ちを明かす日の孤独
街角にリストラの悲話溢れ出す
凹凸の道でも粘る蝸牛

平川市　小寺花峯

隣家との境界はなし雪の嵩
白無垢の雪だがロマン言っとれず
ちちははの齢は疾うにまたの冬
断捨離に買わぬ訓練始めよう
世界遺産テレビで旅す幸もある

弘前市　今愁女

昇る陽に合わせスズメのご挨拶
明日より今この時を慈しむ
尾っぽ立て野良猫明日の風をよむ
喧嘩でもしているような津軽弁
鎌の月ポッと暖簾の灯が誘う

弘前市　福士慕情

金魚さんいいネ睡眠見たことない
カド番で幾度も残った八百長か
借金はゼロです安堵して逝ける
歯磨きとテレビ一緒に進む朝
警報器うるさい程にチラシ来る

弘前市　髙須郷井蛙

連綿と命をつなぐこぼれ種子
老いてなお自立を目指す対茶碗
過疎が沸く太郎が嫁を連れて来る
歳月の重みと思う亡父の辞書
氷柱からしたたる春の招待状

弘前市　髙橋岳水

親きょうだいそれぞれ違う周波数
夫婦円満　我慢比べのその果ての
天使だろうか悪魔だろうか謎の美女
影法師ひとりぼっちじゃないんだぞ
サムライでありたし貸し借りはしない

弘前市　髙瀬霜石

暖冬予想列島に仇降雪魔
春を呼ぶ善行の風ランドセル
お茶好きに慣らされ妻の茶を所望
法会終え父の思い出和む宴
夢売りの自慢を早く聞かせてよ

弘前市　岡本花匠

人情の薄れ少し濃い目の茶を啜る
ふるさとはいいな夕陽が真っ赤か
つまずいた小石が化けた玉手箱
情念の涙が走る愛ひとつ
一列に戻ろう遊びすぎたから

青森県　松山芳生

政治家のよろけ具合が許せない
外人にランク付けられ泣く和食
緑内障お金積もうが治らない
養生は杖と娘に頼り切り
せめてもの取り柄素直な患者です

東京都　岸野あやめ

スカートをはかぬと決めてからララ
親不孝息子に鍛えられている
優先席に座れない登山靴
半分こするAランチBランチ
お化粧がだんだん厚くなる女神

八王子市　播本充子

旅仲間老いてそこそこ金を持ち
無縁死にうかうかのってたまるかい
残り火が消せぬ国技の恥晒し
淋しきはギリチョコひとつ減ったこと
平成のねずみ小僧に人心地

横浜市　小野句多留

いらいらが募る妻の長期留守
五分五分の健忘症で支え合い
みそ汁はシェフに負けない舌がある
立ち読みの知識を積んでひとくさり
会議するたび上げられるターゲット

横浜市　菊地政勝

お好みの豆が知りたい福の神
呆け案じ三年日誌教え子が
あと何年この世の旅の下り坂
今日もうつ残したままで日が沈み
今宵月美しすぎて何語る

川崎市　三浦きぬ

兄逝って兄のやさしさ観る他人
一本のバラが嬉しい誕生日
六度目の干支ジーパンがまだ似合う
スタンドを灯すカタカゴ二輪咲く
地産地消人が集まる道の駅

富山市　島ひかる

スカウトが少女の飛躍煽り立て
代役で主役を演じこつ掴む
修復に原画の色を探す日々
着ぐるみの中で汗して郷土売り
間違いを正す事務室作業服

静岡県　薗田獏沓

ひるまない最年少の球が跳ね
親切に弱い私を見失う
どこまでのサービスこれも難しい
立食いの串一本で温い旅
腕上げた妻の散髪大奉仕

犬山市　吉田幸子

寝た振りの孫の布団がよく動く
ナツメロの歌手にもアップ酷過ぎる
着陸はエコノミーでも一緒です
感動をして若い血を手繰り寄せ
夕方の値引きに増えた夫婦連れ

犬山市　関本かつ子

年寄りの特技ワハハで笑い抜け
大阪にまだ残ってたおせっかい
ご無沙汰へ電話魔になる雪ごもり
アンコールの拍手礼儀のようにする
一人ではやる気がしない鬼は外

犬山市　金子美千代

日足伸びそろそろ出番庭仕事
騒乱にまたエジプトが遠くなり
ガタの来る年にせめても気は若く
自分にはムチは当てないマニフェスト
カツサンドカロリーなんか気にしない

可児市　板山まみ子

真面目なら幸せなんぞ寄ってくる
B面には鼓舞する曲を備えてる
無人駅名もない山がおいでする
送り火の穴は静かに雪を抱く
筆立ての赤鉛筆はすぐに減る

京都市　坪井孝一

越えられぬ師匠の壁は真似るだけ
古傷のかさぶたとれて過去消去
遊びから本音がポロリ見え隠れ
神からの招きくるまで食べて寝て
夫の留守憂さ晴らしにか鉢割れる

京都市　藤井文代

今月も夫さかなに作句する
テレビ見て怒ってばかりいる夫
長生きしそうお世話様ですよろしくね
白旗をあげっぱなしの毎日で
大事な物二度も続けて忘れたり

京都市　西村益子

まっ先に白旗揚げて楽に生き
二階への用じゃんけんでなすりあう
若妻のトントントンは弾んでる
ありきたりの素材を生かす母の腕
待ってたよひと月遅れ咲く水仙

京都市　三宅満子

春うらら本屋でつぶす待ち時間
判った振り枯山水で腕を組む
言いたい事たんとありそな兵馬俑
原点は虫や魚を追った日々
来るだろうと買ったケーキが崩れ出す

京都市　桝本宏子

自問自答楽しみながら老いてゆく
何気なく福が寄り添う佇まい
熟年を誇るゆったりウォーキング
情熱と力で朝のスクワット
健康はこころ豊かな血の流れ

亀岡市　井上森生

健康は一汁三菜で守る
パワースポット何とはなしにめぐってる
ぎりぎりまで粘り活路が見えてくる
ばらまいてみましたバレンタインチョコ
今日はここまで切り上げるのがうまくなる

長岡京市　山田葉子

大阪市　鶴田遠野

ほんのりと愛も食べ合うふたり鍋
噛み合わぬ話は妻に折れておく
早起きで時間を貰う余命表
願い書く絵馬には齢をごまかさず
孫に読む童話に愛を教えられ

大阪市　古今堂蕉子

勢いで別れ五グラムほど未練
あの世とのかけひき今日も勝ちました
電気器具タイマー無しはもう買えぬ
十九には戻れぬ九十にはなれそう
受験子のくるくる変る空模様

大阪市　平嶋美智子

淋しい日やさしい声に捕われる
下り目があの人に似る雪だるま
新雪をきゅっきゅと踏んで故郷思う
国会中継つまらないので消しました
思案の末決めた事だがまた迷う

大阪市　板東倫子

サッカーが愛国心を呼び起こす
大阪へチョット買物中国人
節分の豆で一杯呑む親子
孫がねだるタイガーマスクのランドセル
老いらくの恋には色がついてない

大阪市　中村叡子

虎落笛窓のガラスが震えてる
先生は何を聞いても歳ですな
節分に豆を撒く声聞えない
今は夢湯治あちこちした事も
携帯が夢を毀した大相撲

大阪市　奥村五月

幸せにすると言ってた夫介護
明日こそと祈る心に日が沈む
ダイエット効果をためす試着室
年金にカニ蟹かにと来るチラシ
内定が消えてニートがまた一人

大阪市　岩崎公誠

ライバルの知らぬ角度で楽に生き
デッサンの不出来すべてをやり直す
先生は先生らしい本を読め
魚屋が勝手に決めたさかなの日
返還へ国旗をもっと強く振れ

大阪市　佐藤忠昭

病院で忍耐心を培養中
魁傑よ難局解決名を残せ
政局も相撲も火山も中途半端
自信持つ男の声は力ある
時計見てもう一軒の声を待つ

手弁当の仲人好きが見当らぬ
青空多い浪速の冬よありがとう
子や孫のお陰で育つ家族愛
未知の老い妻がいるから怖くない
ガガガガーンベートーベンで気合い入れ

大阪市　田浦實

ひとりにはひとりの暮しおでん煮る
春が来た少し派手着て紅もぬる
人工のわたしの膝は出好きらし
憎まれぬようにと心砕きます
身の回り自分で出来てどっこいしょ

大阪市　津村志華子

趣味多彩賞味期限を引き伸ばす
だんらんに心の鍵は開けたまま
ビールより熱燗がよい掘炬燵
手の平に慣れて世間を甘く見る
少年の画布は無限の青い空

大阪市　小谷集一

悠悠と生きてる素振り見せて酌む
肩書きがないから何もかも気楽
奈落の底でむかし素うどん旨かった
道草よし余生じっくり歳もらう
つい寄った止まり木今は指定席

大阪市　吉村一風

神様の戸惑う外貨お賽銭
合格通知家中の顔晴となる
感動が薄れるだろう大相撲
日に一回磨くだけの歯医者褒める
六匹連れ三匹つれと立話

大阪市　澤田定子

いい酒に出合うと味蕾笑い出す
強欲が罠の匂いを消している
持病とのトーナメントが終らない
聞く耳を持つから喧嘩いつも負け
ロボットもやがて有給とるだろう

大阪市　升成好

沖縄に基地押しつけは止めんかい
敬老パス継続予算ありがとう
エジプトのデモの波動が日本にも
新燃岳あなたの怒りわが怒り
生き埋めのニワトリの声聞こえるか

大阪市　近藤正

青畳美し過ぎて落ちつかず
目が覚めて命あること確かめる
恩返しするため自分磨いてる
頑固な父小さくベッドいとおしい
お茶席で一足早く春を見る

大阪市　榎本舞夢

大阪市　松尾柳右子

ふかし芋二人で食べるからうまい
結婚式縁者が集い姦しい
目薬が眠気をさます午後三時
歯磨きをすると電話のベルが鳴る
散髪をした息子から笑み貰う

大阪市　江島谷勝弘

いつの日かドンと風穴あけてやる
散髪屋臨時休業したまんま
紺碧も群青も陽があってこそ
閻魔さまもうしばらくは呼ばないで
デモだけで政権変わるアラブ国

大阪市　伏見雅明

ふるさとの山河を信じ汽車に乗る
家からの仕送りを待つ出稼ぎ者
人混みで拾った恋を届けでる
無駄だまと見せておとこの深い読み
流行語ナウい期限がすぐに切れ

大阪市　坂裕之

里山で遊んだ頃は美少年
名も知らぬ花がしっかりせよと言う
なにくその根性だけで走ります
暇そうな素振りは見せず小商い
仲間ならミスをみんなで庇うのに

大阪市　榎本日の出

笑顔ならあちこち配る自信あり
誘われて断る言葉出てこない
十年後のことは考えないと言う
高いのがご馳走でしたカニコース
両方の意地と意地とがにらめっこ

大阪市　小糸昭子

啼き声で春が来たなと猫の恋
大寒が来たもうすぐに立春だ
お笑いと料理グルメで腹膨れ
鳥と灰しかし戦車よりましか
賞められて煽てに乗った三枚目

大阪市　熊代菜月

冗談にされてしまった妻の愚痴
辛い日はなぜか指輪が重くなる
天国にメール打ちたい雨の夜
真っ直ぐに生きた男の嘘一つ
春待たず枯れてしまったレンゲ草（友の死）

大阪市　池上清治

花愛でるゆとりの無さをいつも悔い
川柳を楽しむゆとり宝もの
民衆がワンマンの首すげ替える
大発明一歩遅れて使われず
一流塾に行かせてみたがフリーター

人の世に添うて陽気に立ち泳ぎ
新しい道へ挑戦する傘寿
思い当る節ありじっと聞いている
生き方の違い心のサプリ欲し
高齢社会ぽっくり寺がよくはやる

大阪市　小泉ひさ乃

うさぎ雛作り飾れるまだ女
早々とテレビで土筆つちを割る
疲れると死んだ長女の年数え
ありがとう一言わすれ気が重い
シルバー席ぐちの言い合い胸洗う

大阪市　吉内タカ子

セールスの成立靴を履きつぶす
着ぶくれて昭和の時代懐かしむ
前向きに愛されたくて化粧する
くちづけの位置に歯医者の白マスク
夢をまた繰越しにして年重ね

大阪市　寺井弘子

お日様に背中預けて縁でお茶
穏やかな暮らしを語る水の音
結局は朝の光でふっ切れる
老木に咲く花倣い消さぬ夢
雪国に届け青空この日差し

大阪市　原田すみ子

少子化に犬が抱きぐせつけられる
セールスへ礼儀教えるおばあちゃん
パソコンの中で繋がる縁が増え
隠し場所変えてへソクリばれました
お喋りな雀に聞かす子の出世

大阪市　大川桃花

初心者は決めた布石で押し通す
肩が凝る青葉マークの助手の席
一心に参道進む素のこころ
柏手にすべての思い込める母
神木に触れて命が奮い立つ

大阪市　岩崎玲子

ひからびた恋ごころにも春の雨
町工場油まみれの汗光る
月並みな男とゲームセットまで
無駄だった事も私の一ページ
ここいらで背筋のばして深呼吸

大阪市　中井萠

引退という逃げ道は閉ざされる
距離おいて見ればすべてがああ喜劇
過去形にすればなんだか懐しい
めでたさより区切りとしての誕生日
喜寿という指標へ走り出す暦

池田市　栗田久子

スーダラを歌い機嫌のよい日暮れ
耳鳴りは気にしなければ鳴ってない
華語韓語目立ってさすが東大寺
泡も立ちノンアルコールとはいいね
ジャンボ来い寄付の行方は決めてある

泉佐野市　山本蛙城

物思い一本指で弾くピアノ
前祝いやと悪友の紙コップ
二度の職薄い酸素を我慢する
蟻の列遅い一匹俺に似る
父さんが再起不能にした玩具

茨木市　藤井正雄

クニマスを挙げて陛下に誉められる
無職とは粋なものなり酒昼寝
深呼吸して春色に染め直す
補助金に踊り財布が閉まらない
長生きを明治生まれはすまながり

茨木市　島田誠一

地球上いつも何処かで揺れている
ご近所のニュースが切れる冬籠り
断捨離につられ要る服まで捨てる
測るたび背丈だんだん縮んでる
相槌を打ってその場を丸くする

大阪狭山市　矢野梓

水仙が春を迎えに寒い朝
時々は口をとがらす妻と居る
リバウンド昔のズボン出してくる
冬型が続く天気も経済も
血圧計たまに良好ですと言え

交野市　森本弘風

酷暑大雪噴火に花粉不況風
悪知恵はまだ回ります元気です
エコポイント当てこみ春のペアルック
盛り場に揉まれいのちの大掃除
幽玄の庭に馥郁茶のこころ

河内長野市　村上直樹

触れ太鼓鳴らぬ谷町春おそし
温室の角界に吹く寒い風
雪国の辛さを知れと雪積る
冷暖房テレビもあってよい余生
デイサービス巻き寿司いわし豆もまき

河内長野市　水谷正子

今年こそ跳んでみせるぞ兎跳び
つかんだと思った幸は露のよう
露天風呂ひと汗流し句の世界
渋滞でバックミラーに救急車
党移り大臣席にとテクニシャン

河内長野市　黒岩靖博

怖かった手術麻酔で夢の中
オペの痛み知っているのは待つ家族
術後の夜痛み伴う安堵感
オペを機に亭主関白返上す
退院日乾盃しょうと言う煩悩

河内長野市　坂上淳司

久し振り街が落ち着く冬の雨
大雪と噴火は地球の非常ベル
ピンチには居直る度胸で今日を生き
マニフェスト動かす知恵が無いらしい
携帯へメモを残すと恐しい

河内長野市　井上喜酔

冷蔵庫膝で閉めてる孫二歳
お笑いも時代遅れか退屈し
話が合う合わされているとも知らず
通院は休まずつづき十四年
会ったことなくてもわかる温かさ

河内長野市　植村喜代

家ぐるみの歓迎されてジンとくる
悔い一つ消えない夜の寝つかれず
本心が言われぬ弱さ今も悔い
歩いてる後姿を褒められる
流行に抵抗でなく旧を着る

岸和田市　原さよ子

八百長がばれてよかった大相撲
創造の神笑ってる領土揉め
うす味の病院食にギブアップ
海外の修業身につくプロサッカー
牛に鳥噴火宮崎三重苦

岸和田市　井伊東吉

丸かじり寿司は一口だけにする
携帯に振り回されて疲れ果て
幸せを数えて生きることにする
私もお役に立てることしたい
雪除けも知らずに暮す果報者

岸和田市　堤楢代

新社員パソコン操作大先輩
新年に竹馬の友が空に消え
御世辞でもまともに受ける可愛いい娘
花粉降り黄砂も灰も襲い来る
天災が人の絆を強くする

岸和田市　森元ふみよ

ロマンスはまだ間に合うよ後期でも
笑顔の裏にあるかも知れぬ頼みごと
ハグはもうしてもらえない一人者
夫婦の隙間うめてくれてるペット達
鶴彬今の人ならイケメンだ

岸和田市　土橋房枝

岸和田市　雪本珠子

好奇心バッグに詰めて旅に出る
介護ってゴール見えないマラソンだ
お洒落にも自分自身の哲学が
遠ざかる影は追わない事にする
浮き雲が別れた人の顔に見え

堺市　村上玄也

一つずつ部品壊れていく身体
脳だけは故障しないで欲しいもの
症状の出ない病気はほっとかれ
病気ではないと自分に言い聞かす
外見は元気に見えるのが救い

堺市　宮本かりん

年毎に自分の殻が厚くなる
大ぴらに本音を言うて高笑い
眠れない時によく効く本があり
あと押しをされてやる気が失せてくる
伸びてゆく双葉が笑い出す日和

堺市　加島由一

深酒を叱ってくれる人もない
淋しくてみつをの詩を手離さず
お転婆がトイレ掃除をやり出した
中締めで残る支流派日和見派
見渡して美人の横の席につく

堺市　西村りつえ

一年分の笑いで閉じた初句会
気に病まぬ母の遺伝子宝です
三面鏡にポーズとってる誕生日
ラストまで匂う女を夢みてる
永遠誓い君にまかせて揺れている

堺市　源田八千代

梅園が日々賑わって行く二月
どか雪に戸惑う大阪の媚
雪の日もごみ収集の有難さ
惜しい人の葬儀に無情雪つもる
少子化を見据えた策を何故執らぬ

堺市　矢倉五月

考えも無く飛び蜘蛛の巣にかかる
突き通す嘘は相手の目をみつめ
十年来飲んでる薬名が言えず
光熱費思い寝室共にする
新聞に葬式代のリスト載る

堺市　奥時雄

耳遠いので曖昧に笑っとく
字幕入りテレビで遅れ取る笑い
サウナ風呂好き嫌いではない寒さ
近所では真面目な人で通ってる
一言で済む一日を書き止める

妻の方がやっぱり我慢強かった
マドンナも孫自慢する同期会
なつメロを歌ってからの自己嫌悪
家中を取り仕切ってる電子音
詫びに来て無駄口だけを置いて去に

堺市　柿花和夫

本人のためになるなら言いもする
肉らしきものも見付けたカップ麺
堂々としてるやつには変化球
命名の通りなるとは限らない
もう古希かまだ古希なのか迷ってる

堺市　大隅克博

桜散る一期一会と掌にうける
衰えのとどまることのない頭
真心にふれて豊かになる心
幸せと思えば花が笑み送る
酒ぐせは悪いようだがお人好し

堺市　大久保のん子

スケジュールに合わせ今年もあるき出す
三世帯がまず元旦に揃う膳
成長に合わせる孫のお年玉
損をする気で働くと運が向く
正月は一人でいるとつまらない

堺市　遠山唯教

タイプなら子持ちでもよしプロポーズ
腰痛が美人に席を譲ってる
炊き立てをどうぞと上げる神仏
じっとして待つほど長いことはない
日没を待ってましたと酒の燗

堺市　荻野像山

うっとりと菩薩の指に見惚れてる
まじめですし貧乏ですしもてません
手は抜けぬ隙ついてくる風がある
車座になっても目立つのは目立つ
野次飛ばす方も妙案あるじゃなし

四條畷市　吉岡修

過ぎし日のお面が部屋の隅にある
湯豆腐がゆらり怒りが解けていく
無農薬自負の名札がつけてある
今一番幸せという自由席
母のまえ前触れもなく泣けてくる

吹田市　大谷篤子

勘違いと誤解ばかりの花ぐもり
華やかに春を演出　靴帽子
前略中略後略老いてゆく
新しい記憶が先にぬけ落ちる
冗談に少しピンクが足りないな

吹田市　山本希久子

吹田市　野下之男

独裁はええもんらしい三十年
タイガーが愛を込めてるランドセル
「ふるさと」を歌えば妻も唱和する
至福とはベランダで見る桜です
オウムにも背中向けられ何だろう

吹田市　須磨活恵

残高と平均寿命目算す
親と娘で違うさだめの道歩む
草の実が絡み絆がたち切れず
決心がついて心の荷がおりる
くり返す暮しの中の罪と罰

吹田市　木下敏子

にこにこと老いを楽しむ彩を溶く
寒の水飲んで命の目をさます
もう一度ふたり飛びたい春の空
元気なら雪もうれしい福寿草
しっかりと咲いて散り際飾りたい

吹田市　瀬戸まさよ

花の四季愛でて詩人の育つ国
窓からは桜並木に生駒山
北斎の大波しぶきまでかかる
涙拭くハンカチでなく膝に掛け
雨の日も地下鉄地下街アーケード

高石市　浅野房子

日足伸び少し心がほころびる
切りのない愚痴聞きあきた言いあきた
助かった命いいやら悪いやら
亡き友が時時夢に出てくれる
川柳にとっぷり浸り黄昏る

高槻市　指宿千枝子

雪の中よく来てくれたジョウビタキ
失敗も無駄もあるから頑張れる
よく食べてよく跳ねているおばあさん
喜寿の坂越える体操しています
ぐっすりと眠れるパジャマLサイズ

高槻市　乙倉武史

赤飯をチンして祝う建国日
日の丸にばかりに罪は可哀相
独裁の末路哀れはよその国
球春だまさか八百長ないだろー
難事件監視カメラの世話になる

高槻市　佐甲昭二

一石を投じ波紋を見極める
さりげないジョークが空気和ませる
アイディアがひらめき社運取り戻す
原点を守る八十路の心意気
定年の机に火種まだ熱い

高槻市　峯村勳弘

山笑う登る私の足笑う
カルチャーの梯子ゴールは縄暖簾
享年を越え越えられぬ父の背な
メモリーに残したくない過去がある
治政への怒りか噴火　大雪禍

高槻市　富田美義

脱け殻にサプリを打って生きている
補助エンジン頼りに余生いきてゆく
薄墨で描いた明日が似合う僕
エンストを挟み余命が狂いだす
鍵を掛け自分の殻にいる安堵

高槻市　杉本義昭

スカイツリーするする天に伸びて行く
共に泣き笑いも出来る友招く
大根の太さよ嫁のたくましさ
病癒え窓辺に母の好きなバラ
国民を見ないでメモを見る総理

高槻市　井上照子

墨の香が好きで筆とる和敬静寂
改革の痛み財布を薄くする
掌に薬いろいろ今日生きる
蹲いて厳しい世間の中泳ぐ
高齢と見られたくない背を伸ばす

高槻市　安田忠子

カニツアー帰路はホワイトクリスマス
究極のお洒落はやはり白と黒
初化粧老いを繕うお正月
歯痛になり他の痛いとこ皆忘れ
近所の子少し見ぬ間におとこまえ

高槻市　片山かずお

花暦どおりに鍬を振るう趣味
口だけの手助けならば足りている
労いの言葉に代えて肩に手を
もう二階なんか要らんと膝が言う
あなたにだけですよの声に弱くって

高槻市　左右田泰雄

ちゃっかりが板についてるつまみ食い
高らかに米寿を祝う初御空
ほほ笑みの形を残す片えくぼ
忘れたいことがあるから海を見る
むづかしいクイズやさしい顔で解く

豊中市　江見見清

慣れっこになった余裕の遅刻ぶり
無駄遣いの解釈妻と食い違う
古本屋の書架から友の声を聞く
笑い袋破れたままの一周忌
おばちゃんは喋りながらも聞いている

豊中市　松村里江

止まらないルンバを踊る心地よさ
口裏を合せた人が来てくれず
来し方よ何度荷くずれ直したか
子の巣立ち請求書だけ置いて行き
心地よい疲れ宴の後始末

豊中市　藤井則彦

耐え難い言葉も笑いながら聞く
次の日が何とも旨い休肝日
清潔が過ぎてひ弱になるヒト科
四月一日嘘は一度も吐いてない
松園の描く横顔に立ち竦む

豊中市　安藤寿美子

いつもの薬飲んだかどうかわすれてる
閑人も日脚の伸びはほっとする
孫のような男にチョコを渡してる
罰として七転八倒して死のう
どうしても老残の句になってくる

豊中市　水野黒兎

留守をして声を掛け合う路地の春
真っ直ぐな道は旅には味気ない
思い出でまるくふくらむ旅カバン
リズム良い鼓笛隊めくチューリップ
砂漠化の警鐘として黄砂降る

豊中市　松尾美智代

わたくしの味は只今修業中
母の味具がいっぱいのお味噌汁
自分という敵に挑むが手強くて
兄弟の元気たしかめてる年忌
自然の中素直な気持わいてくる

富田林市　片岡智恵子

頑張りすぎず少しがんばる老いの鞭
老いた友賀状は今年限りとか
触れ太鼓なにわの春に聞こえない
自殺の子死ぬより怖かったいじめ
さみしさと隣り合わせの無為無策

寝屋川市　太田とし子

押し車商店街を独り占め
好きな神きらいな神も祀ってます
大阪弁で食わなタコ焼旨くない
雛祭り花屋は四季を食いつぶし
力士たち大きな腹をどこに置く

寝屋川市　森茜

成人式孫へ九条確と告げ
恋人を呼ぶ声光る春の朝
てっぺんの雪に紅さす生駒山
こごえながらひそひそばなし聞いている
決心の返答夕方まで伸ばす

寝屋川市　平松かすみ

目標のお方が逝った小正月（北田一笑さんを悼み）
凛として白寿の坂を越えたのに
長生きはテクテク行った女学校
手押し車へお花一杯みんな笑み
三十年初心者教室からの仲

寝屋川市　籠島恵子

こころここにあらずとシャボン玉消える
哲学のテの字も持たず生きている
昨日まで許されていたうっかり
覚えておこう今年の方位南南東
雪の予報に怯む男に茶を入れる

寝屋川市　冨山ルイ子

句会行きかけがえのない友に会う
うっかりが続き年だなと納得
夢深く抱いて磨いている心
永田町魑魅魍魎の世界かも
議員減歳費減にも賛成だ

羽曳野市　安芸田泰子

生きていればいいことあるさ春うらら
花には花風には風の春のうた
一センチの段差に敗けた老いの足
すぐ誘いに乗って後悔ばかりする
約束のコール三度は老母の無事

羽曳野市　永田章司

閉じた口政倫審も開けられず
両隣不思議と馬が合いません
政権をとって足枷マニフェスト
たかがゲーム子供に負けてもういっちょ
婚活を親がしゃかりきセットする

羽曳野市　吉村久仁雄

周到な終の支度が元気くれ
惜別をバスは黙って待ってくれ
ポケットを探れば野心ばかりあり
もう一年生きよと里の祭り笛
保護色をまとって世間渡り切る

羽曳野市　徳山みつこ

頬紅でちょっと元気を足しておく
どっこいしょやはり飾ろうお雛様
孫去って赤い歯刷子だけ残る
生きるとは白を汚して白い骨
不況の嵐でところによって晴

羽曳野市　三好専平

雪女郎抱きたや老いの夢のはて
元旦の餅をグラムで食う病気
行儀作法教えてくれる人がいず
直売の林檎バケツで買うてくる
ウソとニセ　デモとデマとが跋扈する

点滴が取れて食欲出始める
命掛け愛と憎しみ紙一重
税還付元を正せば俺のもの
年度末暇な自分ですみません
お豆腐は値段の割に重すぎる

羽曳野市　酒井一壺

耳学はラジオにまかす老いの坂
三月の雪は絵になり詩になる
まず一歩ひもを結んだ春の靴
亡母の味守り続けて五十年
おはようと仏に朝の御挨拶

羽曳野市　福田悦子

太陽になったわたしの好きな人
真っ直ぐに生きて時間が足りません
水仙の香りに春の音がする
正直で優しい人で隙だらけ
飾らない人と直感したメガネ

阪南市　森村美花

窓が好き青空一ぱい見えるから
寒の水いただき今日も生かされる
海の中日本の基地はゆらいでる
バレンタインどなたにチョコをあげようか
時に身をまかせ歩いて終焉へ

東大阪市　米田水昇

留守電に私の希望入れておく
出る幕は捨てて我が身を軽くする
相撲道こころの奥は軽かった
テレビ見て心配事が増えてゆく
寒い日は猫と昼寝のしあわせ度

東大阪市　中岡妙

甘言の罠に掛かって抜け出せず
ぎりぎりの暮らしの中の知恵袋
当落のすれすれにいる対抗馬
八百長に国技の館崩れ落ち
閻魔様極楽行きは幾らです

東大阪市　佐々木満作

関白も今厨房に入るべし
差し向かう一日なんと長いこと
食べて寝る暮らしを変えた塔の灯よ
防犯カメラゴミ出す朝も見繕い
ドキドキはもう恋じゃない病気です

東大阪市　北村賢子

才能を花開かせるほめ上手
水仙の香りが癒す淡路の湯
雪が舞う肌にふわりと露天風呂
毎日をまあるく生きて医者いらず
深呼吸してわだかまり吹き飛ばし

枚方市　二宮紫鳳

諦めた恋が一番光ってる
行間に詰めた心が届かない
過去を掘る埋蔵金を掘るように
すき間風少しずらしてミカン剥く
へそくりがひょっこり顔を出して春

枚方市　伊達郁夫

雑草に生きる糸口教えられ
本音出し合える友いて酒うまし
無駄めしもいっぱい食べて喜寿を越え
相合傘相手濡らさぬよう苦心
世話好きにまだ引っ張られ趣味の会

枚方市　安達忠央

的を射た苦言わたしを知りすぎる
謎をとく鍵はしっかり母が持つ
群れから外れロングドレスが寂しがる
お元気ですかお便りほしいあなたです
菜の花が咲くころ逢ってくれますか

枚方市　小林わこ

目立たない人が自分を持っている
我家の諭吉家出が好きとみえ
聞きたいが聞かずにすます思いやり
背中みて言葉はいらぬ師の教え
今日もまた夢を形に励む趣味

枚方市　二宮山久

老人のアバンチュールに薫る梅
嫋やかな梅に唇触れている
目と鼻を撲ぐる盆梅展の寺
仏壇にかしわ手を打つ受験の子
煮凝りの皿舐めているクスリ指

枚方市　丹後屋肇

ふられた恋は冗談にすり替える
一枚あれば有難い福沢諭吉
ストレス解消息子の部屋を大掃除
喜寿傘寿どのお顔にも鬱が無い
雪やこんこん程度に降ればいいのにさ

枚方市　寺川弘一

ぽっと桃心を春にしてくれる
巨大木神と仰いでみたくなる
お金持ちかセコムのシール貼ってある
アメリカの傘ずっしりと基地の島
背を伸ばし歩いて欲しい影法師

枚方市　海老池洋

節分は固い豆より恵方巻
逝った父思って食べる鰆の味
暖かいみんなの歩幅ゆったりと
断りたい後援会を頼まれる
重い蓋膿が出て来た大相撲

藤井寺市　吉田喜代子

藤井寺市　若松雅枝

マスクにカイロ持たせ入試に送り出す
亡き夫に聞きたい事が一つある
父の忌に父の知らない顔が増え
路地裏で優しい声の人に会う
靴底に春の音聞く土手の道

藤井寺市　増井ヨシ枝

犬連れて春を探しに散歩道
トンチンカン　アハハと笑う今日は晴れ
お逢いしたい追伸にある微熱かな
女の仕草きっと妻ではない人だ
歳としと言わんでほしいまだ古希よ

藤井寺市　俣野登志子

うそかえの鳥に梅の花一分咲き
一人旅ホームシックは言わんとこ
待ちきれず小さい春をさがす旅
行きたがり帰りたがりのお供して
ゴミを出すだけで妻からありがとう

藤井寺市　津田シルク

節分の鬼も欲しがる貼るカイロ
鬼はーうち独り住まいの豆をまく
子の遊び鬼が一匹まぎれ込み
厚化粧の鬼が酒場で待っている
激動を耐えて食した芋のつる

藤井寺市　伊藤アヤ子

我が家には可愛い鬼が豆をまき
柊に厄除イワシ差しておく
紅梅が咲きほっとする温かさ
体だけ大きくなって行く子供
うちの人ドナーになっても良いと言う

箕面市　広島巴子

美人の湯鏡ほどよくぼやけてる
それなりにうっとりしてる美人の湯
積雪に旅行気分で友とお茶
ほろ酔いにやさしく撫でる雪の精
梅一輪ストーブつけて開花待つ

箕面市　出口セツ子

何年も経っても亡父に詫びている
孝行もできず逝かせて疼く悔い
良く行った店で捜してしまう影
旅好きの亡父忍んでる夫婦旅
いつか逝く道だが覚悟まだできぬ

守口市　井上桂作

貧しさに初めて銭の尊さを
旅終えても残る人生夢すてず
核管理行方気になるこの頃は
独裁と宗教支配中東は
政変にエジプトデモで大さわぎ

八尾市　寺川はじむ

タレントが儲け楽しんでるクイズ
出来過ぎの野菜近所へ押しつける
鶴亀よ叶え過ぎだよ長寿国
ちゃん付けの歳呼び戻すクラス会
開かれた政治こんどは締らない

八尾市　髙杉千歩

王将の無料券が残ってる
パソコンに頼り乱筆から逃れ
携帯の会話楽しむ老い独り
落とし紙日本語なのに通じない
この国を任せる顔が見当らぬ

八尾市　内海幸生

綺麗だね花言葉など知らぬけど
クリオネに着せてあげたい絹羽二重
そうなのか　そうだったのか亡父の筆
単細胞これも個性よええやんか
裏をよむ癖がなかなか直らない

大阪府　桑田ゆきの

祈願する絵馬吊る枝も恵方向き
おもむろに侘び寂悟るお茶の席
角界の伝統文化尾が切れた
快闊な歌声春を待っている
前向きが一家団欒灯が温い

大阪府　米澤俶子

年金で充たせるほどの小さい夢
ストレッチ明日のための螺子を巻く
白梅の凛と美人の佇まい
シンプルな暮らしに湯豆腐が温い
呆けたのかもう暗示にも掛らない

大阪府　野田栄呼

白髪の自然に生きる人習う
足腰の悪さカバーは口でする
本棚に積んでおこうか燃やそうか
学友と血縁超えてある絆
亡き母の着物へ気風甦る

大阪府　籾山隆盛

百態の雲にわが身を重ねてる
里ぐらし四季と絆が離れない
見栄だけじゃないよ花には甘い蜜
人を恋い人を憎んで仰ぐ天
満天の星へ昴を口ずさむ

神戸市　木村貴代子

婿が拵き孫がまるめた餅の味
神風に懲りて政府を信じない
五輪万博歌った頃が目にうかぶ
良い時期に生きたか昭和戦中派
学校の中にも起るつむじ風

神戸市　山口美穂

国会はあら探しして日が暮れる
寒いから引籠りです長電話
奥の手を仕舞うたはずが出て来ない
マスク眼鏡挨拶されてどなたさん
オブラートで包んだ言葉胸を刺す

神戸市　山口光久

ときどきは誤作動おこす歳になり
あの頑固孫の笑みにはかなわない
転んでも手を差し伸べてくれぬ妻
堅実なパパは尺取虫に似る
里恋し鮭もわたしもブーメラン

神戸市　伊勢田毅

ふぐ提灯みぞれの町に灯をともす
天井の隅で病んでる冬の蠅
日の丸の国旗を見ない建国日
花粉症予報で今日の計を樹て
支持率のジャブがじわじわ効いてくる

神戸市　山崎武彦

大物でないが僕には過ぎた妻
大物もにこにこ孫の馬になる
来し方はファイナルセットまで続く
ランドセルもうライバルを決めている
春の陽に包まれ毬はよく弾む

神戸市　早川孝子

乗り越えた涙の後が光り出す
気温差についていけないひと休み
あこがれの町に生きてる弾む声
こぼれ種力貯え春を待つ
あこがれが再チャレンジの種をまく

神戸市　山田婦美子

九十八歳生き字引です母の知恵
困ったら姑のボタンを押してみる
無駄になど出来ない姑の顔の皺
亀の甲より年の功だと言う理屈
山越えた数だけ光る人の徳

神戸市　田中章子

九ちゃんの歌があふれる台所
いい姑になるのはよそうマイライフ
震災のテレビは見ない後遺症
海外に出るとわたしも太っ腹
UFOもあながち嘘でないらしい

相生市　中塚礎石

川柳を命の余白埋めていく
平和すぎ戦地のことは語れない
不器用が金賞もらう孫の図画
すぐ怒鳴る男が掴む主導権
気にすまいとはいうものの底のぞく

日溜りに振り子の揺れる日の惰性
ファイト湧く言葉自分にぶつけてる
レモン味包んだままで恋終わる
切り出せず目で追う君のプロフィール
興味ない話へ距離を置く磁石

明石市　糀谷和郎

人生のひとり芝居がまだ続く
初対面ほどよい距離でお茶を飲む
生まれきて人それぞれの晴れ舞台
サイン捺印うっかりとした恐ろしさ
今更と思うがあやまっておこう

芦屋市　黒田能子

大切な前歯抜かれて笑えない
戻り寒猫が炬燵を出てこない
娘が作る味噌汁の味亡妻に似る
老いたれば猫と留守番頼まれる
老春に雑音の風少し吹く

尼崎市　林昭三

また一人抹消をする清め塩
父似いや母似と姉妹かしましい
姉二人にも半生という月日
はんなりと娘と話しこむカフェラッテ
筆力は落ちたが安堵する手紙

尼崎市　長浜美籠

どこにでもありそうだけど土産です
用事ないけどと電話を掛けてくる
ほんとうの閉店セールらしい店
ハイキングだんだん低い山となり
十年も使わぬものがたんとある

尼崎市　山田耕治

春の使者よもぎぜんまい蕗の薹
遺伝子のリレー日本のサクラ咲く
癖のある絵にはわくわくする魅力
傾いた地球を巡る四季の花
世の中を上手に泳ぐ褒め上手

尼崎市　加川靖鬼

好奇心大きな罠が口を開け
若者の省略語には首ひねる
有名だけが自慢の議員多すぎる
わだつみの声に命のこだまする
病にも挑戦をする命あり

尼崎市　藤岡りこ

当選の賀状笑顔でする電話
エアコンに贈る年間敢闘賞
冬籠り解けて生き生き万歩計
思い出はみんな楽しくなる老後
八百長と言う日本語の奥深し

尼崎市　軸丸勝巳

伊丹市　山崎君子

胡蝶蘭二月の風は冷たかろ
旧正月台湾なつかし青い餅
早や二月逢いたい星はどのあたり
今日もまたあなたと話す指輪見て
早や米寿ベッドで迎えるさびしさよ

加西市　金川宣子

二次会を蹴って帰れば妻子留守
阿吽の呼吸畳んで行き違う
本音しか言えない二人すぐ喧嘩
実力もそこそこなれば替える趣味
割り勘に一口飲んで寝てしまい

川西市　米原雪子

自己流に痛みが謀反気付かせる
やんわりとでもしっかりと伝えられ
しっかりと保管されてた不要品
こだわりが解けてほんわり酔い回る
身だしなみすっきり今日は面接か

川西市　西内朋月

河豚刺しで鰭酒を飲む寒い夜
ど忘れの名がやっと出た仕舞風呂
間違って覚えた漢字直らない
路地裏に潜むわたしの秘密基地
午後八時半額の刺身で晩御飯

三田市　福田好文

目覚めたら妻に曜日と天気聞く
詳しくはホームページと言われても
高くても痩せる薬は良く売れる
初めての主役演じるお葬式
そう言えば十万銀貨寝たまんま

三田市　臼井二英

何ひとつ策もないまま今日も生き
欲しいもの何にもなくて散歩する
棲み分けのルール破ったのはヒト科
不況風叱られそうな四月馬鹿
それほども感動せずに出る涙

三田市　石原歳子

草餅を頬張り春の匂い嗅ぐ
やがて来る独り暮しの設計図
春を待つ人に逆らう杉花粉
子が揃い茶を刻む音賑やかだ
寒くても色紙の梅は満開だ

三田市　上垣キヨミ

相好を崩し親爺も貰うチョコ
検診の帰りはひとりお汁粉屋
探し物叱られながら嫁に聞く
一張羅老大デビュー日の目見る
まだまだともしもを叱る友が居る

三田市　久保田　千　代

食卓の上に妻からチョコレート
ごめんねが言えず沈黙まだ続き
突破口つつくと嘘があふれ出る
リハビリに手頃な散歩道がある
政治不信底なし沼に続く道

西宮市　藤　本　　直

俺のテレビ地デジ落書きやめてくれ
年共に重さの増える人と居る
まっさらな風と花びら誘いかけ
明日生きる小さな夢があと一つ
国民の前で姑息な口喧嘩

西宮市　片　山　　忠

戦争を知らない人の平和論
地獄まで行けば何とかなる日本
O型で強気の姿勢崩せない
不作為をなじる資格がありますか
腹式呼吸テレビを真似てやってみる

西宮市　山　本　義　子

空腹の穴あめ玉で埋めておく
落ちつけば抜け穴きっとあるのです
身すり抜ける幅だけあけて冬障子
舗装割る芽吹きはいちず天目指す
いい夢見しっかり壺に詰めておく

西宮市　緒　方　美津子

おこりながら七種粥は炊けません
落ちてゆく白髪は太く艶もよし
この季節すべてキャンセル花粉症
老いてゆく脳の先行許すまじ
ふるさとのシャッター開けたゲゲゲのゲ

西宮市　足　立　　茂

正論が相手の立場見失う
悪いけど選ぶ権利は私にも
デパ地下でつい買い過ぎた空腹時
老害が伸びる芽をつむ人事権
初出勤スーツのボタン全部掛け

西宮市　秋　元　て　る

針はもう持てぬが箸は日に三度
千の風亡き息子は今も忙がしそう
不満もあるが捨てる気持もないこの世
炬燵から憂国のＴＥＬ寄越す老友（とも）
沈黙は金だった日は辛かった

西宮市　牧　渕　富喜子

割り切って悲しきものを手に余す
戦争を知らぬ世代も六六歳
卵割る鳥インフルの鶏おもう
おもいしる時をもらっているらしい
春立ちぬ窓へいっとき夕陽さす

赤着てもやっぱり我等老夫婦
タンス預金動かし国のため尽くす
身すぎ世すぎ我身一つのストレッチ
ドカ雪の地へご苦労を投函す
ブタマンを買うて本屋へ立ち寄れず

西宮市　亀岡哲子

至福だなバァバと言われほくそ笑む
麻生夫人猫好きと知りなお好きに
手に入れた仔猫の仕草真似てみる
民話の味遠い昔を呼び戻す
雪の舞う日生れたと言う亡母の声

西脇市　七反田順子

婚活も兼ねております福娘
青春切符新快速を意識する
鯛焼をアートの指が鷲掴み
焼き鰯節分らしい病院食
バナナ二本留守居の御八つ置いてある

姫路市　古川奮水

喉仏ほんとの事を言うてるか
眉うまく引けてビールを一気呑み
この位置は鬼門南天植えておく
祥月命日ゆっくり経を読み
ワンカップ手柄話にまだ足らぬ

奈良市　天正千梢

まず一献禁酒の誓い揺るぎだす
一からの出直し誓う雪の朝
里からの土までぬくい旬野菜
路地裏はいつも昭和の匂いする
遅しく孫は一の字太く書く

奈良市　米田恭昌

丸くなり丸くなりふと逝き給う
桜咲き孫の門出を祝う朝
突然に青年になり目を瞠る
皺としみそれは勲章だと思う
天も山も鳥も怒りを込めている

奈良市　阿部紀子

淑やかにしてます挙式済むまでは
嫁さんに甘い息子で波立たず
半世紀経って空気となる夫婦
傘寿越えピンコロ願い寺参り
大銀杏白星買って締めている

奈良市　岩本浩二

元日もみんな帰って老いふたり
ブランド好き妻から僕に飛び火する
極寒にミニスカートが震えてる
締められて悲鳴をあげるお小遣い
祝日のダイヤ知らずに待ちぼうけ

奈良市　辻内げんえい

橿原市　安土理恵

春あらし大阪場所が吹っとんだ
唐草のふろしき誰か隠れてる
税務署のあいそ笑いがねばっこい
ひかえめに咲こう遅蒔きだったから
リベラルな夢へ踏み出すルームキー

生駒市　飛永ふりこ

最後まで魂研磨師の賀状（玉利三重子さんを悼む）
川柳の気骨ほれぼれ師を仰ぐ
ネガティブを春一番が覆す
不意打のボディーブローがど真ん中
シュプールに愛犬駆ける幻が

奈良県　渡辺富子

花だよりさあ出陣と背を伸ばす
甘い呪文かけて春呼ぶ化粧水
眠ってる闘志をノックする手紙
死ぬ気で出た里へふらりと途中下車
国会の不協和音を遠く聞く

和歌山市　田中みね

外見では判らぬ痛み持つカルテ
そういえば今日は結婚記念日か（2月3日）
ご自分への投資は惜しまない財布
逆縁の葬儀へ涙かわかない（姪の旦那さんの急死　2句）
抱き寄せて姪をいたわる日の無情

和歌山市　福本英子

横向いていても気になる娘の仕種
家の横すり抜けたのは福の神
名を知らぬ国のコーヒー飲んでいる
助手席に気になる人が坐ってる
冬枯れの庭華やかに今朝の雪

和歌山市　古久保和子

本屋閉店町が萎んでしまいそう
牛丼のお持ち帰りの味気なさ
ぼんやりと枯野流れて行く車窓
自動ドアまだ結論も出ないのに
久しぶりの雪美しい瓦屋根

和歌山市　岩本美智子

恵方など忘れ巻寿司かぶりつく
鬼払いだけして豆を片付ける
歯医者さんクラスメートが多すぎる
立春の日向へ猫と蹲る
親馬鹿の胃痛を起す子の受験

和歌山市　坂部紀久子

さしすせそ極め思わず出る笑顔
物事に順序があったのは昔
額の絵に気付かぬまんま客帰る
白内障を煩ってます心の目
寝返りをうっては過去を呼び戻す

和歌山市　玉置当代

カーネギーホール再起のタクト振る
記載するペンも嘆いている赤字
学び舎の椅子に別れを告げて春
頂点の椅子が軋んできた誤算
泣きじゃくりながらも叱るママを恋う

和歌山市　松原寿子

春風に色紙一枚師が香る
一灯を守りさだめの彩を溶く
円周の切符が妥協赦さない
方向を変えて機会を呼び戻す
ぎりぎりの距離だが決して動じない

和歌山市　上田紀子

零点を採る勇気など更にない
馬鹿になる薬もたまに飲んでおく
魂が錆びないように活を入れ
熱くなる事も忘れぬ六十路坂
邪な思いが寝付き悪くする

和歌山市　堀冨美子

早春の梅に余生の夢を足す
独り居をスープの冷めぬ子の温さ
お元気と知った嬉しさ師の便り
前向きでなければ明日が生きられぬ
節分へまだ欲張った福狙う

和歌山市　武本碧

持ち味を隠す小癪なすりガラス
落ち込んだ日はナーバスになる視線
逆立ちをすれば何とか切り抜ける
雲行きが怪しくなるとギャグが出る
揺さぶられ矯められ絆太くなる

和歌山市　柏原夕胡

誠実なあなたは犬派だと思う
最前列でうたた寝をする度胸
モノクロの頃は純粋だったのに
未来への一歩ひと晩寝ればよい
惚れているから完全に負けている

和歌山市　喜田准一

実直に生きれば道は広くなり
崖っぷち零す笑顔に救われる
散りぢりの想い潮騒聞きながら
言い過ぎも言い足りなさも五分と五分
漬け物はひと切れでよいひとり酒

和歌山市　松尾和香

苦しみは心の襞に折り畳む
踏み越えて生きてく靴を今朝もはく
昇華され生きる力になる苦労
途中から辿るひとりの趣味の道
途中から楽しい時間ひとり旅

ピアノ練習春を待ってる孫の指
開花した梅へ残雪彩添える
哀しみに耐えて増してく人の幅
笑顔の下の哀しみ察しできぬまま
蘭の香が来客を待つ応接間

海南市　堂上泰女

戦中を語る集いの車椅子
春ですねハローワークも一休み
鯛焼きのあんこのような妻である
じいちゃんは生きた手本とメール来る
権力の傘は開くと畳めない

田辺市　岡本昇

今やっと手網の緩め方学ぶ
楽しんで励む世のため人のため
日に一度大きな声であいさつす
見失う自分見つけるため歩く
うたた寝のひとどき自分らしくなる

鳥取市　春木圭一郎

わたくしは男盛りを知りません
メリハリをつけるとぎこちない仕草
頼りないボクにも広い空がある
むつかしくしないで生きる癖がある
なにもないからいつまでも黙ってる

鳥取市　夏目一粋

いよいよになれば子がいる孫がいる
立ち向かう勇気「てっぱん」から学ぶ
まだ喜寿と思えば焦ることはない
蟹の目もしっかり前を向いている
極めたとイチローさえもまだ言わぬ

鳥取市　岸本宏章

豪雪に猫の足跡二ッ三ッ
豪雪で痛める自然ほどほどに
豪雪と山の噴火で次は何
天の神様お願いしますお静かに
糖が出ても食べまくる戦中派

鳥取市　宮脇道子

よく出来た仕掛けに乗って流される
都合などおかまいなしにベルが鳴り
コツコツとバントでつなぎ大仕事
高望み未来が石にけつまずく
つめ込まれじっと我慢の団塊車

鳥取市　高浜勇

日脚のび深い雪にも春近い
喜べる種だけ蒔いて子に遺す
愛犬の老いを見送り皺ふえる
桜土手十年毎の想い湧く
転んでも全力最後格好よく

鳥取市　横田春名

鳥取市　福西茶子

豪雪に閉じ込められてはや三日
孫を抱く両手は今も空けてある
三猿になろうチカラもカネも無い
雪玉であなたのハート狙います
ＤＮＡ三歩さがって母に似ず

鳥取市　太田幸枝

卒寿でも元気いっぱい満足だ
ここだけの話ですよとメール打つ
冗談の通じる人とかわす酒
子が来る日時計ばかりとにらめっこ
年賀状出さぬがポスト待っている

鳥取市　田中一眸

露天風呂まん天星を身にまとう
雪溶けてみれば平らな道なのに
二十五時胸中の鬼が暴れ出す
若草の苦み初恋甦る
風つなぎ風車ゆっくり始動する

鳥取市　平尾菜美

てにをはも方程式に悩まされ
ぬるま湯につける棒だらやわらかい
くりやでは遠慮がちですダイエット
ごみ拾いおねだり出来ぬスラムの子
きりのない深読み長寿棚に上げ

鳥取市　田村邦昭

何かある大きな背なが揺れている
正論をはかねば何も変わらない
貧しさが義理も情けも捨てさせる
前一歩進めば運も味方する
雰囲気にのまれ勇気が弱くなる

鳥取市　中宇地秀四

長生きをしても良いかと孫に聞く
強い俺弱い私のせめぎ合い
誕生日来し方よりも行末だ
思いっきり落ちつく所四畳半
バレンタイン義理チョコ一つ舞い下りた

鳥取市　加藤茶人

父母よりも妻との暮し長くなり
若作りしてても腰の線崩れ
食い物の罰が当るよそのコント
偶然が必然になる赤い糸
配役で犯人わかるサスペンス

鳥取市　池澤大鯰

電気自動車電気使えばエコという
充電をしなきゃガラクタ電気器具
手相にはくっきりと出ぬわが余生
複数のテレビ占い最悪日
落日はくっきりしてる明日は晴れ

鳥取市　西川和子

三寒四温桜も花芽見せている
不満は言えぬ自分の事は出来るから
満足度こんなもんだと言い聞かす
慌しく暮し惚けから逃げている
半世紀添って満足だと思う

鳥取市　深澤千恵子

吠えそうな予感する犬避けて行く
取り調べ可視化で減るか鬼検事
巣立つ子の別れ惜しむかちぎれ雲
風雨より大樹をさけて生える草
携帯がつなぐメル友蜘蛛の糸

鳥取市　武田帆雀

橘中の仲間と春の初手合い
狛犬よどこか散歩に行かないか
春一番肥料袋が宙を舞う
片側一車線が混む五割市
洋食に招かれ箸を下さいな

鳥取市　池原天馬

国のため地元のためと保身する
ドジ続く日が悪いかと暦見る
万巻の書捨て余生を子のもとに
大雪で除雪費用の底抜けた
古希すぎて会社しがらみやっと消え

鳥取市　岸本孝子

前向きに生きて幸運引き寄せる
一月の日記天気は全部雪
節分というのに庭は雪の山
おひなさま飾って我が家春にする
気をつけていても孫には踊らされ

鳥取市　山宮愛恵

寒月を抱いてひとりの露天風呂
くねくねの道へ紐解く大辞林
老境の道だゆっくり行くとする
柔かい心で聴いている悩み
卯の年へふわりと翔んで華になる

鳥取市　土橋睦子

景気よい話に笑っている財布
煩悩を抱いて小さな夢を呼ぶ
涙腺が弱くなったと花見する
くじ運の悪い私に来たレター
景気よい話が欲しい長電話

鳥取市　永原昌鼓

バンザイも立っちもリハビリの一歩
道草もきっと役立つ子の出世
草深いふるさと偲ぶ深い雪
耳よりな話兎が耳立てる
老いふたり何とか暮らす兎小屋

鳥取市　倉　益　一　瑤

カレンダー今日も走れと書いてある
短かく言えばノーとおっしゃりたいですね
元気だぜその時どきの風が吹く
スタートをしてから気付く風の向き
反骨のヘソは曲ったままである

鳥取市　吉　田　弘　子

極寒をしのいだ木の芽慈しむ
おめでとう敬老会へ仲間入り
自問自答しては自分を慰める
無駄な過去なかった今を精いっぱい
訃報欄ふるさとの地も拾い読む

鳥取市　有　沢　せつ子

青空へ友の病気を放ちたい
電話口まず大雪の話から
人生の節目についた身の温み
失敗を重ね仲間と打ち解ける
たんせいの葉牡丹鳥が食べている

鳥取市　中　村　金　祥

年賀状人それぞれの幕が開く
今一度心の扉こじ開ける
八百長に外国人の居ぬ不思議
民主党掴んだワラを積んでいる
葬儀屋で俺の支持率読んでいる

鳥取市　鈴　木　一　弘

雑草のなびく風向き温かい
おらが村寺と墓石が囲む星
墓ありて家なき里がおらが村
急ぎ旅必死で漕いだ泥の舟
食う魚食われる魚走馬灯

鳥取市　近　藤　佳　子

普段着が出番を待っている桜
望郷の念募らせるトンボの目
人徳のある大臣を待ち望み
母への思い年とるごとに深くなる
若い日の話をふたりとも米寿

鳥取市　土　橋　はるお

湯煙りにふんわり浮いたのは夢か
老人をがっかりさせた大相撲
おい友よ俺を置いてけぼりかいや
軒下三寸借りて咲いてるすみれ草
菅総理も少しハート見せないか

倉吉市　山　中　康　子

要らぬものとことん出してすっきりと
食欲に上下の差などありません
夫思う友のやさしさ惚れなおす
六十路坂聞くと私も戻りたい
冗談をまともに取っているハート

倉吉市　猪川由美子

菅総理へカウントダウン今日もやる
与謝野大臣救いの神か爆弾か
ビビビッと恋は老いても出来るんだ
大食い番組世相反映影ひそめ
私生活ネタ小出しタレント生き延びる

米子市　吉田陽子

豪雪が五十肩まで連れて来た
存分に降れば春には止む雪だ
前向きに座わり直して春を待つ
死火山と信じふもとに住んでいる
誘いたい友は介護に明け暮れる

米子市　白根ふみ

豪雪に老いのショベルは耳かきに
寒すずめさすがの豪雪(ごう)で出不精に
ブライドをだらだら引いて痩せてゆく
輪をつぶす馬鹿正直が一人いて
待つと言うから愛が繋がれてゆく

鳥取県　佐伯やえ

のこり雪が人情ばなしきかせます
子の敷いたレールにしかと乗って春
老いのネジかけ合う仲間いてたのし
生半可な風のさそいにのりませぬ
ふる里にまた春の種まいておく

鳥取県　北村稔

喜寿ですよ酒のめるのはあと何年
お見合いで愛恋なくて五十年
酒うまいまだまだ俺はもつかもね
草も木も春を待ってるこの俺も
ちっぽけな地球で人はなぜけんか

鳥取県　竹信照彦

一月は雪かき体操して元気
山道の除雪がやっと済む果樹園
剪定をするにも雪が足を取る
しがらみを剪定するもひと仕事
剪定しすっきりしたい五七五

鳥取県　松川行男

引継ぎに難題残し彼は去る
シルバーの役がくるから集まらぬ
年輩が釣られて行った祭りごと
正解にペンの倒れも祈りたい
春でしたおでんの匂い残す部屋

鳥取県　深田倶久

絵馬の誤字探して回るお節介
誰よりも熱いハートで彼を追う
強そうに領土視察のお大臣
追った鬼ケロッと元へ戻ってた
お別れにも一度強いハグ交わす

鳥取県　鳥越鬼一

仲直りしたくて贈るチョコレート
和解案示してみたが妻はノー
八百長がバレないような負け上手
新米の味に魅せられ三杯目
ピラミッドの頂上崩壊す

鳥取県　石谷美恵子

ピカピカの廊下へ主婦の自負がある
反省が廊下の隅へ小さく居る
テーブルマナー夫婦仲良く恥をかき
老いふたりどちらも杖でいるつもり
蜜の味たらふく食べた自己破産

鳥取県　西谷悦子

上り下り坂に学んだ処世術
落ちるのが遅いわたしの砂時計
わたくしの嫌なところが直せない
苦しかった過去匂わせず踊ってる
忍の字を忘れたようで自戒する

鳥取県　山本正光

仏前はこころ洗ってから座る
他人様の上にはたてぬ土踏まず
情念に負けた貸し金もどらない
普段着の言葉で交すいい仲間
国民の信を問うなど聞きあきた

鳥取県　山下節子

贋作に火花を散らすオークション
夢だから二兎も三兎も追えばよい
支持率を上げる握手の手の温さ
支持率の片隅にいる私です
キッチンのテーブルもとの椅子二つ

鳥取県　斉尾くにこ

あたためてあげたい夜の雪だるま
湯豆腐の中でまどろんでいる冬
受信箱しあわせ貯金だけをする
冬の月ほんとに強いのでしょうか
真冬日の青空羽根がむずがゆい

鳥取県　岩崎和子

晩白柚（バンペイユ）届ける甥のあたたかさ
外は雪居間の食卓晩白柚（バンペイユ）
雪降れば花回廊の花想う
雪溶かし秋播きの種顔見せて
蝶になりうららな春の夢見たし

松江市　三島淞丘

鍵括弧はずせば崩れそうな僕
老いてなお革新の旗立て直す
幾ばくの命か酒が旨すぎる
ひび割れた器にそっと愛を盛る
言論の自由傷つく人あまた

松江市　小川注湖

句をひねる老いを追い出す趣味ひとつ
福祉社会老人力が一歩出る
竹のれん足を止めさせこちと鳴る
赤紙はああ青春の色でした
一票差天地の違い声高い

松江市　松本文子

どんな夢みるかカンガルーの袋
羽ばたいて行った私の宝
家族は居るけど独房のような部屋
本物だった絵のような雪景色
留守番も気が気ではない猛吹雪

松江市　松本知恵子

卒寿まで仕事現役だった父
眠るように雪の大地に帰る父
大往生たたみの上で逝った父
有難う父の教えで生きて行く
男孫生まれて父の目とたぶる

出雲市　持田多輝子

因果なら負けても仕方ないと知る
通院長男肩をかしてくれ
母の行年越えて生きてる我が生命
がん細胞誰にも体にあると言う
日に三度簡易透析在宅で

出雲市　多久和敬子

新しい話題を持って茶飲み友
弁当を四つ作った若かった
コーヒーと緑茶で和む大家族
風邪の床夫の大きな握り飯
レシピ無い料理作って亡母偲ぶ

出雲市　岸桂子

形見着て母の匂いの中にいる
矛盾ばかりに囲まれている昨日今日
友あって無駄な電話もいいもんだ
ある予感雲の流れが早くなる
暗がりに力あつめて猫の鳴く

出雲市　富田蘭水

立春の声に張り出す胸の線
黙々の妻の介護に足もつれ
福神祭この時ばかり神の子で
買物に賞味期限を見る進歩
久し振り愛のレターに飯うまい

出雲市　小白金房子

腕白の遊び上手な新春の庭
節分の豆から春が顔を出す
噛み合わぬ話繕うもめん針
寒鮒で一献交す新春の酒
ふわり来て翼休める小正月

島根県　伊藤寿美

ひたむきな年月がある軒の下
淋しくてわたしのための花を買う
瘡蓋にならない傷が胸にある
集まれば一本のペン樹を仆す
弱肉強食日本列島包囲する

真庭市　福嶋智恵子

誰も来ず本棚あさり炬燵もり
荒神祭り鯛焼買って息災だ
遠歩き眠り薬のように効く
薬づけ医者の梯子で生きている
度忘れか痴呆か暫し悩む

美作市　福原悦子

雲の上あなたの残像捨て切れず
聞き流す噂は風に乗っている
農一途耐えた手足を比べ合う
芸のない夫婦にもある無言劇
耕した鍬は先祖と私語交す

美作市　大石あすなろ

決断の甘さを笑う蝶結び
花鋏花百態の痛み知る
先祖からプロレタリアを引きついだ
これ以上負えば荷くずれするだろう
手付かずの明日へ夢を膨らませ

竹原市　石原淑子

歩いて歩いて歩いて山の温かみ
国会中継茶の間を寒く寒くする
冬空の青さか胸につきささる
和やかに仏も鬼も住む私
私の癌確率の出る怖さ

竹原市　岩本笑子

いつか来た道いつか行く道娘が巣立つ
薔薇という漢字覚えてみたものの
三日月のますます細く梅の香よ
一冊読み終えてヒロインから抜ける
一番の寒さを知っている椿

竹原市　時広一路

平均寿命越え占いを気にしない
一人ぼっちで無いよと雲が言ってくれ
咲いてあげたと言っていそうな庭の花
介護まだ要らぬ八十路の缶ビール
浮き雲の一つと話す老いひとり

府中市　藤岡ヒデコ

ストーブに人待ち顔の湯がたぎる
ピーポーが凍った町にこだまする
氷点下続く中でも寒椿
災難をプラス思考に切りかえる
顔だけは出して乗り切る処世術

プライドの高い他人からかみつかれ
冬眠はゆっくり出来ぬ地方選
人の手を借りねば背中温もらぬ
転んでもプラス思考で種ひらう
もういーかい雑草の中で春の声

府中市　岩本雅代

生き甲斐は孫に優しい嫁が来る
メールでの会話可愛い京訛り
いつまでも幸せを乞い願うのみ
過疎なりの四季の風情に味がある
今日あって明日なき命ふと想う

府中市　馬場利子

人間も野菜もハウス物が増え
空振りやエラーが続く民主党
私には不老長寿のワンカップ
縺れたら鬼より恐い血の絆
よく喋る男でランクまたも下げ

宇部市　平田実男

悟りには遠く気楽に生きてます
建前と本音の中にある老後
返り打ちにあって作戦止めにする
長々と喋り一念山動く
素通りをすれば世間が見えにくし

美祢市　安平次弘道

原稿募集

編集部では「麻生路郎……この一句」を企画しています。麻生路郎作品から一句を選び、鑑賞・感想・想い出など何でも結構です。（同人・誌友を問わず）

原稿用紙　一枚半（六〇〇字）以内。

タイトルは不要

締切りは五月十五日。掲載は七月号予定。

編集の都合上、原稿は添削、整理する場合があります。

また採否は編集部に一任願います。

平成23年度
三重県川柳連盟川柳大会要領

日　時　4月29日（金・祝）10時より
場　所　三重県総合文化センター
　大研修室4階
当日会費　1000円
出句締切　11時30分　**開会**　1時(昼食は各自で)
宿題と選者（各題2句出句）（欠席投句拝辞）
「ファイト」鈴木　順子（豊橋番傘川柳会）
「悪　い」水谷　一舟（亀山川柳会）
「持　つ」相馬まゆみ（せんりゅうくらぶ翔）
「　灰　」伊勢　星人（三重川柳協会）
「噛　む」橋倉久美子（鈴鹿川柳会）
「ぎりぎり」稲葉　岩明（川柳ふりこ会）
「　空　」木野由紀子（桔梗川柳会）
「自由吟」川上　大輪（川柳塔わかやま吟社）
懇親宴　17時より、津駅周辺にて
（懇親宴参加申し込みは4月2日までに大野たけお氏まで。電話 0595-82-6063 会費は5000円を予定。当日受付集金）

自選集

小島蘭幸

特別な日にする檸檬ひとつ買う
恋人と飲むあたたかいレモネード
檸檬七個塔の形にしてみせる
父が来るので父の瓢箪皆飾る
自動車が二台　父の松消えた

政岡未延子

一族の墓地を他人が掃いている
深いところで繋がっている先祖
橋を渡ると振り向いてみたくなる
渡り廊下がぎくしゃくとした音を出す
歌をうたって雑音を消している

三宅保州

絶滅の危機に瀕している礼義
過ぎたことに拘りすぎていませんか
二つ返事その後音沙汰ありません
爪を剪るだけでも気分変わります
後輩の弔辞を読んでいる定め

宮西弥生

行く当てもなくて日ざしの遠まわり
熱い血が大河ドラマに真っ最中
引くことが多くて飢の二つ三つ
口紅を爪も春色ようしゃべる
また一つ罪を重ねたバラの花

八木千代

藁一本　橋のたもとで渡された
川を渡って行った　ほとけの置き手紙
渡し舟いつもためらうものがある
木の橋を渡るほとけの札貼りに
何処へ行っても仲間と会えば鶴を折る

八十田洞庵

不倫の恋子の命まで無駄にする
父の背を信じ育って農選ぶ
いつもつらい話母さんごめんよね
この靴の減りボーナス安すぎる
傷口を洗うと女まだ光る

両川洋々

愛一つ枯れて未完の絵が乾く
死神がそっぽを向いた厄年よ
ひと組の別れ冬銀河が覗く
美しい嘘なら許す春うらら
破調句のような人生だと悟り

一片が足りずサクラは死ぬ覚悟
満開の下の花びら母を恋う
サクラサクラ赤穂浪士を葬送に
生と死と蕾のままで恋すべし
サイパンの太平洋は奇跡とや

板尾岳人

シャッターの店また増えて寒い街
物忘れ黙って風を聞くばかり
キャリアの違い歩き方まで違う
キャリアより人柄傍の目は確か
抽出しに青春語るオルゴール

奥田みつ子

先走り抜き差しならぬ穴に落ち
リハビリの成果が見えて弾む試歩
手の届く位置に目標置くも年齢
チャンスピンチ背中合わせを膚で知る
何げなく言った冗談気に障る

河井庸佑

春はまだ行ったり来たり隠れたり
昨日見た夢踏切りですれ違う
想い出を零す涙のひとしずく
例えばの話の方がややこしい
キリストも釈迦も景色の一部分

川上大輪

雑草の意地踏まれても蹴られても
車では来るなとお酒も出るらしい
一銭五厘の生命卒寿へ永らえる
花の下箸がタクトになる宴
一日一善極楽浄土見えてくる

木村あきら

刎頸の友すこし増え有り難い
黄昏れに若いと言われ詩集編む
居酒屋の椅子で元気になる男
鮫鰊の鍋に追加の燗をつけ
屋上が怖い朝から雪おろし

小西雄々

本物の濃さは牧場の搾り立て
それにしても儚いものよいのちって
土笛ホーホー大地の響きかもしれぬ
産声の音符流れてくる廊下
大根の白の濃さにはかなわない

斉藤姦

地球から核廃絶の時代です
妻の庭今年はどんな花咲きますか
毎日をパソコンさんと遊びます
老夫婦がっちり結ぶ赤い糸
春が来た蝉ももぐらも起きなさい

塩満敏

飲みすぎの罰極寒の結跏趺坐
結跏趺坐ぬくい寝床を夢に見て
カロリーメイトはメープル味がいい
零落の男の葬儀雪が舞う
天国はあるか？地獄はあるだろう

新家完司

恰好はどうあれやると腹を決め
雲動く思案のままにペンをとる
ぼんやりと過去が浮かんでくる朝
欲ばった願い独りで笑ってる
長生きの秘訣なんかは持ってない

恒松町紅

梅見頃予算オーバーの光熱費
スイーツに目のない舞妓喋りすぎ
おむすびが一番美味いやせ蛙
肌を刺す風もいとわぬ露天風呂
大切なエンディングノート再確認

津守柳伸

死ぬ前に食べたい母のにぎりめし
家一歩出れば笑顔の足となり
お生れが違う外車と別れけり
十円の安さへ並ぶのも女
一月が終る何にも出来ず雪

遠山可住

会う人に逢えておいしい酒になる
どの部屋の時計も秒針持ってない
知恵の輪がだんだんがさつになってくる
好奇心身のまわりから遠くなる
音のせぬ音しんしんと雪の闇

都倉求芽

夢から覚めて幻を追いかける
月光に照らされ罪が深くなる
丸坊主ではさむらいはつとまらぬ
灯を消せば女は怖くなるらしい
後もどりできぬ処に座っている

土橋螢

還暦の日から老人だと誘う
その気にもなれず若連たちと組み
古稀の日射しで老齢な仲になる
よくぞこの障害の身を持ち堪え
あれこれと愉しく暮らす知恵をだす

中原諷人

春はそこちょっと虫干ししたい脳
ＩＴ化無くしたものと得たものと
神仏に悩み言っても詮も無し
キッチンにレモンが香り心満つ
ものさしを朝昼晩と入れ替える

西出楓楽

五円玉妻と分け持つ寺社参り
名物を往路で探す寺社参り
各停で行くからこその寺社参り
出征碑も忘れず拝む寺社参り
寺社参り余禄うれしい五七五

仁部四郎

稜線をしずしずと舞う雪おんな
野に咲いた花にもほろり修飾語
桜らんまん大樹支える根に拍手
ちちの詩は今ほろほろと海が笑む
青春の日記実家の蔵の中

林瑞枝

バレンタイン天麩羅までもハート型
補聴器へとてもやさしい人の声
内憂外患先思いやる二月尽
万物を共有せよと蛙の子
副音の意味に今更力づく

前たもつ

同人名簿発行のお知らせ

七月一日に川柳塔社同人名簿を改訂発行します。
変更のある方は、五月末日までに本社事務所へご連絡下さい。尚、個人情報につきご本人からのお申出に限ります。

温故知新

川柳句文集『川柳寄席』（昭和51年発行）

不二田一三夫

さまよえる子羊救った曽根崎署
俎板の鯉さと定年云うものの
ガレージの鍵見つからぬ日曜日
うまくとも腹いっぱいは飲めぬ水
寒がりのくせに孤独は壁の隅
天皇の行動時計の中にあり
一言居士とかくいやがることを云い
語学もう役に立たない外来語
郵便番号老母いよいよ筆重し
背伸びしてママのお耳へパパのこと
年上を隠す化粧がいじらしい
おもわくも母母なりの預金帳
雨空に祭りの晴れ着脱がされる
十円の艶は日焼けの肌に似る
ペアで組むボウラー只今恋愛中
洋酒グラス倒して作家病んでいる
金がモノ云うてるだけの高姿勢
湯ぼてりに小さな浮気の下駄を履く
速達がストの渦中に巻きこまれ
空き缶を城にぼうふら二三疋

川柳塔の川柳讃歌 ⑯

木津川　計

負け組の中で人間らしく居る

石谷　美恵子

勝ち組は往々にして人を押しのけ、弱者を踏みにじってその立場を固めるのです。多くは人間らしさを失っています。

僕の好きな詩人で画家に京都在住の山田喜代春さんがいます。こんな詩があります。「失敗の多い人やダメな人を許すことのできるおおきなこころをもとう。まずてはじめにぼく自身を許そう」と。喜代春さんは負け組の総代表です。だからファンが多いのです。美恵子さんと共に人間らしさを僕も求めます。

苦労した分楽しめと子がすすめ

山口　高明

高明さんのお子としたら、いい子に育てられました。お子たちのため苦労された父の背中を見て、やさしいおとなになったのです。

朝日新聞にコラム「おやじの背中」があります。各界の人が父の思い出を語ります。共通しておやじは無口です。愛情表現が下手なのですね。ですが無私の、陰ながらの献身です。そんな父を語っても、「楽しめ」とすすめるお子の少いのを僕は気にしていたのです。

風に転け風に縋って風を追う

伊達　郁夫

なるほど、風の種々相ですね。慣習としての風習。味わいとしての風雅、景色としての風光、なりふりとして風貌、なびかせる風が風靡、それとなく伝わるのが風評。これで仕舞と思うてましたら、転け、縋り、追う風もあると郁夫さんに教わりました。

この伝で「雨」を白秋の詩に探りました。「城ヶ島の雨」の忍び泣き、アメアメフレフレの「アメフリ」、「落葉松」の林の雨のしづけさ。雨に泣き雨を喜び雨を待つ、も又。

ゴミ箱へ捨てたレシート拾い出し

三好　専平

あるある、こんなことが。サーバーでカミソリの刃のセットを買うたのです。二八〇〇円。数日後、使おうとしたらサイズが合いません。替えてほしいと現品を持っていくと「レシートがなければ」と。さあそれからゴミ箱を探した探した。わずかな額で必死になったのが情けなく、見つからなくてまた情けなく、レシートは大切と自戒したのがまた情けなく、専平さんも多分、そんな気持ちになられたろうとお察しするのです。

忘年会買うのをやめた服に会い

岡本　かつ子

ひとりとして同じデザインや絵柄の衣裳をまとう女性に出会わないのを僕はいぶかりつづけてきたのです。ファッションこそ多品種少量生産の典型です。ですが、ジーンズは少品種大量生産です。ですから、銘々勝手に破り、傷つけ、その破損程度の差を個性と主張してきたのです。さて、忘年会でかつ子さんは珍しい出合いをされました。買うのをやめたのは、さて、高かったから、安物故？

節分の鬼に留守番させて出る

福田　悦子

外来の地獄の鬼が恐いので、この国本来の鬼はえらい誤解を蒙ったのです。狂言の鬼は愛すべきで、「節分」はこんな物語です。節分の夜、蓬莱の島からやってきた鬼は美女に心を奪われ、小歌をうたって慕い寄りますが、宝を取られて追い出されます。なまはげの鬼は幸せをもたらしますし、鬼瓦は悪霊や災いから一家を守ってくれるのです。悦子さんの言うように鬼はガードマンなのです。

（『上方芸能』誌発行人）

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

不死鳥

水の垢

気楽さは枕をさげて出迎へる
形見分けで下女孕ませた事が知れ
浜へ出りゃ隣のメリーさんも出る
かなもけりも作れず虫の声ばかり
広告塔一ト雨降った中に立ち
蟲なくを哀れくとも見ず妾住む
品切れで向ひへ這入るとこが見え
孝行はいいが男がしなびて来
雇われてゐれば叱られ初めもあり
犬洗うことも仕事の浜の家
光明のなかにひたって餅を焼き
大正天皇を悼み奉る
草葬の臣かなしみの炭をつぐ
古着屋はちょいとつまんでちょいと放り
うなされるのもありそうな古着店
青いソフト東京の夢巴里の夢
論文の喧嘩はいつか年を越し
宴会がすむと雇仲居は女房じみ
嘘ばかり言ふ亭主とは思ふてず
哀れ哀れ税に苦しむ役者とか
はらませるだけははらます親がかり
あんたのやうにいふてもと返辞せず

前書きのある句

天皇を迎えて
おなじみの帽子を今日も手にされて
お気の毒あれあれ帽子振りたまう

西出楓楽選

雪解けに本音くっきり現れる
はだれ雪消えゆく先に始発駅
正道へ戻してくれた道標
本籍地決めて時計が動き出す
温めた言葉語尾まで血が通う
オムレツがくるりと返りいい予感

柏原市　森吉留里恵

ハイウェーばかりではない小道生き
目指す地位ガラス天井邪魔をする
病院へ行くより化粧品を買う
頼られる母さんならばやれそうだ
お疲れの土をふかふかリフレッシュ
晩年の中身苦笑の種ばかり

米子市　中原章子

人恋し以心伝心電話ベル
信頼へ裏切る真似は出来ません
譲られた席伝わってくる温み

雲南市　武島ちよえ

先ばかり見えて足元には疎い
一時を盛上げている紙コップ
薬飲む順序があって惚けられぬ

竹原市　六田半徳

歯の治療終えて自分を取り戻し
日めくりで日日の移ろいめまぐるし
食べるほど薬を飲んで今日を生き
葉牡丹が二株並びポーズとる
大相撲復活期して協議中
エジプトの二月革命市民力

広島市　岸本清

前向きな気持がさせたケセラセラ
失敗も見方変えればエネルギー
出っ腹をつかんで悔やむ不摂生
秘密とは所詮は守り得ないもの
蟻さんのサボったところ見てみたい
寒雀日向ぼっこで会議する

嫁が捨て私が拾うにらめっこ
新年を亡夫と祝う恙なく
元気かとただ一言の息子の電話
息子の帰省待ってる暦赤印
フォークとナイフに玩ばれた食事会
口口にこけたらあかん子等は言う

吹田市　二宮栄子

あら嬉し人のお役に立てる今
一度言って見たいもうお金いらない
有り難うお疲れ膝に湿布はる
足腰が無理をするなと言って来た
有り難うの言葉に元気もらってる
山頂で鍋やきうどん囲む幸

北九州市　小松紀子

大吉をひいても同じ日が過ぎて
雪便り共に届いた砂丘芋
冬の陽の恩恵受けて梅ゆるむ
親と子が恋人になる春歌舞伎
どちらかな男女不明の人が増え
晴れてなお雪害噴火思いやる

八尾市　山根妙子

雪景色もう見飽きたと天に言い
味噌作り世間話も樽に入れ
強がりを言う口許が寂しそう

米子市　山本ふみ子

おはようの返事がなくて軋む朝
お小言は腰低くして通過させ
疲れたら母の匂いを嗅ぎに行く

大阪市　太田としお

来世も同じコンビで踊りたい
出直して妻の機嫌のいい折に
お賽銭いつも悩んで五円玉
早起きの悪人なんて珍しい
朝一に集金にくる好かんタコ
長生きをしすぎて友が居なくなり

箕面市　寺井柳童

年賀状だけは自筆に決めている
頑張りやしっかりしいや愛の鞭
過ぎたこと忘れ明日へ仕舞風呂
まだはもうあっと言う間に時は過ぎ
大相撲中止に陳謝土俵割る
お湯を入れ待つ三分の食文化

尼崎市　田原一兆

敵になり味方にもなる詰め将棋
ライバルへ微妙にゆれる嫉妬心
それからを聞くか聞かぬか迷ってる
昨日から言うこと変わる鼻薬
白黒をつけぬグレーにひと安堵
ごしごしと軸足洗うある決意

日の光浴びると鬱が消えている
幸せは感じ取るものだと思う
定年で早寝早起き日曜も
スーパーは妻の後から付いて行く
きくきくとおもえばきいてくるくすり

神戸市　木村忠義

不景気を祓う勢い豆に込め
僕の癖すなおに靴が知っている
こだわりを捨てたとたんに晴れた霧
深読みが外れて分かるアホらしさ
浮き沈み妻の助けで今がある

神戸市　輿水弘

これからはせめて心を磨きます
電話よりメールで嫁と仲良しに
人生の勲章何色泪色
そぎ落としなおそぎ落とし冬の山
卓上のセントポーリア便り待つ

神戸市　白川淑子

一杯のお酒で笑いはじき出す
雪空を眺め笑顔のスキーヤー
湯の宿で知らぬ同士の国自慢
傘の上粉雪跳ねて舞踏会
一刀に心打ちこむ刀鍛冶

神戸市　山根弘子

力まずにぼちぼち行こか趣味の会
何してるんすべて気になる好奇心
おしゃれして何処へお出掛けうちの猫
泣く人と喜ぶ人がいるデフレ
メール打ち見てくれたかと直ぐ電話

尼崎市　市坪武臣

ワープロは修繕きかぬ俺みたい
馬鈴薯の準備は出来た春よ来い
畦道に農の前途を話し合い
八十路過ぎしんどい検査止めにする
逆境に勝てば幸せ寄ってくる

加東市　安達厚

母見舞い一緒に食べたウエハース
友五人わが家に集う嬉しい日
荷を降ろしスキップしてる赤い靴
通う道短く速く感じる日
胃袋で相手喜ぶ腕もなし

川西市　岡嶋洋子

食卓に博多名物メンタイコ
習い事座る椅子にもチームある
祈願巻き恵方に向かい福を呼ぶ
てくてくの人生早くも八十路なり
しまい風呂柚子プカプカと気分いい

篠山市　石田久子

十年を忍び待ってた星回り
ドロップの缶も亡母の宝物

篠山市　沢山啓子

オヤオヤと鴉に秘密覗かれる
良く出来た部品だ爪も髪も伸び

三田市　尾崎一子

おしゃべりの佳境で見えた真犯人
子よ頼む生命線の長い母

西宮市　吉井菜々子

落ちたなら天を目指してはいあがる
春よ来い口笛冴えて霜を踏む

奈良市　大久保真澄

転んでも初心にもどるど根性
餅をつく家族の幸が風にのる
躁と鬱蛇腹のように連なって
春までは大事に仕舞っておくピンク

奈良市　尾畑なを江

哀しみが溢れないよう早口で
夕がらす大きな声で淋しがり
寒いなら尚さら寄席へご一緒に
老眼鏡かけず新聞読めるふり

奈良市　前田弘恵

十聞いてひとつわかればまあいいか
あらがうかゆるり老いるか揺れる日々
紅一点誰も気にせぬ歳となり
一言を堪えてうごめく腹の虫

迷ってもチャンス自分で掴むもの
打ちのめされて回路は止まったまま

奈良市　矢野良一

なんとしょう次から次へ悩み増え
ひととせを経るたび涙もろくなる
貴方にもあったこんなにシャイなとこ
駅長のグッズも売れる貴志の里

奈良県　谷川憲司

奥飛騨の露天風呂にて雪掴み
豪雪の白川郷も転ばずに
親子程違う弟もう白髪
指先が乾燥注意予告する
昼間から炬燵に入り雪見酒
極寒にただ黙黙とウォーキング
直人さま孫に頂戴ランドセル
ゆる鉄で旅情豊かなぶらり旅
雪が降り野趣満点の露天風呂
派手に見えしっかり者のヤングママ
老い二人手狭な家が丁度良い
やどかりは体に合わせエコに生き
ＤＮＡに原因ありという医学
ロボットが宇宙の神技解きに行く

和歌山市　磯部義雄

あと二年百寿全う母元気
メモなしに買物出来ぬ脳を知る
出る杭は打たれる覚悟物申す
免許証返し車の恩を知る
面接を終えれば髪を染め戻す

和歌山市　土屋起世子

玉子がけ御飯出来ると孫巣立つ
厳しさに堪えた寒ブリ旨味あり
永らえた褒美の曾孫膝に抱く
詰め込んだ笑い袋が綻びる
生真面目な人の間で酸欠に

和歌山市　福井菜摘

薬草の匂いに父も母も棲み
真四角な父の歩幅にある歴史
か細いが嘘をつかない小指です
マンネリの絵を抜けふわり風にのる
大切にひと日をたたむ日記帳

岩出市　藤原ほのか

あの場所でやっとあなたに辿り着く
がむしゃらに生きて今年も花咲かす
雪景色答を白で埋めつくす
自分史に雪崩の跡を書き留める
馴染んでる住処に似合う花を買う

岩出市　村中悦男

一人居の小窓明けてと春の声
肌着一枚脱いで鍬打つ春の音
人情を詰めて風船飛ばしたい
苦労した人の話に情がある
人が寄る妻の情けの輪の中に

海南市　小谷小雪

雪マークそっと剥がせばふきのとう
煌煌と金星何か言いたそう
涙目の仰ぐ先にはオリオン座
ぬくもりが欲しくて両の手をこする
裏窓にあなたの好きな花一枝

紀の川市　宇野幹子

みの虫も父もぶらりと逆らわず
靴の紐真結びにして正念場
水鏡割れて一つの恋終わる
頂点という椅子はないアスリート
回れ右しても孤独が従いてくる

紀の川市　北山絹子

そんな夜は雪しんしんと胸に降る
親離れ子離れ春が背なを押す
父さんが背筋を伸ばす検診日
大臣も派手なネクタイ締めている
物差しで測ったような友がいる

一生の晩秋にある罰ゲーム
車椅子初めて乗った目の高さ
精神を養う孤独という時間
負け組が消える社会の消去法
まごころで接し笑顔の拾いもの

紀の川市　辻内次根

花の丘むかしの昔海だった
不器用で四捨も五入も解けぬ春
溜息を鼻に吊るして雪の道
群れを出て冬の惰性をつきはなす
極楽は此処ぞここぞと仏の灯

田辺市　大峠可動

小銭でも心よせ合う募金箱
余生にも意義をもたせるボランティア
細細と趣味を育てて今日も生き
天命の巡り合わせか妻と僕
自分史のバック絵変わる第二幕

橋本市　石田隆彦

なるようになって自由を手に入れる
自転車に乗ると腰痛忘れている
決心をしないと出来ぬ家掃除
よくケンカしてるが仲の良い夫婦
隠すことないが言うほどでもないし

和歌山県　森下よりこ

解散は早いよ野党今暫し
冬将軍が大活躍した年だった
冬帽子の向こうちらほら春が見え
雪の日は雀お前も辛かろう
天皇が僕らと同じ高齢者

鳥取市　近藤秋星

三度目の正直俺にゃ無さそうだ
正直に生きたと言えば嘘になる
人間の味は情けの深さほど
深情け受けて思案が鈍くなる
鈍っても鈍らぬ振りで口達者

鳥取市　竹口清信

本命のチョコであってと願う母
孫の鞄にそっと入れ置くチョコひとつ
爺さんもにこにこ顔でチョコ貰う
服着れば風呂で浮かんだ句を忘れ
連凧が砂丘の空に夢つなぐ

鳥取市　津村律子

サイコロが行きつく手前裏返る
バレバレのあなたの嘘につき合おう
振り上げた拳を下ろす場所がない
掌にうまく乗せられ転がされ
かぐや姫月へ旅して戻らない

鳥取市　前田孝子

鳥取市　山岡紀子

筆談へすこうし慣れて絵文字入り
こんなにも空気が美味い外歩き
リハビリが楽しくなった赤い靴
息子から貰う笑顔は宝物
何事もなかったように朝が来る

鳥取市　山口千代子

枯木でも雪をかぶれば花になる
診察に行こか止そうか雪の道
別れの季節コーヒー店がこんで来る
さよならと言いつつ又も座り込み
走り書き自分の書いた字が読めぬ

倉吉市　藤井美津恵

雪降る日テレビを友にひっそりと
庭の木も雪の重さに耐えている
立春も過ぎたよ早く春よこい
雪降る日じっと我慢し春を待つ
待ってました春の行事の通知くる

米子市　小塩智加恵

必要な臓器はみんな年を取り
傷ついた言葉は早く噛み砕く
二十本大事に磨く私の歯
午後三時こぶ茶抹茶に串だんご
一人居が手作り雛を飾る床

米子市　加藤正二

老い迎え一つの命模索する
わが影は振り向かずともついてくる
黄泉の国就活なしのフリーパス
四苦八苦老いの良薬五七五
忘れたいことだけがよく夢に出る

米子市　後藤宏之

悪だくみ少しはせねば生きられぬ
先代のなごり大事に土を掘る
のんびりとしてたらいらち文句言い
会長のポストゆずらぬこまり者
鬼は外そういわないで鬼も内

米子市　後藤美恵子

くしゃみ一つ風邪か噂か花粉かも
オブラートに包んだ注意嫁にする
胃に呑んだことばが夜中暴れます
獲物追うように胃カメラ這っていく
ＢＧＭ胃カメラ終り聴こえ出す

米子市　高田振作

歳と体重おんなの秘密フフのフ
三次会俺のつけ利く店に行く
無人駅ロボットぐらい置いてくれ
ヘルパーを嫁と思ってオーイお茶
滑り込みセーフで乗れば特急車

好い事があった時だけ書く日記
重ね着を神経痛に勧められ
昨日より寒いと膝のご注進
止めてから副流煙が怖くなる
サイレンが鳴ると昭和が蘇る

米子市　竹村紀の治

開けゴマ言っても開かぬ朝帰り
サイレンを明日はわが身と聞いている
ひと言で心を開くことがある
面倒なことになるからこの辺で
台形の面積がもうわからない

米子市　成田公一

魚屋は生きと気風が売りものだ
フルムーンプランばかりが先に行く
外は雪炬燵の守りも飽きてきた
いいショット狙って川の雛を追う
勝ち負けは拘りません後僅か

米子市　野川宣子

困り事あって仏の前に座す
下り坂途中にきっと落し穴
運動をしたと言い分け三杯目
後一句できぬコタツで指を折る
天気図が明日の雪掻き予約する

米子市　湯浅久司

平仮名も漢字で書けば畏まる
誤字脱字多くて孫に指摘され
根回しが効いて花咲く胸のバラ
大山が白衣を脱ぐと春になる
じわじわと老いの年金攻められる

鳥取県　大塚美代子

忘れ物振り返らずに百均へ
冬ごもり親指染めて密柑むく
停電に遭わないうちにシミュレーション
八百八町に場所中止の嵐
暴かれて踏ん張ってみる土俵際

鳥取県　加賀田志延

いい汗をかいた笑顔ふりまいた
いい笑顔見たく料理の腕振るう
咲く時期を硬い蕾で待つ花芽
休肝日機嫌がわるくなる夫
神様にきいてみたいね先の道

鳥取県　橋谷静江

今朝もまた芯を研ぐ気で顔洗う
写メールの孫見て笑う葬の席
千枚田荒れて先祖に詫びる草
暗闇にタイガーマスク灯を点す
子を痛め芯を摘み取る親のエゴ

鳥取県　吉野いさお

身内こそあえて鬼にもなってくれ
帰宅してゆっくり天の水を飲む
訳あってはじめて扉開かれる
極めたら印税だけで暮らします
感性を極め少年期に戻る

松江市　相見柳歩

ピアノリサイクルショパンが染み透る
華麗に敏捷に鍵盤は嵐
質の高い演奏登竜門も審査
石手寺の山門に張りつく草鞋
お目当てのスーパー土になっていた

松江市　錦織禮子

ハンチング似あう夫に亡父の影
週五日妻の予定を優先し
テレショップ次から次と欲しくなり
守護石を握りしめ買う宝くじ
風呂あがり手の届くとこ薬ぬる

松江市　松浦登志子

気になれば直ぐに一筆送り出す
転ばない風邪ひかぬこと言い聞かせ
お断わりしやすい様にドアーごし
天気図が寒さ連れ来る雲の色
自分への褒美に好きなチョコ選ぶ

松江市　山根邦代

神様が聞いてくれたか空に虹
老い二人ぴったり行かぬこと多し
その場所へ一歩近づく日が暮れて
古い本手あかがあって捨てられず
そのときは笑顔で行こう虹を見て

雲南市　福間博利

ゆっくりと充電してる外は雪
屁理屈を付けて字余り押し通す
誰の許可ですか外来語が流行る
肩書きも捨てて卒寿の坂にくる
大卒の浪人中も三年目

美作市　小林妻子

味噌汁が好きで二月がまた好きで
その話待って正座して聞くから
笑顔みな外でつかって帰る妻
四角にもマルにもならず八十二
じいちゃんの夢は何色かって孫

竹原市　國實力

梅一輪春の温みをしゃべり出す
コマーシャル全部試すとどんなだろ
春光へ命漲る音生まれ
感嘆符こんなに充ちる春の野辺
約束のプチプチはずむEメール

竹原市　若年幸子

七月二十四日テレビが仕分けされ
竹原市　土井輝恵

めっきりと老いて故郷の墓地造花
図書館の童話の本が手招きす
夢は大偏差値の事触れもせず
他人なら旨く行くのに小姑
宇部市　高山清子

線引きをすれば了見狭くなる
衣食住満ちて人間性不足
飽食と飢餓が地球の裏表
子守り唄音痴でも良い孫眠る
逆風が止むと足並み乱れだす
阿波市　三浦千津子

黙秘というとても静かな仕っぺ返し
似たような愚痴で気を吐く老人会
小手調べ手加減されて遊ばれる
冬の底おでんぐつぐつよく染みる
春風が遊び心を騒ぎ立て
今治市　渡邊伊津志

謎かけの意味暖かく抱きしめる
力む程年輪の差に押され勝ち
磨いても落ちぬ心の隅の錆
人生は気魄老後も励む道
心情が形に見える書道展
大洲市　花岡順子

黄昏れてたっぷり着いてきた手垢
譲歩してたっぷり効かす唐辛子
ライバルが相手正面から倒す
遠浅の海に油断をしてしまう
よその子を叱るざわざわする話
四国中央市　篠原久

リストラの首といのちの話する
泥水を飲んだ男に人間味
一二幕で話は尽くせない昭和
三寒四温のひびき立春過ぎてから
ランク付けで義理チョコ配っている女
香南市　桑名孝雄

蟄居閉門これでよし二ん月は
背を伸ばせ老いに発破をかけている
双六の上がりへ賽の目が合わぬ
酒とろりそんなつもりで飲んでみる
還付税ペコペコしなくてもいいぞ
香南市　近森功

花便りいらぬ花粉がまぎれ込み
絵手紙へ梅一輪を書きそえる
真っすぐに歩いた脛がなぜ痛い
赤い羽根議員バッジをあざ笑う
十二月八日まだ忘れないお爺ちゃん

福岡県　豊田　愛

運転の出来ぬお陰か足達者
嘘のない音でやかんが噴いている
しょうも無い庭木の花が愛おしい
捨てきれぬ母を笑えぬ物の嵩
傘寿まで積木築いた自負がある

福岡県　本田さくら

偶数の十五日待つ風寒し
傷心のわが身に刺さる鎌の月
暇でしょう遊んでくれと猫じゃれる
来客に仮面をつけて出迎える
わが猫がじっと心をのぞき込む

唐津市　北村松風

まだ読めぬ余生に苦楽の隠し味
喪服での出合いが増える喜寿を過ぎ
利酒を今日は飲めますバスツアー
注連縄で愛がつながる夫婦岩
寿命延び年金受領すみません

唐津市　吉冨節子

介護して姑の心の雪がとけ
お雛さまあるが欲しいな鯉のぼり
飽食の隣りに孤食住む時代
ライバルに見栄をはってる空財布
老舗まで幕引させた不況風

山鹿市　米加田恭代

竹明かり悲しい記憶走馬灯
あなたにだけほめられたくて生きてきた
冗談に隠れた本音さぐってる
ぶれまいと肩肘張って孤立する
また明日言える身体に感謝する

シドニー　坂上のり子

ジャパンホリデー日本好きになった孫
ポケットのない服を着て行くあの世
孤独死はいつも覚悟の範囲内
身に余るお金が招く不幸の根
セールスらしいので留守番と言っておく

シドニー　三谷たん吉

鬼は外鳩がなんだと寄って来る
建国の記念日なのに国旗なし
大噴火地球の末期体感す
太平洋行きつ戻りつ喜寿迎え
まだ若い仕切り直して白星を

弘前市　稲見則彦

穏やかな一年であれ中吉で
太棹の響きを腹で聴く津軽
二人だけなのにトイレが重なるの
あの一票こんなはずではなかったね
気がつくと酒呑童子が同居中

カード買い署名ばかりが上手くなり
おふくろと呼ばれたくないまだ四十
指きりの重さに心縛られる
カタログのモデル良すぎて手が出ない
ハウスから旬を先取るふきのとう

弘前市　髙橋洋子

おおきにとこぼれ落ちそな片笑くぼ
久し振りにチャルメラを聞く寒い夜
禁酒宣言但し実行明日から
われ乍らまた物さがし忘れ物
夫婦して三猿になる倦怠期

東京都　井上つよし

人生は笑うが勝ちと悟り出す
たまにはね各駅停車いいかもよ
俳優は大河ドラマで覚えます
大吉を引いたら気持ち引き締める
通販にはまって増えるダンボール

東京都　高岡弥生

子育ての自信反抗期で崩れ
深酒を子に諭されて子を誉める
面接のドアヘノックが畏まる
明日は雨膝が予報を出している
どっこいしょ言った記憶がまるでない

昭島市　野口忠

行く先は病院だった旅カバン
入院の眠れない夜の焼き芋や
入院で犬と夫が気にかかる
万病に効くらし落語大全集
退院日チーズケーキにレモンティー

横浜市　巖田かず枝

手を繋ぐ力が倍に倍になる
愛された記憶が今を支えてる
図書館で絵本揃えて孫を待つ
流行をまとめ買いする決算期
ボケ防止アナタ任せを脱皮する

横浜市　川島良子

若いのにお若いのねとおだてられ
予定より早く帰れば妻は留守
誰でもの内に自分も入ってる
人間の裏を見てきた目を洗い
父がしたように叱って抱きしめる

富山市　有澤嘉晃

片想い今年も会えぬ雪女
太陽に顔綻ばす梅の花
夢数多盛り込む恋のマニフェスト
投句には明るい彩の切って選る
ペンと酒だけは離さず冬籠り

岐阜市　平野あずま

静岡市　渡辺芳子

心まで編み込み手袋出来上る
編み直しも楽しんでいる日向ぼこ
今日もよく歩きましたと自己満足
久し振り一瞬虹にめぐり合い
石衣食べて還れた幼き日

豊橋市　藤田千休

お辞儀から入社試験の幕が開く
居心地がよくて居座る皮下脂肪
天候と取っ組み合いの農作業
満天の星を消してる街明り
子供にも成人病という試練

八幡市　今井万紗子

下書きが埋らぬままに春半ば
巣穴からおとぎ話が顔を出す
脳トレに紙面の上でウォーキング
一本の線香亡母と対話する
形見分け娘ら胸に抱きもち帰る

京都市　清水英旺

思い煩う年賀状来ぬ人の身を
寒風で険しき顔もあとわずか
体力の次に気力が萎えてくる
名曲喫茶青かった日のノスタルジー
終章に来てめくるページもあとわずか

大阪市　笠嶋惠美

ざんげする認知の夫の仏顔
わびられて妻の涙が止まらない
病院の安心感の空気吸う
使命感医師看護師のオーラ見る
退院にほっと疲れはかくれんぼ

大阪市　片岡松枝

一輪の散花に我を重ねる目
一月は白内障の手術台
病室のカーテンは知る苦楽の世
聞こえる霧笛遠い古里想い出す
今日一番良い日と思い日を送る

大阪市　高杉力

髭そりは三日に一度退職後
もう着ない背広ネクタイ処分され
定年でパパは我が家の運転手
趣味多く日程表がすぐ埋まり
肩書きがとれて飲む酒うまいこと

大阪市　西川更紗

兎とびみたいに株よ跳ね上がれ
冬晴れに生駒の麓近くなる
初戎さい銭はずみ福もらう
一輪の花の白さに癒される
雨宿り少しの出合い冬の午後

病室もプライバシーと名札なし
不整脈退治ハートに焼きを入れ
水中も地上も兎に角ウォーキング
餅の奴オレの入れ歯を持ち上げる
ネットからゴミ漁る術カラス煉る

大阪市　平井露芳

れんげ畑遍路笠陽に映えて
新学期孫のカバンも軽やかに
感無量短冊下がる通り抜け
茶柱が立ってうとうと春の昼
春雨で小さい傘に肩を寄せ

大阪市　吉川弘泰

久しぶり日向の匂いした弥生
うれしいな老いの耳にも花便り
吉報が浮力をつけて駆けてくる
校門が一番似合う桜花
吉野山春が下から咲き登る

泉佐野市　稲葉洋

役目終え肩の荷下ろす古暦
大みそか残った未練ごみに出す
スプリングキャンプはどこも威勢よく
日向ぼこしながら人のうわさする
受験の日軽口叩き送り出す

河内長野市　梶原弘光

酷暑から厳冬きびし負けられぬ
愛犬のためにも元気つづけねば
孫からの祝いの言葉誕生日
就活の苦労知らずに生きて来た
就眠のラジオ聞きつつ夢の中

河内長野市　木太久正一

備えなく少しの雪にあわてる
意地は捨てゴメンと言える歳になる
鏡台は嫁いだ日からみな見てる
和太鼓を叩く若衆の生きの良さ
見えぬ敵ダメージ強い魔のウィルス

河内長野市　木見谷孝代

幼子の小宇宙です母の背な
臓器移植背中合わせの鬼仏
叩きあげ汗と涙で磨く技
趣味多彩メモを残して朝を出る
すいすいと世渡り出来ぬ正義感

河内長野市　針生和代

年金と細く長ーいお付き合い
一言が回り回るとまるで逆
抗菌も除菌もしとく娘には
お守りに孫の笑顔の写真持ち
遺言書一行書いてそのまんま

河内長野市　松岡篤

河内長野市　山室光弘

韓流にテレビとられて聞くラジオ
うぬぼれが地球を回す気にもなり
白旗を上げねばメシが出てこない
すいすいと行かぬこの世の回り道
惚れっぽい癖が直らぬ古稀の春

岸和田市　増田隆昭

スポーツになればキャスター顔和む
もう少し究めなければ惚けられぬ
ウォーキング三日止めれば2キロ増え
駅裏の飲み屋友との秘密基地
食文化どう変わろうとおみおつけ

堺市　澤井敏治

無駄もある人生だから味もある
釣書に料理得意とあった筈
お袋の味はとっくに妻の味
平和を叫ぶ大胆すぎることは無い
鬱一字でかく描いたら吹っ切れた

堺市　内藤憲彦

美人から握手をされて金縛り
まるでもう月光仮面花粉症
父卒寿生きててくれてありがとう
限定品うたい文句に弱い妻
少し手の届くあたりが良いお世話

堺市　羽田野洋介

逃げ足の速さを競う時と金
暖かい光の方へ目も足も
待たされるその一日の長いこと
ユーモアで通る程度のほらを吹き
新しい靴はやっぱり晴れた日に

高槻市　田中由美子

うたた寝にふんわり愛をかけてやる
ほどほどの距離に娘と孫がいる
可も不可もないあなたとの小宇宙
口だけは賞味期限がないらしい
見本にはなるが手本にはならぬ

高槻市　島田千鶴子

言い訳も空しくなって菜をきざむ
待つ人を優しくさせる花時計
間違ってないと信じた着地点
聞き役になってストレス持ち帰る
おしゃべりが無口になって蟹の宿

高槻市　初代正彦

妻にさえ内緒にしたい事がある
困り果て玉虫色のカッパ着る
肯定も否定もしない老いの知恵
名月に月光仮面出てきそう
暗くてもちゃんと家路へ千鳥足

大寒の粥の熱さに救われる
断って寂しがってるへそ曲がり
冬のバラ枯れたかにみえ一つ咲く
長メール手紙の方がずっと楽
人はみな片道切符握りしめ

豊中市　荒巻　夢

大丈夫遺影の母に励まされ
ご挨拶胸の中にものしを付け
雪化粧目の中までも白くなり
根付けから父母の足跡分かる今
得意気な笑顔をのせる一輪車

豊中市　池田純子

隆として高く低くに薫る風
チョコボール手が触れるように渡す
カーテンの濾過する日ざしはんなりと
早朝の空気山並み正しうす
樹を揺らし遊ぶのは誰　それは風

豊中市　石橋優明

鶴までが罪を背負って来る不幸
牛殺し鶏を殺して生き延びる
人殺すテレビドラマに飽きて来る
ヘルパーの来る前の晩片付ける
回る寿司軍艦巻きが良く巡る

豊中市　源田啓生

饒舌に間口広げる若い知事
花冷えに若い命が散り急ぐ
雪月花愛でて掴んだ無限大
全身で心の耳を無限大
一言に焦り感じる冬の底

富田林市　古田千華

春の日の真ん中辺に胸騒ぎ
愛ひとつ方程式が解けぬまま
頂上の風が欲しくて汗をかく
親不孝詫びてばかりの墓参り
バイキング野性に戻る皿の上

富田林市　山野寿之

母さんのぬくい背中で寝てた夢
この空気タダでいつまで吸えるのか
どれがどう効くのか薬たんとくれ
寒風に咲く老梅にはげまされ
アンテナを一つ減らしてみる余生

寝屋川市　岡本　勲

ペン習字止めて出てくる元の癖
現役がやれやれと言う金曜日
迫り来る老いに背筋をピンとする
寒空の庭に水仙凛と咲く
長旅の余韻土産に詰ってる

羽曳野市　宇都宮　ちづる

羽曳野市　安本美喜

散り落つるポピー炎の色のまま
冷え症のまだまだ足らぬマッサージ
殉教の聖者を忍ぶバレンタイン
義理チョコを食べて家庭の円満さ
恵方巻き口を大きく南南東

東大阪市　西田いくひろ

選挙戦是非よろしくと愛想よい
初風呂に浸かって癒す僕の幸
番組がつまらないからオフにする
怒鳴ったらあかん血圧上がります
良い心地散髪中は眠り込む

枚方市　河田洋子

指定席いつでも隅と定めている
もったいない鍋の隅まで残さない
出かけても心の隅に夫の顔
出歩いて部屋の隅々丸く掃き
喫茶店隅を選んで長話

八尾市　田邊浩三

年末に中身見て買う福袋
鏡餅役目終って網の上
声だけで愛を勝ち取る猫の技
蝦蟇口が大きく開く孫帰省
初めての入歯雑煮に四苦八苦

八尾市　前田紀雄

節分だ入歯だ豆が苦痛です
冬野菜たまの追肥に元気だす
アースマラソン地球は平らです
頂上でビールと御田至福時
触れ太鼓浪速に春を告げられず

大阪府　神野千恵子

前世は犬かもしれぬ香を聞く
公約もきっと冗談だったのだ
モンスターママがおっかけする王子
御銚子と御託噛み合う縄のれん
人体の不思議宇宙のごとくなり

大阪府　高木道子

音もなく積って世の中広くする
マスクかけサングラスかけこんにちは
我が家にいつか馴染んだ風邪の神
疑問符が政治も地球も我が家も
ウィルスを連れて小鳥が巡回し

大阪府　西川冷子

夢心地足湯の流れ時忘る
足湯場の温もり伝う湯気の中
いつからか介護記録の日記帳
通帳を取り忘れてるＡＴＭ
容赦なし時雨が見舞う冬の空

価値観の違う雌雄の道中記
ようと持ったナこれが連れ合い言う言葉
目を見張る発掘卑弥呼畿内説
若者よ徴兵無い国謳歌せよ

奈良市　加門萌子

浮かんだり沈んだりしてもう春だ
顔も見ず儲け話の電話あり
チューリップ春の形で待っている
秘密ひとつあって残りを楽しもう

和歌山市　坂部かずみ

くっきりと三段腹は動じない
国技へも桜吹雪の裁きあり
お雛様甘酒なじみほろり酔い
お雛様受験家族だお静かに

鳥取市　大前安子

強がっても輪ゴムの命知れたもの
花ゆれて君を忘れる旅路です
老母介護出来る私に感謝する
蟹の身を取って下さる彼が好き

鳥取市　坂本とも湖

雪かきへとけぬしこりが残り春
権力の滴る旨みしがみつく
関心を示す人いて暖かい
好奇心満たしてくれる靴洗う

鳥取市　松原ひとみ

積雪の下で草花春を待つ
昨年の鬼が笑った今年来た
仲良しの竹馬の友も逐次逝く
願い事粘り粘って粘りぬく

倉吉市　倉繁泰輔

畑の草しばし忘れる銀世界
雑草の生命力に気がぬけず
街角の赤いポストに夢託す
火の用心オール電化で忘れてる

倉吉市　前田喜美子

空と人つなぐきずなのタコの糸
松の内雪で出られず家の内
あいつだな名もない賀状手にし笑む
美しきゆえに冷たい寒の月

境港市　中井虎尾

比例区の票が勝手に動き出す
節操を曲げて大臣孤独なり
亡夫想う名句を妻に期待せず
パスポート要らぬ世界で生きている

米子市　生田寒之

買物難民ひしひしとせまりくる
心機一転楽しく行こう毎日を
近頃は肉を食べずに魚党
くる時がくればそれなり道開く

米子市　田村周子

雪掻きも隣近所の助け合い
ポタポタと雪の雫は春の音
雪の中ポストは無言立っている
手作りの沢庵母の味になる

米子市　見山温子

帯に短したすきに長し生きている
大雪に短い道も遠くなる
人間をうさぎは月で待っている
月だって欠席したい夜もある

鳥取県　飯野菖子

八十路来てまだまだおとこ捨て切れぬ
まだ怒る元気があって安心だ
独り住むおとこが見せた寒い背な
もう少し生きていたいと写経する

鳥取県　下田茂登子

労基法などないお母さん働きすぎ
春の音どこで探そう豪雪だ
幸せは自分でつくる兎年
執念に深く生きてる小沢さん

鳥取県　田口清帆

雪しんしん猫が留守居の一軒家
肉づけをされて話は弾み出し
長話されてもじもじ応待し
白い皿嫁の善意が盛ってある

松江市　福間芳枝

明かり消しメールの秘密あたためる
ふっくらの春日を食べる小半日
もう大変母が私の名を忘れ
くっきりと足跡残し逝くつもり

松江市　藤井寿代

らくがき帖一杯に書く孫の夢
雪遊び孫は冷たいとも言わず
餅腹という満足の独居爺
老いのパワー益々伸びる爪と髭

安来市　原煩悩児

踏ん張っているのによろよろしてならぬ
何時帰る行かぬ内から聞くあなた
ご自由に言葉の裏を読み落し
ライバルのぴたりと付けて来る焦り

雲南市　菅田かつ子

近況を知らす息子の声元気
祝日の日の丸揚げた人が逝き
世は無常会ったばかりにこの訃報
うすくなりテレビの上に何もなし

唐津市　岩崎實

猫の手も借りたい雪を持て余す
政界で捕まる奴は雑魚ばかり
惚けぬ内身辺整理着着と
癌告知心の準備させられる

札幌市　佐藤登美子

どの顔で生きてゆこうか冬構え
合図などみむきもしない古女房
旅立ちの汽笛がむせぶフルムーン
コンニャクに味が染みたか燗付ける

弘前市　高森一呑

陽光に春急ぎたてるプランター
アンケート個人情報引っ剥がす
謀叛かなオイに返事が戻らない
うとうとを見かねたようにお茶が出る

塩竈市　木田比呂朗

八十歳浮気心はまだあるぞ
小坊さんの読経コブシが効いている
事務的なハガキさよなら言って来た
豪雪の何故か月だけ冴えている

福島県　七ツ森客山

カーナビが近道までも知っていた
今更に子ども手当をさわいでも
俺に言うのかテレビで売る薬
自分でも草食系と認めてる

佐渡市　高野不二

狭い道待って良かったご近所で
女子会が格安ランチ座を占める
食べたい味長時間待ち気にならず
ついてたねすんなり来れた青ばかり

犬山市　奥村百合江

野菜食べコレステロール先細り
指紋薄れすべる食器がよく割れる
この歳で離婚は損と妻が言う
幅広い自由奔放いつか壁

江南市　脇田雅美

かみさんが普賢菩薩に見えてきた
おこずかい年金の日がまちどおし
年老いてまだ働ける妻の恩
年とってしなびるよりも派手にする

大阪市　浅井公平

ゆったりと来し方想い笑みこぼれ
へまばかり言訳している八十五
無理しなや医者に言われて不整脈
頬ばったトロの山葵に泣かされる

大阪市　田中都

愛されてばかり解らぬ愛し方
またゼロへ戻る女の長電話
〆切を延ばして待っている返事
音のない世界に音の神が棲む

大阪市　栃尾奏子

子育てへ新米ママは助け合い
神詣でいの一番に健康を
一か八思い切りよく株を買う
母の愛じゃけんなことも子のために

大阪市　前川善之

巻きずしもチョコも商魂利用する
さりげない妻の言葉にギョッとする
散歩して名もない草に癒される
マニフェスト馬鹿にしてるよ国民を

大阪市　松田　聰

布施次第院号貰い死出の旅
譲り合い顔見合わせて苦笑い
梯子酒後一杯に足取られ
祝賀会隅で補欠は一人酒

大阪市　吉田知之

原点を忘れふらふら日本丸
うっかりと銀行へ行く日曜日
鮮やかなノーの返事に救われる
個性ある友が跳ね合う趣味の会

池田市　上山堅坊

タンポポが寄り道誘う好きな靴
詰め放題もう一個入れ福逃げる
暇らしい週二ペースで爪を切る
お腹すいた子供の声で母笑顔

泉大津市　助川和美

ぼーっとしてる何処悪いのと声かかり
心で思うがなかなか出来ぬ善意の和
散歩道梅の香りに誘われる
ひなたぼこ小鳥さえずりうとうとと

河内長野市　内海綾乃

気まずさを呑んで和解をする勇気
叱った後たくさん誉めて勇気付け
氷河期を越えて手にしたおらが春
降灰と畜産業に病む日向

河内長野市　谷久美子

肩書きの消えた名刺が萎みだす
嫁に出し肩の荷おろす淋しさよ
性格を人生ゲーム暴きだす
テレビ見てイケメン好きと燥ぐ祖母

河内長野市　辻村ヒロ

元気貰う優しさ溜めた空財布
派手な喧嘩口で怒って胸痛む
へらへらの心へ誓いくりかえす
待ちわびた賀状びっくり初メール

河内長野市　山本エミ

神経痛諭吉を見ると治る祖母
ごたついた心の中に春の風
激動の心隠して美辞麗句
リモコンをしっかり持って大鼾

岸和田市　中岡香代

半世紀この町に住み墓も建て
淡墨で幽玄郷へいざなわれ
こだわってつくった家が住みづらい
いたわられ居心地悪い席に着く

堺市　近藤治子

鳥インフル命絶たれる鶏あわれ
渡り鳥インフルエンザ境なし
一千兆財政破綻に誰がした
南北が戦火交えぬこと祈る

堺市　増田和幸

母ならば子の食べ残し余りもの
老婆心余計なことに口はさみ
朝練へちらつく雪を駆けて行く
雪景色いっそう映える寒椿

吹田市　蔵田光子

分別が止める私の恋心
えー居たの存在感のない亭主
小気味良い鋏の音で装う樹
行き先は犬が決めてる散歩道

豊中市　貝塚正子

柳芽が風分け合うて風と生き
桜貝机の中で笛を吹く
わだかまりサラサラサラとカプチーノ
ほころびを模様に見せる母の糸

富田林市　関　よしみ

あの苦み義母に通じる慈姑味
背を掻くに鯨差手に母想う
座の位置を変えて本音を書き添える
春明けて風よ吹け吹け恵方から

寝屋川市　小谷滋彦

案件は山積みなれどなじり合い
税を食いひねもすのたり日本丸
マニフェストあれもこれもが先送り
街の角二時間過ぎた立ち話

羽曳野市　磯本洋一

白墨が飛んだ先生懐かしい
B面の人生も今共白髪
老いてなお白衣の医師は苦手です
カラオケで唱歌歌って座が白け

枚方市　小川良吉

財産も借金もゼロ明日がある
本音出さず我慢するのも歳の功
寒風がリンゴの頬を通り過ぎ
毒舌を容赦なく吐き胸痛む

枚方市　坂本ミヨノ

古い殻また一欠け脱ぎ捨てる
惚けたのと達者な口で笑っとこ
八十路からは玉虫色に衣替え
やり残し多く人生せわしない

八尾市　赤木妙子

幸せも不幸もことばから生まれ
バースデーメールも小さな幸せよ
うぶ声で男の子だと間違われ
深呼吸して新しい気合い入れ

大阪市　安藤なつこ

アンテナを立てすぎ道に迷ってる
北風に負けぬ元気で落葉掃く
突然の問いに答えがすぐに出ず
忘れたり思いだしたりして生きる

大阪府　小栢　こずえ

窓越しに見える青空春近し
冬日よりふきのとう芽も少し出て
なつかしき友に逢いたい今一度
毎日の献立考え脳トレに

大阪府　中井　記久乃

露天湯に初音を聞くや山の宿
書けそうで書けないままの春の詩
せせらぎの聞きおぼえある水の私語
八十路入り三年日記買う気概

大阪府　畑中　節子

今年こそ亀追い越して飛躍する
お神酒あげ飛躍の年へ手を合わす
スーパーへメモ持たされて車押す
歳あらた父の享年越した僕

大阪府　若月　祐作

初詣で深い祈りの三世代
悔いたとてどうにもならぬ過去だから
年金に身を委ねての侘住まい
暗証番号捻り捩じった満足度

尼崎市　小池　幸子

生き甲斐の絵筆はそっぽ向き拗ねる
足腰の弱り脳まで来んといて
消費税買物知れてる上げなはれ
きのう今日変わりない日々惚けまいぞ

加東市　岩本　美緒子

大根を食べたく思う寒い夜
年金で生かされ静か春うらら
入選の知らせうれしく活もらう
約束の予定みつめるカレンダー

加東市　黒崎　美紗子

脱皮するそんな夢見て冬篭り
妻の犠打あって得点定年後
朗らかな笑顔で分かる幸福度
古希飾る生きた重みの共白髪

川西市　日野岡　和之

大半が真面目な力士可愛想
我が子より可愛い犬に先立たれ
満月を見上げて頼む財運を
死ぬまでにときめく恋をしてみたい

篠山市　北澤　稠民

二人抜け七面倒なことになり
仮面脱ぐと素敵な景色見えますよ
まっさらな雪だ轍のくっきりと
シャボン玉一途というは美しい

篠山市　酒井　真由

夜のしじま一人病む日をふと思う
日めくりも一月が過ぎ寿司かじる
冬野菜菜切り包丁もち直す
節分を待って短冊つけかえる

篠山市　谷田多美子

失敗しすまない心うわべだけ
寒くなり乱雑になる家の中
こばんでた携帯今は必需品
またやったこけたら顔に黒いアザ

篠山市　永井かほる

かけもちの病院通いも足重い
シルバーは身長減って増す体重
公園の散歩でもらう有酸素
笑顔から軽く言葉が溢れ出る

三田市　辻開子

3D空を掴んで笑い転け
遺言の通りで良いと言う姉妹
野仏に片足上げる犬叱る
手抜きとはいつも真面目にやってこそ

宝塚市　丸山孔一

ままごとのママがお人形を叱る
更新がストップ悔しがるパート
大病が人生観を変えました
無作為に選びましたとアンケート

西宮市　泉水冴子

夫婦坂先が読めない物語
物指しがいくつもあってややこしい
雪道を尻餅つくもまた楽し
自然界に試されどおし人間力

西宮市　株元玲子

銀世界犬の足あと写真とる
孫達の帰宅待ってる窓明かり
はからずも視線集めて照れ笑い
水仙郷今がわが世と咲きほこる

三木市　山口久子

第12回 井笠川柳会笠岡大会

と　き　5月28日(土)　**開場**　9時30分
ところ　笠岡市保健センター(ギャラクシーホール)
電話 0865－62－5701
笠岡駅から④バスで伏越下車4分
事前投句　【続　く】(3選者共選)
河原　千尋、久本にい地、西川けんじ
応募方法　2句並記(指定用紙か便箋)
住所、氏名、柳名(ふりがな)、電話、柳社明記
投句料　1000円　4月末必着(年間賞対象)
投句先　〒714-0081 笠岡市笠岡2289 笠岡川柳会
TEL・FAX 0805－62－6200(戸田さだお)
当日投句　【芝　居】　西出　楓楽　選
(各題2句)　【　謎　】　大森　一甲　選
【　胸　】　前川千津子　選
(当日発表)【特別課題】　高木　勇三　選
会　費　1500円(句誌呈)
賞品・賞状　事前、当日投句1位に句碑贈呈
他に知事賞・県議会議長賞等多数
句碑序幕式　5月28日(土)　午前11時　古城山川柳公園
主　催　井笠川柳会
後　援　岡山県・岡山県教育委員会・笠岡市

橘高薫風の世界

――薫風七回忌特集――

雨の日―薫風の誕生

野沢省悟

秋風に傷なきものはなかりけり
人の世や　嗚呼にはじまる広辞苑

この二句は薫風の名作として世に知られている。秋風のさわやかさに揺れる草々でさえ、それぞれ一本一本に生きて来た傷を持っていると観た薫風の眼。手元にある広辞苑を計ってみたら8センチの厚さがあった。この中に万余の言葉がひしめく、その一冊の即物としての存在に、自己の小ささを薫風は観たのであろう。

この二句は薫風四八歳の時の句集『肉眼』に載っている句である。わずか四八歳でこのような境涯を越えた句を得た薫風という川柳作家は、どのように誕生したのだろうかと思った。

胃半分　肺半分の湯呑みかな

この句も『肉眼』に載っている句だが、薫風作品に触れて僕は死と深く対峙した匂いを背後に感じたのである。

『橘高薫風川柳句集全句索引』を開いていたら次の薫風の一文に会った。

「乱れ髪式部の世より恋は憂き　薫

私が初めて川柳を創ったのは『乱れ髪』という題で、昭和三十年の一月か二月か、冷たい雨の降る日であったと記憶する。二九年の十二月初旬に明和病院へ入院した私は、その翌朝ごぼごぼと真紅な生ま臭い血を吐いた。胸の中に混沌として固まらぬ泥のようなものがあって、それをいたわりいたわり療養生活をしていた。いわば人生の最も暗い雨の日だった」

結核という病気は、当時死と隣り合せの病気であった。薫風の略歴を見ると昭和三二年右肋骨八本切除とあり、これだけの治療をしなければ生還できなかったのである。

僕が親しく薫陶を受けることのできた俳人故成田千空（俳誌萬緑代表、第32回蛇笏賞受賞）が居るが、千空も二十歳で結核に患り、四年の療養生活をし俳句を始めている。その千空があるとき、唯ひたすら安静のため床に臥したことを僕に語ったあと、ぽつりと「坐禅というものがあるが、臥禅というものもあるかも知れない」と話した。この臥禅を薫風

も体験せざるを得なかっただろう。その千空に、中村草田男がこの句のために賞を設けたという第一回萬緑賞受賞の次の句がある。

大粒の雨降る青田母のくに

この句川柳人の先人大山竹二と薫風の境遇は似ている。竹二は「ふあうすと」川柳社の名作家として知られる。薫風より一七歳年長の竹二は、四十歳を越えてから結核に患り、六年余りの療養生活を送っている。

門標に竹二としるすいのちかな

花火黄に空の重心全く西

かぶと虫死んだ軽さになっている

これら名句を知っている人は多いだろう。薫風は竹二を強く意識していたように思う。雑誌「川柳」13号（昭和54年11月1日発行）の中のたいしょうの会の座談会の席上、薫風は次の発言をしている。

「紋太精神は継がれていても、今では大山竹二の句風が色濃いのでは……」「『門標に竹二としるすいのちかな』なんてゆう句は皆が採ってダブリますね」

さらに、悼大山竹二氏と題して昭和三八年二月に次の句を発表している。

黄の花火黄の菊となり悲をかこむ

この句は、竹二の「花火黄に空の重心全く西」を背景に創った追悼句であろう。

ところで竹二は、俳人石田波郷に傾倒していたようである。石田波郷は大正二年生れ、昭和四四年五七歳で死去。波郷もまた召集され結核に患り戦後も長く療養した。

初蝶や吾三十の袖袂

霜の墓抱き起されしとき見たり

桔梗や男も汚れてはならず

雪はしづかにゆたかにはやし屍室

等の句がある。そして竹二には次の句がある。

波郷以後この世界にも人が出ず

この波郷に薫風も竹二同様傾倒していたようである。「川柳塔」（昭和46年2月号）「柳界展望」に、サンケイ新聞一月七日の夕刊に藤沢桓夫の書いた文章が紹介され、その中に次の部分がある。

「私の友人に橘高薫風という優れた川柳作家がいるが、この人が去年の正月に作った句を雑誌で見て、これはもう一年前のことになるが、やってるなと私は微笑させられた。

その句というのが読み初めの句だった。

読初めの今年は石田波郷集

この句に私が共感を覚えたのは（略）、石田波郷氏はたしか一昨年の暮れに亡くなられた。その波郷氏の俳人としての優れた業績を惜しんで、そのかなしみを薫風君がこの句に託した切なさが、何か私の心に触れた。からだった」

この一句と桓夫の文章を読んで僕は「なるほどなァ」という思いがした。そして「桔梗や男も汚れてはならず」の句に流れる精神を薫風の句にも感じるのである。千空・竹二・波郷と同様に死と対峙したであろう薫風は、彼等とは又別な色彩を持っている。例えば、

恋人の膝は檸檬のまるさかな

この句のような叙情的な明るさである。

最初に紹介した薫風の文章の最後は次のように結ばれている。

「『初めて逢った日が雨の日だったら、その恋人達の将来は倖せに満ちている』という言葉を、私は或るフランス映画で知ったのだがこの古いフランスの言い伝えを私はひそかに心の糧としている。私の何番目かの恋人、川柳との出会いは暗い雨の日であったのだから」暗い雨の日に川柳を始めた薫風は、しかしこの古いフランスの言葉によって真に薫風として誕生したと言えるのではないだろうか。

野沢省悟略歴

本名同じ。昭和二八年青森県生まれ。昭和五一年川柳入門。高田寄生木、杉野草兵両氏に師事。「かもしか川柳社」幹事、「川柳双眸社」代表を経て、現在「川柳触光舎」主宰。著書に川柳評論集『極北の天』。川柳句集『セレクション柳人・野沢省悟集』他。

町の祭り

芳賀博子

当時の日録にはこう記されている。

◆（4月）25日　早朝の訃報。橘高薫風兄逝くと。平井美智子会員に献花を頼み弔電を打ってダウン。時経ずして福知山線の電車脱線大事故を知る。心身共にずたずたの思い。

◆26日　山陽新聞社からの依頼で追悼文を送稿。薫風兄が川柳欄選者だった縁。薫風・俊平・新子の三羽烏もついに一人になっちゃった……。

右記、月刊「川柳大学」一一五号の「新子日録」より引いた。再読すれば、主宰であり、我らが師であった時実新子の喪失感が今もじんじん響いてくる。誰が呼んだか三羽烏。それぞれ作風や生き方が違っていても三人は「ずっとなかよし」、かたい信頼で結ばれていたという。

行末を激しく問いぬキリギリス　新子

近しい川柳仲間の多くも私も時実新子によって現代川柳を知った。えっ、これが川柳か、こんな表現手段があったのかと一様に衝撃を受け、駆け込むように門を叩いた。

川柳は私発。

事実より真実。

ウソやエエカッコしいなど、もう一人の「私」がすぐに見抜く。

師の言葉をそのまま信条として、不細工でもデコボコでも、とにかく思いが句になり、全身で受け止めてもらえることがただただ嬉しくありがたかった初学の頃。ふとある一句に立ち止まった。

四面楚歌　故郷は豆の花の頃

一読、風が吹いた。わーっと絵が広がった。春の光、土の匂いに包まれて可憐に揺れる豆の花。はじめて目にする風景なのに痛切に懐かしい。ああ、と思わず声を漏らせば、一枚の景はひらりと翻り、冒頭へ舞い戻る。にっちもさっちもいかない中で抱える膝頭の冷たさもまた、我が身の記憶にあり。

遠と近。明と暗。過去と現在、そして未来。対極にあるさまざまが、たった十七音にくらくらと巡り、そのメビウスの輪からしばし抜け出すことができなかった。

作者は橘高薫風。そして現代の柳壇を代表する一人と知る。

恋人の膝は檜様のまるさかな
引金をひく一瞬が　恋にあり
湯槽出る男　海より出るごとし
遠き人を北斗の杓で掬わんか
妻よ子よ水の深さが臍を越す

句集を開けば、ページはしっかりと色焼けしていつつ、一句一句がすーっと胸の奥底まで沁み込んできた。まるでとびきりの天然水のように。それはきっと幾重もの地層に幾年もかけて濾過され、磨かれてきたがゆえの瑞々しさ。その地層に川柳という文芸の歴史が重なった。

屹立した個の作品でありながら、なにか大切なものがしっかりと受け継がれている。一体なんだろう。興味は、新たに川柳を見つめ直すきっかけともなった。

青春のわが思い出に一神父

妹に紙の兜がよく似合う
旅人も　月も　やがては去る砂丘

はたして作品の魅力は数多の薫風論において今も語り尽きることなく語り続けられている。いずれにも頷きながら、一ファンとしてことにも刮目するのは、徹底してストイックでありながら雄弁なカメラワーク。

薫風作品は読むというより、まるで映画のように見入ってしまうことがしばしばある。たとえば、

一人旅　町の祭りに行き合わせ

ぶらりと一人旅の男。気まぐれに降りたローカル線の駅には、手描きのポスターなど貼ってある。ほう、今夜は河川敷で花火大会か。

町の目抜き通りらしい商店街には提灯が賑やかに飾り付けられ、浴衣姿がいそいそと行き交う。祭りの小遣いでももらったか、洟垂れ小僧の二、三人が裏手の境内へ向かって一目散に駆けていく。おっとおチビが転んだ。無頼の頬がふっと緩む。

……と、私の一人名画座にはフィルムが流れ続ける。鄙びた町の佇まい。駅もポスターも提灯も、句の中にコトバで登場しているわけではないのに、細やかに情感たっぷりに浮かび上がってくる。

先代に笑うた写真などはなし

こちらは喜劇だ。笑うていない写真が笑わせてくれる。極めつけは物々しい社長室に掲げられた額縁の仏頂面。「ほんに先代はエラいお方でした。裸一貫で会社をここまで盛り立てて。今の若社長にも、もうちょっと商売に気い入れていただかんとねえ」なんて古狸、否、古株専務の愚痴まで聞こえてきそう。

商いのラムネ一本抜く暑さ
風鈴を残して家は売られたり

ラムネ一本、風鈴のたった一つに人生や時代が息づいている。

身を削るように表現を研ぎ澄ますことで生み出される豊かなユーモアや詩情。寡作で知られる作家ではあるけれど、一語、一句に費やされた気の遠くなるほどの時間とエネルギーを思う。しかし川柳はそれに値するだけの、いやそれ以上の文芸なのだと、作品は語りかけてくる。

三味線も弾ける大学教授なり
火の消えた炬燵の上の置手紙
舟歌は最も人を恋う歌か
祈りから目を挙げ花の鮮やかさ
霊柩車　辻を曲がってから　速し

川柳は人間陶冶の詩。

師・麻生路郎の至言を終生のテーマとし、柳壇を牽引。

われに過ぎたり　絢爛と死ねる歳

冠のような一句が輝く。と同時に、こんな一句も。

道遠し　師弟二人っきりとなり

どれだけ華やかに柳歴を重ねようと、現前には険しい一本道。けれど覚悟には自負も滲む。

川柳は座の文芸。

が、師弟とは常に一対一の対話。

やがて二人っきりは一人っきりとなり、自身との対峙に行き着く。歩めば歩むほどにいっそう果てしない。

大文字　夢の多くは夢で終る

そう、すべてはうたかた。しかしながら句の奥に道はまだまだ続いていて、先人の足音がどこからか聞こえてくる気もする。新子先生の足音もまた。

はて、私が今立っているのはどこだろう。いつか「道」なる道へ抜けることができるのか。頼りは春の月明かり。なのにこんなに目に沁みる。

（「川柳宙」会員）

強靱な抒情

桒原道夫

薫風川柳の特質

薫風川柳の特質は、その抒情にある。まずは、薫風自身のことばを見てみよう。

〝英語の発音は、終生、最初に英語を教わった教師の発音に似る〟ということを聞いたが、私の川柳も、穿ちの効いた鏡水氏の句風や、艶やかな鮎美先生の句の傾向に大いに影響になったものと思われる（筆者註―鏡水は薫風に川柳作句を勧めた人。鮎美は初心時代の指導者。本号『麻生路郎読本』余滴参照）。路郎先生に師事してからは、ガラリと句風を変えられてしまった。例えば毎月の投句でも「青雲のこころに蜜柑まだ遠く」「春愁の階段ゆるく螺をなせり」などの句は選に洩れ、「井池のてんやわんやの中で老い」「傘さしてやってる方が刑事なり」などが選に入った。私の抒情はぐんぐん押えられたように思えた。併し、私は川柳という文芸は知らなかったけれど、元来短歌や俳句は好きで、作句はしなかったが鑑賞は学生時代から長い療養生活中にかけて常に親しんでいたので、抒情から抒情へと傾かざるを得なかったのである。路郎先生は少しずつ抒情句も採って下さるようになった。私の抒情が先生の採用に耐える水準に立ち至ったのだと思った。

（「私の志向する川柳　愛を詠う」、「時の川柳」　昭48・10）

薫風は、昭和31年3月号から「川柳雑誌」の「近作柳樽」欄（路郎と北川春巣の共選）に投句を始め、32年2月に西尾葉推薦で不朽洞会に入会。4月号から「川柳塔」欄で路郎の選を受けるようになった。「井池の」の句と「傘さして」の句は共に、33年2月号に掲載された。路郎の選が厳しかったことについて、「川柳塔」（平7・6）の「柳緑花紅」で、このように述べている。

当初、清新な若い感覚の句を指向した自信の句はすべて没で、没個性の句ばかり抜けたが、川柳をはじめて七年、やっと「労働歌蟻が歌えば凄かろう」「恋人の膝は檸檬のまるさかな」「石くれも三つ積んだら思惟の塔」などの句を取って下さるようになった。あとは一気呵成だった（筆者註―「石くれも」の句は、「川柳塔」昭和43年1月号掲載の句で、路郎没後の句である）。

路郎選による入選句で、薫風最後の句集『喜寿薫風　自選三百句』（平15・7、沖積舎）に収録された句を参考に挙げておく。『喜寿薫風』は、川柳生活五十年に亘る作品からわずか三百句しか収録していない句集なので、晩年の薫風が愛着を感じていた句ばかり集めたものだといえる。

まずは、「近作柳樽」欄に入選した句。括弧内に、掲載された「川柳雑誌」の年月を記す。表記は、『喜寿薫風』に従った。

惜しみなく愛は奪えと　曼珠沙華　（31・5）

立話　長うて犬も坐り換え　（31・11）

次からは、不朽洞会に入会後、「川柳塔」欄に入選した句。

菊の露ふくんで母の針仕事　（32・5）

都会の夜　セロリは母の香に似たり　（32・11）

文机に菜根譚を伏せて　留守　（32・12）

檻の鶴　又　眼を閉ずるほかはなし　（33・1）

四月四日　長女章子誕生

木も草も花をつけてる誕生日　(33・6)
四面楚歌　故郷は豆の花の頃　(34・6)
　一月十三日　二女幸誕生
冬晴れて　見馴れし山も高く見え　(35・3)
クリスマスカードの雪はしずかなり　(35・4)
霊柩車　辻を曲ってから　速し　(36・1)
　鳥取砂丘
旅人も　月も　やがては去る砂丘　(36・1)
島一つ買うて暮らせば　涼しかろ　(36・8)
　句集『三文オペラ』の岩井三窓君結婚
三文オペラ第二幕へとかかりたり　(37・1)
労働歌　蟻が歌えば凄かろう　(37・5)
老醜の　土筆ほどにはなけれども　(37・6)
湯槽出る男　海より出るごとし　(37・7)
寺と萩マンネリズムも美しや　(37・12)
六法全書の重さと聖書の重さ　(38・1)
行灯の灯は恩愛を思わしむ　(38・1)
元日の駅前広場広場となる　(38・2)
降る雪に貧しきものが先ず隠れ　(38・3)
遠き人を北斗の杓で掬わんか　(38・11)
日向ぼこ梅干の種口にあり　(39・1)
羽根ペンで書きし嘗ての文学よ　(39・1)
恋人の膝は檸檬のまるさかな　(39・2)
土に字を書き残し入る試験場　(39・2)
初恋のうすみずいろとなりにけり　(39・5)
　鳥取旅情　二句
母の手を引いて砂丘の狐雨　(39・5)
東郷湖夕日ところを得て沈む　(39・5)
膝に手を置いて井上八千代かな　(39・6)
鬼灯よわが七才に恋ありき　(39・10)
　東京オリンピック
ひた走るアベベ仏陀の相に似る　(39・12)
　長男充誕生
わが子男子旭のごときまる裸　(40・1)
灯を消せば弥勒女菩薩毛糸編む　(40・1)

計三五句。

課題吟・句会吟で路郎選の句だとはっきりしているのは、次の二句。

　惜春の音の一つに昼の三味

一四七回大万川柳。「三味線」天の句。「川柳雑誌」昭和38年6月号掲載。

　弱肉強食鰐皮の鞄持ち

昭和37年7月22日（日）、第16回東奥日報主催青森県川柳大会。「雑詠」天の句。

以上、『喜寿薫風』に収録している路郎選の句は三七句である。

薫風川柳に対する評言

次に、薫風川柳に対するいくつかの評言を見てみよう。

＊

最初の句集「有情」において、すばらしい抒情で我々を圧倒した彼は、ある場合抒情作家などという名が却って負担となり、呪縛となって彼を制約したことと思うが、「檸檬」では期待どおりその重みに堪えて、みごとな成長をみせている。

人生譜柳は日々の風を見す
子の寝顔汝が父母多くあやまてり
元旦やわけて四十と云う齢は

などどの頁を開いても流れる深い人間愛と寂寥感はこの句集の主題部を構成して、清らかな旋律を運んでゆく。抒情の甘さに溺れることなく、いつの場合でも人生の真実を見失うまいとする態度こそ薫風の真骨頂であろう。

（「未来へ続く抒情　薫風句集「檸檬」に寄せて」、早川清生、「川柳塔」昭40・11）

＊

恋人の膝は檸檬のまるさかな
淡雪のいつから君を知りそめし

限りなくはき出されたこの糸の美しさ。難解に苦しむことなく平易の中にせん細な男の情を知ることが出来よう。（「川柳界の男たち」、森中惠美子、「平安」No.156、昭45・3）

＊

父親の懐深き凧の糸
黙契へマッチの暖を持ち続け

多くを喋らない、それでいて読者の心に深く浸透する句。（「前号特別作品 各作家25句鑑賞」、窪田久美子、「川柳展望」No.2、昭50・8）

＊

薫風川柳はその号のようにさわやかですがすがしい。平淡だが高雅な味わいがある。気韻に富む川柳といおうか。しかし決してかたくるしくなく、暖かだ。（「古稀薫風」帯文、田辺聖子、平7・11）

以上の評言をまとめてみると、薫風川柳は、深い人間愛と寂寥感をもって、常に人生の真実を見つめようとする態度から生まれ、平明ではあるが繊細で清爽で高雅な味わいがあり、多くを語らずして、しかも読者の心に深く染み入る川柳である、ということになるだろう。

それぞれの評言とも、薫風川柳の本質を衝いたものだが、さらにもう一点付け加えておきたい。

『一九九六年版 川柳年鑑』（緑書房）の「受賞句・問題句を斬る」と題した、薫風・時実新子・尾藤三柳による座談会からの引用である。

橘高 Z賞もそんな建築屋さんの談合と同じようなことはないでしょうけれど、複数の選者が、一遍この作者にもというようなことがあったら、おかしい結果になりますね。

尾藤 何か入選発表を見ると、ちょっとあるんではないかという感じはしますけれどね。

僕などの場合も、ずうっと何回か続けて桑野晶子さんを入れてくれないで、僕がやや見放したら、今度はだれかが入れて受賞しました。ある時期から、僕はおもしろくなくなったと思ったのです。晶子さんの句が。それでとらなくなったら、今度は。見方が違うんですね。選者が十人ですよ。十人いますとね。

橘高 そんなとき私が入れたんかもわからん。三柳さんがちょっと落ちるなというようなのが、私にはわかりやすくなって、これは上等だと（笑）。いろいろあります。

時実 薫風さんは穏やかですから。だけど薫風さん——話がそれますが、あなたのポエムというのは、こんな浮わついたものではないですからね。

尾藤三柳の発言におもねるかのような薫風の物言いに対する時実新子の、「あなたのポエムというのは、こんな浮わついたものではない」ということばにハッとさせられたのである。薫風川柳が人の心に深く染み入るのは、その抒情が浮ついたものではなく強靱であるからだと思うのである。

われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳

昭和41年1月15日（土）、「川柳平安」の「星座」句会。「若い」軸吟。薫風満39歳の作。「川柳塔」（昭41・1）に、〈元旦やわけて四十という齢は〉という作を発表しており、数えでいうと40歳。きらびやかに美しく死ぬことができない年齢になった男の感慨を詠んだ句。男なら誰もが抱く感慨だろうが、「たり」という完了の助動詞で言い切り、「絢爛」いう漢語を用いて、そこに込められた思いを読者に想像させる力があるところに、薫風川柳らしさがある。

人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑

人口に膾炙した薫風川柳の代表作の一つ。「川柳塔」昭和44年10月号に発表。句集『肉眼』（昭48・11、川柳塔社）に収録。「人の世や」で切れていて、「人の世は嗚呼にはじまる広辞苑」ではないところに注意したい。人の世は嗚呼で始まる広辞苑のようなものだ、という意味ではないのである。「人の世や」で、読者はさまざまな人の世を思い浮かべることだろう。そのような人の世の中にある「広辞苑」が、「嗚呼」という慨嘆のことばで始まるというのである。人間の知の産物である「広辞苑」が慨嘆のことばで始まる、ということによって、逆に現実の人の世の本質が照射された。

右の二句を見ても、薫風川柳の強靱さは明らかであるが、それでは、その強靱さとはどのようなものであり、どこから生まれたものであるか。それを、薫風の作句態度・表現の面から見ていきたい。

強靱な態度

突然の上梓であった句集『師弟』は、麻生路郎先生のお作と私のを並べてみてその距り（ママ）がよくよく分かった。先生のには生活の臭いが沁み込んでいるのに、私のはきれい事で終っている（ママ）脆弱さが顕著だ。今になって気付いても遅いのだが、この差は如何ともし難い。（「路郎の精神　川柳の質的向上」、「川柳塔」平11・5）

また、「川柳句集　椿守」（八木千代、平11・3、葉文館）の序でも、八木千代の〈木の机　鳥の匂いがしてならぬ〉を取り上げて、このように述べている。

路郎先生の
　鯛焼けば鯛の臭ひが残る也
も匂いの句で、双方生活の中からの取材でありながら、先生の生活の臭いと比べれば個性が判然とする。千代さんや私の句の先生に及ばないところは、この生活臭である。

薫風は、「私のはきれい事で終っている脆弱さが顕著だ」と言っているが、納得できない。路郎作品に生活臭が色濃いのは、生活をありのままに詠おうとした路郎の作風によるものであり、作風の異なる薫風川柳に生活臭がないからといって、劣っていることにはならない。また、生活臭がないことと、きれい事で終わって脆弱であることが、単純に結びつくものでないことは自明である。

薫風川柳が爽やかですがすがしいのは、けっして人生そのものに目をそむけているからではないことは、先に挙げた〈われに過ぎたり　絢爛と死ねる歳〉〈人の世や　嗚呼にはじまる広辞苑〉などの句を見ても明らかである。

「川柳ジャーナル」（昭48・12）の句集紹介「肉眼」で、石田柊馬が次のように記している。

いつであったか、数人であるきながら、ぼくは著者にぶしつけな質問をしたことがある。

「薫風さんは芭蕉より蕪村、近代では丸山薫がお好きでしょう」

「そうやねえ。好きやねえ。それに山村暮鳥やなあ」

「薫風作品の色彩感でそれはよくわかりますよ。でも美意識から離れたような、人と人とのふれあいの哀しみとか、もっと暗いものはお書きにならない」

「それはやっぱり、ぼくの眼の前で、今であんまり暗すぎるやりきれんものばっかり見て来たからやろなあ、きたないものばっかり見すぎて来て―」

ぼくの筆力ではとても橘高薫風の、その口調を活字で再現できないが、とにかく、暗いきたないものを見すぎてきた、という一語が今もぼくの耳奥に在る。その痩身、その作品の遠い裏側にある作家薫風の活字

ならぬ側面である。

人の世の暗くてきたないものを赤裸々に詠むのが強靱な精神なら、そのようなものを見据えてあからさまには詠まないでおこうというのも強靱な精神だといえる。薫風川柳が爽やかですがすがしいのは、人生の暗部を口には出さずにおこうという気概から生まれたものだと思うのである。

時代や環境、また個性も違うのであるから、路郎の抒情と、薫風の抒情が異なるのは当然であり、それは薫風自身もとうに自覚していたはずである。早川清生によると、薫風は若いころ、しきりに「知的抒情」と言っていたようだ。「川柳平安」（昭39・11）の「前号作品批評 知的抒情」で、薫風は、次のように述べている。

現代に生きる作家は現代を詠む。批判詩である川柳の場に於ける社会批判も、単なる報道的時事吟にとどまっていては価値がない。人間（生活）諷詠といわれる川柳で、恒久不変の人情を詠むにも、現代に生活するにふさわしい知的な眼の裏付けがなくては適わぬ。川柳とて時代の推移とともに少しずつ変化して行く。より知的に、より知的にと。知的抒情こそ、現代川柳の糧であると言えるのではなかろうか。

強靱な表現

それでは、薫風川柳の強靱さは、どのような表現から生まれたものであろうか。ここでは、その一例として、薫風川柳に多用されている漢語に注目したい。薫風は生涯に八冊の句集を編んでいるが、第四句集までは、すべて二字の漢語を、その題名としている。

第一句集『有情』（昭37・9、川柳雑誌社）
第二句集『檸檬』（昭40・7、川柳雑誌社）
第三句集『肉眼』（昭48・11、川柳塔社）
第四句集『愛染』（昭61・8、川柳塔社）

これらの題名は、それぞれ次の収録句から取ったものである。

砂丘有情　お前と月の出を待とう
恋人の膝は檸檬のまるさかな
恋人がいま肉眼に入り来る
紫陽花の炎群愛染不動かな

句集の題名となった句、言い換えれば、句集の代表作だといえる句を取り上げて、句語としての漢語が果たしている役割・効果を見ていくことにする。

砂丘有情　お前と月の出を待とう

これは、薫風が河相すゝむ・樋口舟遊等、西宮支部の会員と鳥取・米子を旅したときの句であろう。ただし、「川柳雑誌」の「川柳塔」欄には掲載されていないので、路郎選で没になった句だと思われる。「川柳雑誌」（昭36・1）には、「鳥取砂丘」の前書きで〈旅人も月もやがては去る砂丘〉が掲載されている。無機物の砂丘ではあるが、日暮れどきの砂丘はまるで情けを有しているかのようで、自分と通い合うものを感じた。それを「砂丘有情」とスッパリと言い切った。そして、そのようなお前（砂丘）とすばらしい月の出を待とうと、言挙げした句。「砂丘有情」と穿った点がこの句の眼目だが、最も言いたいところは「お前と月の出を待とう」である。

恋人の膝は檸檬のまるさかな

「川柳雑誌」昭和39年2月号掲載。

この句の場合、「檸檬のまるさ」が句の中心で、「檸檬」という漢語でなければ句は成立しない。平仮名の「れもん」なら、少し丸みを帯びている形のよい膝が思い浮かぶし、片仮名の「レモン」なら、すらっとした伸びやかな脚で、少しとんがったような形の膝が思い浮かぶ。しかし、漢語の「檸檬」となると、私には具体的な膝が思い浮かばず、梶井基次郎の『檸檬』を思い浮かべるのである。

一體私はあの檸檬が好きだ。レモンエロ

ウの繪具をチユーブから搾り出して固めたやうなあの單純な色も、それからあの丈の詰つた紡錘形の恰好も。——

（略）

その檸檬の冷さはたとへやうもなくよかつた。その頃私は肺尖を惡くしてゐていつも身體に熱が出た。（略）その熱のせゐだつたのだらう、握つてゐる掌から身内に浸み透つてゆくやうなその冷さは快いものだつた。

私は何度も何度もその果實を鼻に持つて行つては嗅いでみた。それの産地だといふカリフオルニヤが想像に上つて來る。漢文で習つた「實柑者之言」の中に書いてあつた「鼻を撲つ」といふ言葉が斷れ斷れに浮んで來る。

（略）

實際あんな單純な冷覺や觸覺や嗅覺や視覺が、ずつと昔からこればかし探してゐたのだと云ひたくなつたほど私にしつくりしたなんて私は不思議に思へる。（「現代日本文學全集」、昭48・4、筑摩書房）

薫風自身は、句集『檸檬』のあとがきで、檸檬について、次のように述べている。

檸檬はその形、知的、又、抒情的で、しかも清潔感にあふれている。天地の純真が身体一杯に漲っている感じである。

この句の檸檬のまるさを持った「膝」は、現実の膝ではなく、「檸檬」という漢語が生み出した、視覚や冷覚や触覚や嗅覚をもそそるイメージとしての「膝」であると言いたいのである。

恋人がいま肉眼に入り来る

「川柳塔」昭和47年7月号掲載。「川柳塔」昭和55年11月号の「一句の背景」で、次のように述べている。

有情・檸檬・肉眼と、過去三冊の句集を出した私は、それぞれの題名を、その中の一句から選んでいる。第三句集は「肉眼」だった。

座五は、いりきたると読む。しかし、はいりくると読んだ方がいいと思われる方もおられるだろう。

これは恋人が突然目前に現れたのではなくて、見通しのきくところから近づいて来るような静かな感情だ。それを句のリズムから受け取って欲しい。夢や幻、頭の中で思いめぐらし続けていた恋人が現実に見えて来たわけである。その感動と、いま肉眼に入り来る以前の長い感情とを併せ表現したかったのだ。

句集の題名としての「肉眼」は、作品というもの、絵空ごとではなく、温かい血の通った肉眼で見つめて行きたいという現在の心境を披瀝してもいるのである。

この句の場合も、「檸檬」と同じく、言葉としての「肉眼」であり、けっして現実の自分の目そのものを言っているのではない。恋人が現実に見えてきたときに、誰が実際に「ああ、恋人がいまオレの肉眼にいりきたる」なんて思うだろうか。しかし、「肉眼」という漢語と「いりきたる」という漢文訓読表現であるからこそ、恋人が現実に見えてきたときの、身の底からふつふつと湧き上がる喜びが表現されるのだ。

紫陽花の炎群愛染不動かな

「川柳塔」昭和53年9月号掲載。

紫陽花に炎群を見、それを愛染不動に見立てた句だが、「紫陽花の炎群」と「愛染不動」の取り合わせに、それほどの飛躍は感じられない。

「砂丘有情」「恋人の膝は」「恋人がいま」の三句が、いずれも最後の句集『喜寿薫風』に収録されているのに、句集『愛染』の題名ともなった、この句が収録されていないので

ある。それは、薫風自身、会心の作とは思えなかったからではないだろうか。あじさいを詠んだ句では、代わりに次の句を『喜寿薫風』に収録している。

あじさいの七変化して不垢不浄

「川柳塔」平成9年8月号掲載。この句は、平成9年6月22日（日）に死去した小出智子を詠んだ句。

『有情』『檸檬』『肉眼』『愛染』と、それぞれ、句集収録の一句から句集の名前をつけたが、以後の句集においては、そうしなかった。

第五句集『古稀薫風』（平7・11、沖積舎）
第六句集『師弟』（平11・3、葉文館）
第七句集『橘高薫風川柳句集』（平13・9、沖積舎）
第八句集『喜寿薫風』（平15・7、沖積舎）

『師弟』は、師の路郎作品と弟子の薫風作品を合わせて収録した句集であるところからつけた題名で、集中に「師弟」の句はない。『橘高薫風川柳句集』の一つの章の名前として、〈五十年花径遙かに香炉峰〉から取った「花径」が用いられた。「花径」の章には、『古稀薫風』『師弟』以後の作品が収録されているが、続く第八句集は、『花径』とはせず、『喜寿薫風』としたのである。

つまり、『愛染』以後の句に、一つの句集を代表するような漢語を含む句を作り得なかったから、そうしたのだと推測するのである。

それぞれの句集の他の作品を挙げて比較はしなかったが、私は常々、凝縮力という点で、句集『肉眼』が薫風川柳の一つの頂点を示すものだと考えている。

われに過ぎたり　絢爛と死ねる歳
蓮の花は一茎一花　恩師の忌
建国祭　寒の卵に血がまじり
てんと虫　ここにも小さい輪島塗
漆黒のピアノから出る海の音
眼鏡屋は鰯雲ほど並べたり
牡丹雪　ゆっくり俺が昇天す
人の世や　嗚呼にはじまる広辞苑
胃半分　肺半分の湯呑かな
憂国忌　柿は蔕のみ残りたり
白蝶入り　黄蝶出て来ぬ　寺の門
少年の幾人いても毬一つ
恋人がいま肉眼に入り来る
哀歓の底に穴ある植木鉢
睡蓮は万丈光の光源よ

挙げていけばキリがない。こんなにも珠玉が鏤められた句集は、『肉眼』を措いて他にはないのである。

終わりに

本稿は、薫風川柳の抒情について、薫風自身のことばや評言を紹介しながら通覧し、その抒情の強靱さを、作句態度と漢語使用という表現の面から指摘したにとどまるものである。表現については、例えば、俳句や和歌の影響などを検証することも、今後の薫風川柳研究には欠かせない要素である。例えば、

頑徹な鯛の頭の骨を見よ（平11・12・12）

は、山口青邨の次の作を元にしたもの。

こほろぎのこの一徹な顔を見よ（昭23）

薫風川柳は、日常の体験であっても、それをそのままに詠むのではなく、それにまつわるさまざまな思いをためて、ことばが降りてくるのを待ち続けた上で成ったものである。言いたいことを言い切っていながら、言わなかったことが滲み出てくる抒情。薫風川柳を、いまの私はそのように理解している。

『喜寿薫風』を出したころの薫風に、このようにお聞きしたことがある。

「先生は、実と虚のどちらを重んじておられますか。実の方ですか」

「そんなことないよ。実も虚も区別はせんよ」

最後に、薫風の言葉を掲げておく。

作品は言葉だけでしか勝負出来ないのである。（「この句この人」、「川柳塔」平12・10）

（順不同）

転生も美しからむ釈静水

小島蘭幸　薫風

平成3年9月6日に開催された竹原川柳会創立35周年、学生句集発刊・山内静水追悼川柳大会では、全国各地から出席者二七八名の大盛会でした。選者も錚々たる顔ぶれでした。静水会長の熱意に打たれて大会選者招聘に尽力されたのが、当時川柳塔社の理事長だった橘高薫風先生でした。

冒頭の作品は大会当日先生から直接頂いた色紙の中の一句で、課題「美」の軸吟であります。学生句集「竹の子」第二集の発刊と35周年大会を最も楽しみにされていた静水会長は、大会半年前の3月5日にご逝去されました。薫風先生は超多忙の中、お通夜に参列されたのです。その時先生から頂いた弔吟は〝静水と号したぎりに滾る水〟でした。大会前にお亡くなりになられた静水会長の無念さ情熱が、〝たぎりに滾る水〟によく表わされています。ここで又、冒頭の作品に戻ります。冒頭の作品からは静水会長が生まれ育った竹原の美しい風景を鮮やかに想像することが出来ます。そして静かに目を閉じると鳥の鳴き声、せせらぎの音が聞こえてきます。〝たぎりに滾る水〟の動と〝釈静水〟の静の美しさ…。今、私はこの作品を書斎に飾って山内静水師と橘高薫風先生を偲んでいます。

転生も美しからむ釈静水　橘高　薫風

生まれし時灯ありき　死に行く時灯あらん

八木千代　薫風

川柳さんとの四十数年に及んだ長い歴史。その当初から先生の句風に響くものがあって、未熟ながらも私の思考を横糸に渡し、自分なりの布地を織ろうとした歳月でした。

お目にかかる度にかならず下さった色紙や短冊の玉句。「僕が死んだらなあ。きっと値打ちが出ると思うから。」

お別れした今、栞先生と共にご芳名を唱え、灯をともし香を薫く朝夕の祈りに、当時の口調や光景が浮かびます。

ごくあたりまえのなりゆきで老人になりました。いつも念うのはおおかたと同じで、人間らしく終わりたい一事。

人並みの苦労はしてきたつもりですが、採点してみれば川柳さんとの出会い。そこから始まる有難いご縁によってかなり満たされた人生を頂けたように思います。

勿体ない譬えながらお釈迦さまだって、衆生済度の念で苦行に苦行を積まれたであろうと推察されます。

「もう、そろそろだよね」と友との会話も茶飯事になるこの頃、何となく心細さに襲われる時もあるのですけど、「生まれし時灯ありき死に行く時灯あらん」この一句を念誦していると、全身があたたまり、行く末の不安さえも消えて、平安な心境になるのです。

思えば、なによりの死に支度を賜っていたものです。

この人も金を持たせば愚かなり

小西雄々　薫風

橘高薫風先生と最初にお会いしたのは、昭和三十五年十月でした。それまでは川柳雑誌で句は拝見していましたが、松露川柳会の月例句会の準備をしていたとき、突然、西宮の明和川柳会の薫風先生をリーダーに、河相すすむ氏等、五名で出席されました。前日には鳥取川柳句会へ出席され、更に島根県の句会にも参加する予定と聞きました。

早速、薫風先生に兼題「人」の選をしていただき、前記の句は薫風先生の軸吟です。発表された時から心を離れず、今日に至っています。平素、持ったことの無い金子で、人生の進路を間違えた人は少なくなく、「穿ち」の鼓動が聞こえてきます。（当時の雅号は薫風子でした）

また、私の川柳句集『松露』の発刊記念川柳大会には、当時の西尾栞主幹、黒川紫香副主幹と共にご出席していただき、柳話をお願いしました。約三十分のうち半分位は祝辞でして、とても感激、感謝のうえ涙でした。

その前後、山陰各地の川柳大会には選者としてお迎えをし、私も川柳雑誌、川柳塔の記念大会には務めて出席し、ご挨拶を申し上げてきました。昔には懐かしい思い出が多く、貴公子然としたお姿が、瞼にまだ残っています。

母刀自の在せし頃の御御御汁

前　たもつ　薫風

この句は、柒原道夫編の改訂・増補『橘高薫風川柳句集』全句索引を開くと、平成11年2月26日の「朝日新聞」の夕刊に「師弟」の題で7句の2句目に載った句であることを知る。そう言えば、薫風先生の川柳が「朝日新聞」の夕刊に出たことを覚えているが、この句の記憶はない。

薫風先生はこの句に対する思いは深かったと見えて、NHK学園の川柳講座に用意された「橘高薫風抄」には、平成11年3月、14年5月とも初めの方にあげておられる。

句から母刀自（ははとじ）の読み方も意味も知り、御御御付（おみおつけ）の表記も教えられた。上・中・下とも敬語を揃えておられ、声に出して読めば、リズムのよさ、格調の高さが一層味わうことができる。

句を改めて鑑賞しながら、ありし日の薫風先生の川柳に対する厳しさを思い出している。先生は暇な時には辞書を開いて、〝辞書の散歩〟をせよと常々申された。「御御御付」は辞書の散歩で見つけた言葉であると、この句を例に何回も講義をされました。

木津川計先生が命ある一句と評される「人の世や嗚呼にはじまる広辞苑」の名句も、辞書の散歩から生まれたものであろうと私は思っている。

古希の屠蘇壺萬里酒羅生門

薫風　牛尾緑良

鳥取の鹿野みか月川柳大会の折でした。薫風先生と同室になる機会をいただき緊張していましたが、携帯用酸素ボンベを使用されていてリズミカルな音の中、カルチャーのはがきの選をされていました。

「私は生々庵先生、栞先生に次いで三代目だ。君も垂井葵水、野村太茂津両氏に継ぐ川柳塔わかやまの三代目、それなりに難しいポジションだから仲良くしよう」と話しかけていただきました。現在の川柳塔のことは勿論、やがて来る次代の塔のことも含めて先生のビジョンの一端を披瀝いただき、私などにと恐縮しながらのひとときは、川柳を覚えて以来の充実した時間でした。

三重県での国民文化祭選者に推薦いただいた時は、川柳界全般に目を配ってくるようにとのアドバイスを生かしきれずに、スケールの小さな自分を思い知っただけでした。視野を広く持つこと、何事にも動じない許容量を養うこと、自分オンリーの表現力を磨くことなど宿題はいっぱい耳に残っています。

この句と同じ古希を迎えて相応の自覚を得ていない自分を反省するとともに、鳥取の一夜を思い、微醺を帯びて先生をしのぶひとときを持ちたいわたしです。

惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華

薫風　藤村亜成

昭和五十六年ぼくが結婚した記念に額に入れて頂いた色紙の作品である。いまも夫婦の居間に宝物として壁に飾っている。当時この句意について深く考えもせずに只、ありがたく頂いたのであるが、この機会を得て、改めてこの句の意味を問いなおしている。

昭和三十七年に先生の処女句集『有情』が出版され、以後『喜寿薫風』自選三百句に至るまで、全ての句集にこの句が掲載されていることから、恐らく先生の自信作のひとつに上げられると思う。先生が川柳を始められたのが三十歳の頃からで『有情』に掲載されていることから、この句が生まれたのは少なくとも三十歳から三十七歳までの間であろう。この年代でなければこのように一途な愛の象徴として、真っ赤に燃える曼珠沙華の句想は浮かばなかったことだろう。また梵語で天上の華というめでたい意味もあり、結婚当時三十六歳のぼくに相応しいと考え、自句の中からこの句を贈って下さったのだと思う。今にして、先生ご存命の折、この句ができた経緯について詳しく伺っておけばよかったと思ったりもする。そして今、三十年を経、緩みの出た夫婦生活に新鮮な営みの道導として、この句を味わっていることに感動する自分を隠せないでいる。

富士山の藍に一礼してしまう

薫風　福士慕情

『橘高薫風川柳句集』の見開きに、薫風先生から揮毫を頂いた句である。薫風先生にとっての富士山は、麻生路郎師そのものだったのではないでしょうか。富士山を仰ぎ、路郎師を敬愛する薫風先生の心情の表れだと思います。

平成十年「川柳塔」八五〇号記念大会へ、波多野五楽庵先生に連れられ、大阪へ行ったのが薫風先生との初対面でした。五楽庵先生が、ホテルの薫風先生のお部屋へご挨拶に連れていってくれたのです。薫風先生は大きく手をあげて五楽庵先生を迎え、私には「遠いところからよく来られましたね」と笑顔でお声を掛けて下さいました。爾来、川柳塔まつりや川柳塔みちのくの記念句会等で会うたびに、私にまで気を遣って下さいました。

掲句は、平成十四年、川柳塔みちのく十五周年記念句会の当日、会場のロビーでお願いしましたら、「どの句がいいかな」と言われ、私はすかさずこの句をお願いし快く揮毫を頂きました。記念句会の翌日、世界遺産白神山地の十二湖へ。生憎の雨で酸素ボンベを側に薫風先生はかなり体調がお悪そうで、バスの中で横になられていたお姿が目に浮かびます。今でも大阪へ行くたびに、大きく手をあげて「慕情さん来たか」と言う声が聞こえてきそうです。

雪うさぎ昭和の雪はもっと白

薫風　松本文子

雪、何という懐かしさであろう。私は越後に生まれ育ち銀世界の中で遊びまくっていたのだ。昭和32年出雲に嫁ぎ故尼緑之助先生に誘われ川柳を知った。大阪本社へは〝おめでとう会〟に始まり和歌山・南大阪・きたぐち・広島・東京・青森と川柳行脚は続く。薫風先生に〝家庭はどうなっている、お金は大丈夫か〟と言われたのを思い出す。

何句会の後だったか大阪のどこかを歩いていた時、硝子越しに薫風先生が見えた。「アッ先生だ」覗いた皆は違うと言う。では確かめにとぞろぞろ店の中へ。何と！薫風先生がお一人で食事をして居られたのだ。その時の先生と皆の仰天した顔！。そして先生から近くの店で玩具を買って頂いた。兎だった。

私達が生まれ育った昭和の時代、戦前戦中戦後を逞しく生き抜いて来た。サツマイモの蔓まで食べ、飢え貧困に耐え、親兄弟と肩を寄せ合い、日本を信じて生きて来たのに今では後期高齢者だ。

今年は卯年、山陰も豪雪に見舞われた。孫達と雪だるまならぬ雪兎を玄関先にでんと作った。

暗く哀しい平成の雪よ、昭和の雪はもっと気高く美しかった、と薫風先生もつぶやいておられよう。

少年の幾人いても毬一つ

薫風

宮崎シマ子

NHKの川柳教室へ通っていた二十年程前に何かのことで薫風先生から頂いた色紙に書かれていた句です。当時先生の句にひかれ仲間とのお付合いが楽しくて、知らない間に九年も通っておりました。歳月の割に先生のお教えにお答えすることが出来ず、未だにうろうろしている私です。

九年の間には褒められたり叱られたり時には「今頃になってこんな句作ってどうするんや」と書かれたこともあり、その投句用紙は夫にも見せずそっと破りました。その時先生から色紙を沢山頂きました。その中で一番好きな句です。先生も子供の頃はこうして遊ばれたことでしょう。私も兄や友達と一日中お外でドッチボールをしたり野球の仲間に入れてもらったり毬一つで賑やかなことでした。文学的や心理的に考える事が苦手な私は一読すぐわかるこのような句が好きなのです。そしてこのたび一から先生の句を読み返してみて、美しい句、心優しい句、難しい句、わかりやすい句などと二十年前と違った気持で味わう事が出来いい勉強になりました。後何年川柳を作っていられるかわかりませんがあの世へ行った時、先生に叱られないよう勉強したいと思っております。

石くれも三つ積んだら思惟の塔

薫風

山本希久子

この句は薫風先生の初心の頃の句で、最初「石ころも三つ積んだら塔になる」と作句、路郎師の選で没になった。そこで推敲を重ねられ右の句となり日の目を見ることになったそうである。このことから推敲の大切さ、言葉の吟味の必要性を教えられた。絵画にたとえれば、第一想は素描画であり、線や色彩を加えてはじめて完成品となる。

薫風先生はよく美術館へ足を運ばれ絵画の鑑賞をされた。洋画家の中川一政氏は95歳の頃こう言われた。「人間絵ばかり描いていたら栄養がとれずやせ細って、生き生きした絵が描けない。何からでも教わり自分に大事なものを吸収することです。我々の仕事は感動をいかにして画面の中に定着させるかということで技術ではありませんから」

この言葉はそっくり川柳におきかえるとあてはまる。

薫風先生も川柳の句集ばかり読むのではなく、詩や小説を読み、美術館めぐりをし、映画を鑑賞して肥やしにせよと教えられた。

私の川柳は薫風先生のカルチャー受講生となったことからはじまる。そして今の私は…忙しいと言いながら心のゆとりをなくし、私の川柳の土壌は干からび、言葉の抽き出しはからっぽ。反省をすることしきりである。

草の芽が出たぞおしっこさせながら

薫風

太田　昭

薫風先生のご自宅にお伺いする度ごとに、ご自宅に近い喫茶店でコーヒーを飲みながら先生の川柳談義をお聞きするのが私の唯一の楽しみであった。

ある時先生が、「私が以前詠んだ句にこんな句があるんだが」と、教えて下さったのがこの句である。

「草の芽が出たぞおしっこさせながら」、先生は満面に笑みを浮かべながら作品を語られた。

私は、「先生、季節感をも感じさせる温かい句ですね」と申し上げたら、先生は「そうかこの句が分かるか」と仰って何も言わずにコーヒーを口に運ばれた。

小さなお子さんなのだろうか、それともお孫さんなのだろうか、芽を吹き出した名も知らぬ草花を避けるようにしておしっこをさせている、そんな先生の姿を想像すると、仄々とした季節の温かみと先生の優しさが伝わって来る。

この話は今から十六七年も以前のことではあるが、特にお齢をとられてからの先生の作品は、私にとっては難解句も多い中で、この句は先生の嬉しそうな笑顔とともに私の思い出に残る句となり、今でも私の部屋には、薔薇一輪と先生の写真とともに色紙が飾られている。

乱れ髪式部の世より恋は憂き

薫風

瀬戸まさよ

句集『乱れ髪』『喜寿薫風』の冠頭にある句である。

薫風師の初期の句であるが、薫風師自身この句を評価し好まれていた。初めての句集編集の際、先輩に選句を依頼したところ、この句をオミットされたので、自分は入れることにしたという話をお聞きしたことがある。

式部は女官の呼び名であるが、ここではやはり和泉式部であろう。激しく、切なく、恋を重ねた平安中期を代表する歌人である。貴船神社の深い木々の参道にある小さな看板「恋の道」は、和泉式部の恋多き女として名をはせた名残りである。小倉百人一首にも詠まれているのは有名。

あらざらんこの世のほかの思い出に
今ひとたびの逢うこともがな

若かりし薫風師は情熱の人、王朝世界で恋に生き、歌に生きたこの女性に魅力を感じたのは当然といえる。薫風師ならではの句である。

麻生路郎を師と定めてひとすじの道を選んだ薫風師である。美人画で高名な上村松園の名随筆『青眉抄』に、「師に入って師を出でよ」のことばがある。薫風師はまさにそのとおりの実践をされたと思う。

島一つ買うて暮らせば涼しかろ　薫風

川崎　ひかり

私の日課のウォーキングも丸四年過ぎました。一日八キロ、一万三千歩余の折り返し地点が薫風先生の句碑の在る白鳥中央公園です。昨夏は連日の猛暑日朝四時半から歩き始め、先生の句碑と一緒に日の出を拝した毎日でした。早朝とは言え汗が滴り落ちます。

「島一つ買うて暮らせば涼しかろ」まったく同感同感です。

播磨灘を背景に四季おりおりの木々の緑と花に囲まれて気品にあふれ、また威風堂々と建つ句碑は先生そのものの姿です。建立から十八年すっかり公園の顔となりました。生前先生はこの句碑と白鳥の地をこよなく愛され、よくお忍びでいらっしゃいました。最後にいらしたのは、本社の人達とご一緒に公園の句碑と栞先生の句碑を見にいらした時です。白鳥温泉の階段を下りながら記念大会のお話しをしましたら、「俊平も一緒だった」と呟くように言われたお声が今も私の耳底に残っています。

先生はいつお会いしても必ず先に私を見つけて下さり、「ひかりさん」と両手で私の掌を包んで下さいました。今年は先生の七回忌。今もって信じられない気持です。

今日もまた先生といろいろなお話しがしたくて、いそいそと出掛ける私です。

桜かてすかっと散ったわけでなし　薫風

木本　朱夏

薫風先生が亡くなられる三ヶ月ほど前に、頂いた文章があります。「元旦や男も龍も玉を抱く　薫風」昭和63年の年賀状に書いた句である。勿論のこと龍年であったから玉が抱かれている。戎さんは鯛を抱き、大国主命は兎の苦難を救い介抱して元の白兎に戻された。この世の命は短いようで長く、長いようで短い。苦しいようで楽しく楽しいようで苦しい。川柳の道も同じである」と、新聞のチラシの裏に書かれたブルーブラックの文字に、面影が浮かびます。

先生が最後の入院をされたのは、平成十七年二月二十日のことでした。四月十日、ご家族そろって病院の庭でお花見を楽しまれ、大層喜ばれたそうです。それが人生最後のお花見となりました。

先生の書き遺された「この世の命は短いようで長く、長いようで短い。苦しいようで楽しく楽しいようで苦しい」は、「胃半分肺半分の湯呑みかな」と片肺飛行を余儀なくされながらも、淡淡と運命を受入れ、楽しそうに振舞っていらした先生の、人生観、本音を伺ったように思います。

「すかっと散ったわけでなし」と詠まれた桜こそ、先生の化身だったかも知れません。

橘高薫風略歴

〈本　名〉
橘高　薫（きっこう かおる）

〈生年月日〉
大正十五年七月十一日

〈没　年〉
平成十七年四月二十四日没　享年七十九歳

〈川柳歴〉
昭和三十年一月　川柳作家として活動開始
昭和五十年六月　日本川柳協会理事に就任
平成　四年六月　社団法人日本川柳協会理事に就任
平成　六年六月　社団法人日本川柳協会常務理事に就任
平成　七年六月　全日本川柳誌上大会特別委員長に就任
平成　八年六月　全日本川柳誌上大会出版委員長に就任
昭和三十二年一月　麻生路郎に師事
昭和三十三年二月　『川柳雑誌』編集に従事
昭和四十年十月　川柳塔社創立委員として「川柳塔」誌を発行
昭和四十五年十一月　川柳塔社副主幹、副理事長に就任
平成二年十月　川柳塔社理事長に就任
平成六年六月　川柳塔社主幹に就任
平成十二年十月　川柳塔社名誉主幹に就任
昭和六十二年四月　日本現代詩歌文学館評議員
平成六年七月　大阪川柳人クラブ副会長

〈文化団体歴・選者歴〉
昭和五十年一月　キリスト教月刊誌「声」川柳
昭和五十五年六月　朝日新聞なにわ柳壇
昭和五十六年一月　山陽新聞柳壇
昭和五十六年五月　NHKラジオ川柳選評
昭和五十六年十月　西日本文字放送川柳教室
昭和六十年一月　大阪都市協会月刊誌「大阪人」川柳
平成六年六月　大阪府警察本部月刊誌「なにわ」川柳
平成六年六月　南海電鉄情報誌「サウスウェーブ」川柳
平成八年十月　第十一回富山県国民文化祭川柳大会（選者）
平成十一年十月　第十回岐阜県国民文化祭（選者）
第　一　回全日本川柳誌上大会（選者）
第　二　回全日本川柳誌上大会（選者）
第　五　回全日本川柳誌上大会（選者）
第二十一回全日本川柳誌上大会（選者）
第二十三回全日本川柳誌上大会（選者）
第二十四回全日本川柳誌上大会（選者）

〈講師歴〉
昭和五十五年六月　朝日カルチャーセンター
昭和五十六年六月　NHK文化センター大阪
昭和五十六年六月　NHK学園川柳入門
昭和五十六年十月　毎日文化センター
昭和五十六年十月　産経学園梅田第二
平成元年一月　豊中身障者福祉センターひまわり
平成九年四月　NHKりんくう文化教室
平成十二年七月　よみうり松坂屋大阪文化センター

〈賞　罰〉
昭和五十五年五月　第十二回三條東洋樹賞受賞
平成十三年四月　春の叙勲木杯一組台付賜与さる。

〈川柳関係著作〉
昭和三十七年九月　川柳句集「有情」発刊
昭和四十年七月　「檸檬」発刊
昭和四十八年十一月　「肉眼」発刊
昭和六十年八月　「愛染」発刊
平成七年十一月　「古稀薫風」発刊
昭和五十四年七月　著書「麻生路郎」発刊
昭和五十八年七月　「なにわ川柳この一句」発刊
昭和六十年七月　「川柳に見る大阪」発刊
平成十一年三月　「師弟」発刊
平成十三年九月　「橘高薫風川柳句集」発刊
平成十四年三月　「橘高薫風川柳文集」発刊
平成十五年七月　句集「喜寿薫風」発刊

橘高薫風50句

哀歓の底に穴ある植木鉢
秋の恋受話器の奥で時計鳴る
朝顔のファンファーレの中僕は生まれた
足摺の雨は遍路へ地から降る
あの世からこの世はみえてさし向かい
生きるとは写経に続き賀状書く
一輪の菊は気合で咲くごとし
うかうかと来た七十の顔がこれ
牛の背で笛吹く恋がしてみたし
海鳴りへ標本室の貝の耳
大きな滝になろうと思う父の日に
落椿情炎未だこちら向く
鬼あざみ　能登曇りてふ曇りあり
革命さはじめてコーラ飲んだ日は
かしこさよ陛下と同じ目の高さ
風のまちにて薫風からと書くいのち
軽い嘘種なし葡萄食べながら
学生を矢面に立て　国貧し
切手にも金魚が泳ぎ風薫る
キリストの肋に似たる昼寝をし
孔雀羽根ひろげくるりと能役者
句碑ありぬ　亡き先生の背丈程の
黒百合を見てこの旅はこれでよし
コスモスのほったらかしの美しさ
子の寝顔汝が父母多くあやまてり
この世からあの世は見えずさし向かい
砂丘有情　お前と月の出を待とう
讃岐富士　一番星を簪に
漆黒のピアノから出る海の音
しのび寄る秋が今年は音を立て
人生に起承転結ありにけり
立ちたくて立ちたくて蛇木に登り
大文字　恋のはじめのごとく点く
夏雲の　死ねば越ゆべき峰ならん
煮凍りよ少年の日は貧しかりき
入院や　わが来し方の土埃
合歓の花母の乳房を焼いて来ぬ
喃妻よ鮎まで値切ることはない
蓮の花は一茎一花　恩師の忌
八十になったら恋をしてみよう
引金をひく一瞬が　恋にあり
人の世や　棺に打ち込む釘もあり
冬の酒　唐竹割りに胃へ落ちる
三日月があんなに光のも勇気
飯を食うさえも勇気の要る日なり
逝く春へ白だけ残る五色豆
夢醒めて紙の音する千羽鶴
われに過ぎたり　絢爛と死ねる歳

（改定・増補『橘高薫風川柳句集』全句索引　桒原道夫編より編集部抄出）

誹風柳多留一一篇研究 68

小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫・増田忠彦
山口由昭
清　博美

528 **てんやくとてる日の神子ハすりちがい**

小栗　典薬は、④令制で、諸国におかれた国の医師のこと。⑤多く、医師をいう。照日の巫は、梓弓の弦をたたきながら死者の口寄などする巫女。（「日」）

謡曲『葵上』の句。

是は朱雀院に仕へ奉る臣下也、扨も左大臣の御息女葵上の御物の怪以外に御坐候程に、貴僧高僧を請じ申され、大法秘法医療さまざまの御事にて候へ共、さらに其験なし、爰に照日の御子とて隠れなき梓の上手の候を召して、生霊死霊の間を梓にかけさせ申せとの御事にて候程に、此由を申付ばやと存候。

という冒頭部分を踏まえて、験無くて退出する医者と召された照日の御子がすれ違っただろうと詠んだもの。

陸尺の中をおしのけ照日来る　筥一20

山田　賛。最後には神頼み、とはおかしいですね。

清　賛。

529 **間男をするよと女房こわいけん**

小栗　強意見は、きびしく訓戒すること。厳重な諫め。叱責。（「日」）

女房が亭主に対して、「あんたがそういうことをするなら、私だって間男をするよ」と厳しく叱責している様子。朝帰りの場面であろうか。

間男をせぬを女房ハ恩にかけ　五40

伊吹　賛。目には目を。

清　賛。

530 **くわいらいし子供の外ハにがわらい**

小栗　傀儡師は、子供相手に操り人形を遣って見せる大道芸人。ねこまわし。人形箱を首にかけ、手甲・脚絆に草鞋ばきの姿。多く山の手に現れたが、安永頃を最後に廃れた。（「江」）

傀儡師は、もともと子供向けの大道芸である上、主題句の時代にはもはや時代遅れのものであったと思われる。従って、子供はともかく、大人はただ苦笑いをして見ているほかない代物だというのであろう。

くわいらいし万さいよりも見てがなし　七9

わらわせもなかせもせないくわいらいし　九29

清　賛。

531 **はな紙へしの字を書イて嫁ハさし**

小栗　「しの字を書く」とはどういうことかよくわからない。柳雨『風俗志』には「盃の

縁で撫でる」と頭注があるが、その意味もよく分からない。盃に付いた口紅を鼻紙で拭って返杯すると、鼻紙に「しの字」のような口紅の跡が付くということなのだろうか。

嫁が返杯のために盃をしたむとき、鼻紙の上に滴を切る。嫁はあまり飲めないので滴がたくさんで、鼻紙に「しの字を書く」ほどだという解では如何か。勿論苦し紛れの駄労解なのだが。

うるしやハの、字油屋しの字也　八八20
したむ事ならない酒を娘しい　安四鵜2

増田　礎稿後半説に賛。例句油屋のしの字のごとく、鼻紙にしたる酒がしの字だというのでしょうか。

山口　前半説賛。紅の跡と思う。

清　よくわからぬが、やはり礎稿前半説か。

532　**大道でみやくをみている小児いしや**

小栗　小児医者が、どこかへ往診に行く道すがら、最近診察した子供を往来で見かけたので、「どれどれ、よくなったのかい」などと言って脈を診ている様子。別に病気を心配してではなく、付き添っている親への愛想かもしれない。

清　賛。商売上手な流行医者。

533　**りん病のどくもあいつとこししよいひ**

小栗　『太平記』（巻第四　備後三郎高徳が事付けたり呉・越軍の事）に見える伍子胥の挿話を詠んだ句。伍子胥は呉王夫差の臣で、呉王が西施に耽溺するのを諫めて逆鱗に触れ、誅せられた人物。一方、呉王が石淋（腎臓・膀胱結石）を病んだ時、勾銭がこの結石を舐めて、病気治癒に貢献した挿話がある。

主題句は、この二つの挿話を合体させて、伍子胥が呉王に諫言するとき、「淋病（石淋）の毒もあの西施のせいだ」と言っただろうと。

りん病もあいつかわざと伍子胥いひ　三五34

りん病でせいしがなつたとこをする　末二16

清　賛。

534　**内証て鹿を手ぎねておつはらい**

小栗　手杵は、中央のくびれた部分を手で握って、まっすぐにつくように作られたきね。（日）

奈良名物の鹿と晒を詠み込んだ句。奈良晒は、灰汁で煮た布を臼で搗いて不純物を取り除くのが特徴とされているので、奈良の人はその手杵で、邪魔をしに来た鹿を追っ払うという意。「内証で」は鹿を乱暴に扱ったことが知れると大変なことになるので、ごく内密にということ。

さらしつくきねでおしへる三笠山　七3

山口　賛。落語『鹿政談』では鹿を誤って殺すと打ち首。

清　賛。

535　**いくじなし下駄のはなをゝさして立**

小栗　不明句。下駄の鼻緒を「さして」立てたのは意気地なしだというのであろうが、「さして」（あるいは「さしで」か）がわからない。物理的には「緡で」鼻緒を立てることはありそうだが、それが意気地なしに結びつくものかどうか。臥煙に脅されて緡を大量に買い込んだので、鼻緒に使っているというのはストーリーに過ぎるか。

増田　臥煙のおどしに賛としたい。

山口　礎説のストーリー賛。臥煙に脅かされてすでに大量の緡を持っているのだ。従って他の鼻緒を用意せず、あらゆる下駄に緡を使っている。

清　同右。

『麻生路郎読本』に思う

新川洋洋

『川柳雑誌』『川柳塔』通巻一〇〇〇号記念出版として、『麻生路郎読本』が川柳塔社より刊行された。麻生路郎アルバム、麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」、麻生路郎文集、麻生路郎語録、麻生路郎物語、麻生路郎の人と作品、麻生葭乃作品「福寿草」、麻生路郎著作解題、麻生路郎年譜、作品索引など、514頁という大冊である。

「川柳六本柱」のひとりとして、井上剣花坊の『大正川柳』を中心に新川柳運動が展開していた大正初期、関西川柳社の『番傘』を中心に、麻生路郎、岸本水府、西田当百、川上日車、木村半文銭などの錚々たる顔振れが登場し、それぞれの個性とともに離合集散していくさまがわかり、われわれ川柳の後輩にとって貴重な資料となっている。

麻生路郎の柳歴は、

明治38年5月20日、小島六厘坊の『新編柳樽』に、17歳で参加する。

大正2年、5月15日発行の『番傘』2号から参加する。

大正3年4月9日、西田当百夫妻の媒酌で、河盛ヨシノと挙式。

大正4年1月28日付、当百宛に『番傘』脱退の書簡を出し、『番傘』7号から川上日車と同人辞退。

大正4年8月1日、川上日車とともに『雪』創刊号を発行。

大正12年2月、川上日車・木村半文銭による『小康』発刊、日車に要請されるが参加せず。

大正13年1月19日、川柳雑誌社創立大会（大阪市）、2月15日、『川柳雑誌』創刊号を発行する。

昭和11年7月、川柳雑誌社を路郎の個人経営とし、川柳人協会を設立する。

昭和11年8月、川柳職業人宣言。

昭和18年12月、『雑誌奉還』終刊となる。

昭和21年8月1日、『川柳雑誌』再刊。

昭和40年7月7日、路郎死去。『川柳雑誌』（以下川雑と略称する）は、9月号の460号で幕を閉じ、10月からは『川柳塔』と改名、現在に至る。

とあって、昭和11年8月の「川柳職業人宣言」が注目される。宣言をしないで、それらしい行動をとる人もいるやに聞いているだけに、堂々と宣言する決意、態度に敬服するところである。

私はいよ〳〵川柳で飯を食ふことにした。

イヤ食べさせて貰うことにした。……

と、路郎自身述べているように、踏み切るのには並々なる決断を必要としたはずである。趣味で川柳をやる、本職の暇をみて、手すさびに川柳をやる、といった遊び半分ではなく、

おのが生涯をかけて川柳をやるという、いわば、背水の陣を敷くかのような悲壮さである。

路郎夫人である葭乃句集『福寿草』から

一生に自分の部屋というが欲し

野の百合を見よと予算のないくらし

のように、川柳職業人の暮らしぶりが想像される。江戸時代に、俳諧人口の増大に伴って専門俳人の誕生を見、京都俳壇の中心であった松永貞徳は、門下数千人を擁する、文字通り俳諧の大御所として全国に君臨した。

広大な敷地に柿園をつくり、柿や桃などの果樹を植え、三人の秘書を使い、家庭的にも経済的にも極めて恵まれた存在であった。俳諧点者としての地位が確立し、それによる生活が職業として成立し、俳諧宗匠として君臨するようになった。松永貞徳は貞門俳諧の大御所として、実の世界において実の俳諧をしていた。もちろん、多くの俳諧宗匠と称する者がいて、その縄張り争いは、彼等の直接収入面に関係したから、深刻なものがあった。つまり、点取り俳諧の横行となったのである。

松尾芭蕉は、もちろん、貞門俳諧から出発するが、点取り俳諧の革新を目指した俳人であり、少数派でもあった。芭蕉の俳諧革新が認められるのは江戸時代の中期以降で、点取り俳諧が飽和状態になってからである。「芭蕉に帰れ」が叫ばれ、俳諧が俳句として認知されたのは、芭蕉が死んでからのことである。

芭蕉は弟子たちの支援によって生きていた。実の世界における実の生活でなく、虚の世界において虚の俳諧に生きていたのである。わび・さび・しおりの蕉風俳諧は、虚の世界において作られたのである。談林俳諧の西山宗因は、

抑々俳諧の道、虚を先として実を後とす。古風当風中昔、上手は上手下手は下手、いずれを是と弁へず、好いた事して遊ぶにしかじ、夢幻の戯言也。

といっているが、芭蕉は貞門俳諧から出発し、談林俳諧をへて、蕉風俳諧に到達している。

麻生路郎の川柳職業人宣言は、いうなれば、川柳点者、川柳の宗匠として生きるということで、江戸時代のそれと酷似している。川柳人口の増大を図り、川柳の普及を進めることで、大きな貢献をするが、昭和36年6月12日の川柳岡山6月句会で、路郎は大森風来子に

岡山支部を直ちに返上せよ。君は只今限り不朽洞会員を除名する。

と激怒したが、当時の川雑岡山は四五〇～五〇〇名の会員数があり、川柳岡山の『川雑』からの離脱は大打撃であった。宗匠の縄張り争いであった。個我の意識が未熟な時代であれば、宗匠の翼下に唯唯諾諾と居れたかもしれないが、現代的な自我の目覚めは、そうした枠を越えようとする。『番傘』から離脱した路郎や日車、『川雑』から離脱した大森風来子や河野春三らは、それぞれの志す方向へ進むことになったのである。

戦前・戦後を通じての麻生路郎、その川柳の普及、社会的発展への寄与は絶大なものと認められるが、文芸史的に眺むるならば、昭和版点者、宗匠であったかな…と。

『川雑』の編集長をしていた河野春三は『川雑』を離れ、少数者の道を歩むことになった。つまり、虚の道である。路郎が「実」の世界で「実」の生活、「実」の川柳を作ったのに対し、春三は「虚」の世界で「虚」の生活を送り、「虚」の川柳を作ったのである。

麻生路郎は、川柳を伝統の枠に嵌めこむことをせず、三要素を認めつつ、それに埋没することなく、さりとて新興川柳の観念的な句

風に走ることなく、たとえば、『番傘』の水府を右とし、新興川柳を左とすれば、その中間ぐらいに位置するのが、『川雑』の路郎であり、おだやかな詩性、親しみやすい大衆性をもっていた。

河野春三は路郎の下に『川雑』の編集に携わるが、やがて離脱し、川柳の現代化へ舵を切ることになった。昭和37年8月に出版した『現代川柳への理解』は、彼が昭和2年25歳のとき、川柳に革新系川柳の存在を知ってから、戦前の『川雑』『川柳使命会』『川柳時代』『手』などの伝統川柳の実作者から出発、自己革命による脱皮をへて、戦後の『私』『人間派』『天馬』などの、川柳文学運動に邁進したあしあと、それは現代川柳という「少数者の道」への啓蒙の書であるとともに、彼の生涯の集大成ともいうべきものである。

昭和39年3月、春三の個人誌『馬』を創刊するが、草刈蒼之助、時実新子、春三による連作の競吟は『馬』の大きな魅力であった。その5号の春三の「黒縄抄」50句から、

かげろう　失明する　ハガネの蝶
くらやみの　くらがりの　花咽せぶ

さらに、これまでの作品から、

水栓のもるる枯野を故郷とす
流木の哭かぬ夜はなし　天を指す
いちまいの　一枚岩の　岩を抱く

などの詩性や批判性は、麻生路郎の、

二階を降りてどこへ行く身ぞ
君見たまへ菠薐草が伸びてゐる
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

を見るとき、相当の距離感を誰しも感じることであろう。これらの異質な作品を生みだした個性は、関西の大阪の地で育まれたものである。その奥行の深い、間口の広い、豊饒な土壌をもつところであることを、痛感しているところである。

筆者略歴

昭和37年6月　小樽川柳社に入る
〃　38年3月　小樽川柳社同人・編集長となる。
〃　46年3月　小樽川柳社退会・現代川柳「群」編集長となる
〃　50年4月　文部省指定校研究主査となり、多忙のため川柳を休止。
平成7年4月　教職を退き、第2の人生とともに川柳評論活動を開始、現在に至る。

著書＝評論集『梨の花』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

現代川柳『点鐘』「雑唱点鬼簿」より転載

ここ暫らく「麻生路郎読本」を読み続けている。最近の川柳関係の出版物の中で、この一冊は優れていると思う。豊富な資料と解説の在り方のよろしさを感じている。路郎とは生前二度しか逢って居ないし言葉を交わしたことはない。印象として気むずかしさと短気さしか憶えていない。それに河野春三や東野大八から聞いた「路郎」を捕捉したに過ぎない。それがこの「麻生路郎読本」で少しづつ本質に近づけた様で喜んでいる。今にして橘高薫風が、その川柳生活が路郎だけに師事した意味を理解すると共に恵まれた一生をうらやましく思った。薫風と私は同じ大正十五年生まれ、一時期親しく川柳活動を共有した仲である。岸本水府と麻生路郎は川柳の起点を同じにし、その活動過程で少しづつ距離を持ちその組織体では全く別の活動があった。それでも互いを最も知る関係だったと思っている。懸命に過ぎた先達を、今の川柳人はどう思うているのだろうか。今の「川柳塔」や「番傘」の作品を読み返して路郎や水府はどう思うているだろうか。そして川柳はどうなるか。

（主宰　墨　作二郎）

エッセー

俳諧師松木淡々（半時庵）とその時代

小沢　淳

顕原退蔵の「**俳諧史の研究**」に、高点付句集を刊行した松木淡々の記事があります。この句集に会うべく、川柳塔まつりで上阪の折、中之島図書館で拝見し、関連する記事も入手でき、いささかの感動を覚えました。

いわゆる「上方」での活躍であり、相通じるものがあろうかと思い、紹介いたします。

「**大阪人物辞典**」によると、淡々は延宝二（1674）年、大坂西堀河阿波座で生まれた。早く京に出て俳諧の道に入り、元禄六、七年ころ江戸に下り、芭蕉に会い、芭蕉没後は不角につき、後、其角の弟子となる。

宝永五（1708）年、京に移住す。数年後鷲峰山の半腹に半時庵を営み、俳諧教授の生活に入った。大坂に戻ったのは六二歳の時で江戸堀に「木槿庵」を構えた。

淡々は質性も勝れていたが、何よりも商才が抜群であったと言う。俳風をひろめ、伝書・点料によって富み、権貴の門人も多く、たちまち俳界を席捲した。宝暦十一年（1761）八八歳で没。とある。

深沢了子の「**近世中期の上方俳壇**」によると「**春秋関**」享保十一（1726）年に始まる淡々版の高点付句集は、現存のもので十三点あるが、やがて他門からも淡々のスタイルに倣った付句集が刊行されるようになった。それだけこの種の本の人気があったということである。

富田志津子（元阪大教授、近世・俳文学）は享保から天明まで、全四五種に上る付句集のリストを作成されている。息の長い流行がうかがわれるが、そのピークは宝延から宝暦期であると考えられる。

淡々によって工夫された点取俳壇は、雑俳と相呼応して上方俳壇を制し、付句の独立化を推進した。彼の一連の活動は「スピードと大量性」と言う言葉に象徴される。

極端に走り、連句の基本を壊した責は負わなければならないにしても、流行を先取っていった淡々は、時流を見定める力を持っていたのであり、まさにこの時代を代表する俳人だったのである。とある。

集英社の「**古典文学大系・享保俳諧集**」によると、淡々は「春秋関」をはじめとする上方高点付句集を刊行、初めての試みではあるが、それはまた俳壇全体の都市風共通の傾向であり、江戸の紀逸の「武玉川」宝延三（1750）年を初めとする小本型高点集から、川柳評万句合の高点付句「柳樽」明和二（1765）年に到るまで、周知したように、新様式発生へと流れて行く。付合疎化によって、連句様式が解体し俳句と川柳に分化する俳諧史の大きな転換期の意味も、享保期の特色の一つなのである。とある。

「**上方高点付句集**」から

行雲の後ろへ両手ついて月
肥えては無念なりし詩作り
一生に女をしらぬ丸木橋
道問へは先ッ手の土を打掃ひ
短命て名を揚るはつ雪
一句つらねて雪隠を出る
世界の穴を捜す騒人
一言残り弟子が弘める

—温故知新—

川柳は世界に類例のない詩型であって、しかも日本独自のものであると「**川柳とは何か**」で麻生路郎が述べています。

和歌から連歌と語り継がれて、淡々のような異端者が時代の扉をこじ開け、俳句川柳へと辿り着きました。「**縮み志向の日本人**」を著した李御寧のお説の通りです。

深沢了子の著書は、東京大学に提出した博士学位論文がもととなっております。

（敬称を省略）

愛染帖

新家 完司 選

戦争はわたしが逝ってからにして

（評）そう、私がいなくなってからなら何があっても構わない。しかし、私が息をしている間は、平穏無事な日々であってほしい。

西予市　黒田　茂代

チューナーで地デジを迎え撃つ覚悟

（評）地デジ化は世界的な流れで、遅れると輸出産業が衰退するらしい。が、故障していないテレビを買い換えるのは極めて不愉快。

河内長野市　村上　直樹

ピンヒール足の個性がノーと言う

（評）若い頃には颯爽と履きこなしていたのだが…。人生の山河を踏み越えてきた足は、個性的且つ我が儘になってしまった。

鳥取県　加賀田志延

賞味期限その日に切れる新聞紙

（評）昨日の新聞は冷えたタコヤキ。半日で古紙になる新聞紙の量は、日本全国で約一万トン。ネット新聞の時代が来るのは必定。

岸和田市　増田　隆昭

友達の不運で学ぶ事がある

（評）癌は検診によって早期発見。暴漢には防犯ブザーが有効。など、申し訳ないことだが、すべて、他者が遭った災難からの智恵。

寝屋川市　籠島　恵子

飲み足らぬ顔を無視して飯が出る

（評）「もうダメよ！」などと言われるとムカツクが、そっと飯を出されると抵抗できない。長年の経験から会得された奥さまの作戦。

枚方市　伊達　郁夫

関節の痛み茶碗がよく割れる

（評）歳を重ねるごとに不自由になってくる身体。割れても平気な安物の茶碗にするか、それとも、プラスチック製にするか。

京都府　松本としこ

メモをして話のネタを溜めておく

（評）話題が豊富な人は、やはりそれだけの努力をしておられるのだ。ただ、あまり蓄が過ぎると敬遠されるので要注意。

弘前市　高橋　岳水

空だけは変わらぬままの現在地

（評）ご近所の人も私自身も、そして、お店や住宅地の様子もすっかり変わってしまった。昔と同じなのは、あの青い空だけ。

西宮市　牧渕富喜子

八百長と人情相撲とは違う

（評）相談して転ぶのが八百長。相手を思い遣って力を抜くのが人情相撲。人情相撲は「心の中」のことなので誰にも分からない。

八尾市　村上ミツ子

目を閉じた君の思わぬアイシャドウ

堺　市　奥　時雄

飲み続けたいので酒量我慢する

藤井寺市　俣野登志子

料理より奈良漬誉めて客帰る

親不孝の覚えないのに逆剥ける

札幌市　三浦　強一

のど飴をなめていそいそカラオケ日

かたくなに昭和を歌うカラオケ日

河内長野市　針生　和代

猫の手も借りたいときに居ぬ夫

子に貰い孫に還元するおあし

寝屋川市　冨山ルイ子

還付金今年は貯金しておこう

節分も過ぎ冬服を買いに行く

西宮市　藤本　直

平成っ子名前にルビの要る子殖え

美しい日本語話すだけで美女

大阪府　米澤　俶子

一番に大根が減るおでん鍋

約款の文字は余りに小さ過ぎる

大阪市　小谷　集一

実権のないプライドは邪魔なだけ

煩悩が燻って出る加齢臭

東かがわ市　川崎ひかり

私の秘密見ている犬とネコ

和歌山市　木本　朱夏
歳月が移る女の二の腕に
大根もりんごもシンプル・イズ・ベスト
堺　市　加島　由一
寒いのもええやないかと飛び起きる
酒がある雪が降ろうと凍ろうと
橿原市　居谷真理子
言霊を信じて訥弁の祝辞
ドライアイ久しく行かぬ墓参り
弘前市　髙瀬　霜石
燃費バツグン少しの酒で酔っぱらう
お米に感謝お酒の生みの親じゃもの
大阪市　大川　桃花
満月もいいけど好きな十三夜
好物も足りぬぐらいが丁度いい
大阪市　岩崎　公誠
ノートよりちらしの裏が好きなボク
謹啓という書き出しで金のこと
鳥取県　細田　裕花
もう少し辛抱せよと雪が降る
和泉市　横山　捷也
スーパーマンになるはずだった子は無職
八尾市　髙杉　千歩
今年またひとり無言で恵方巻き
橋本市　石田　隆彦
非常口一度出てみる旅の宿
大阪市　谷口　義
腹立てていても昼ご飯は作る

鳥取市　武田　帆雀
バスが出てしまい酒屋へ逆戻り
吹田市　太田　昭
ぽっくりと逝ける話で酒を酌む
大阪市　井丸　昌紀
入院で時々禁酒しています
羽曳野市　吉川　寿美
人許す何と勇気の要ることよ
大阪市　小泉ひさ乃
もう許そだます人にも三分の理
大和郡山市　坊農　柳弘
素っぴんの恥じらい朝採りの苺
枚方市　小林　わこ
どうしよう食べたいものが減ってきた
海南市　三宅　保州
マイスリッパ欠かさず持って医者通い
三田市　石原　歳子
身長は縮むが爪はよく伸びる
米子市　成田　公一
親を見て親とは違う方に行く
尼崎市　長浜　美籠
千差万別みている水かけ不動尊
三田市　北野　哲男
笑わねばわたしの脳はすぐ錆びる
西宮市　緒方美津子
骨董屋へ売りに行くものありません
堺　市　村上　玄也
診察券ばかり詰まった名刺入れ

和歌山県　森下よりこ
白菜の芯がむずむずする陽気
堺　市　大隅　克博
タイミング外して言えぬすみません
出雲市　小白金房子
ささやかな本棚老いの宝もの
枚方市　寺川　弘一
習慣で毎日三度飯を食う
西宮市　泉水　冴子
手の込んだレシピは爺ちゃんの役目
鳥取市　高浜　勇
DNA換えるクスリを募集中
和歌山市　柏原　夕胡
お散歩に行くかのようにハワイまで
神戸市　山口　光久
失敗を重ね膨らむ知恵袋
大阪市　板東　倫子
お浄めの雪降る議事堂・国技館
鳥取市　有沢せつ子
二ヶ月ももたぬパーマをくり返す
東かがわ市　木村あきら
軽音楽流れて弾む自家菜園
藤井寺市　増井ヨシ枝
ネックウォーマー私も赤を買いました
堺　市　荻野　像山
たんという仲間大事なカウンセラー
枚方市　海老池　洋
よく伸びる病母の爪を切ってやる

姫路市　古川　奮水

書初めの筆の力を褒めてやる

柏原市　森吉留里恵

アングルを変えて苦手に立ち向かう

鳥取市　夏目　一粋

身にあった幸せだけど気に入らぬ

藤井寺市　太田扶美代

あの世から時々檄が落ちてくる

高槻市　初代　正彦

祝辞にもちょっぴり芥子混ぜておく

芦屋市　黒田　能子

憎しみ合ってはいない話が合わぬだけ

三田市　福田　好文

ジャンケンポン一寸遅出しして負ける

鳥取県　斉尾くにこ

豪雪の傷口へまた雪が乗る

豊中市　石橋　優明

冬の朝思わずドラえもんの手に

大阪市　榎本　舞夢

雪景色外出止めて絵筆取る

鳥取市　福西　茶子

雪景色最初はきれいだと思う

海南市　堂上　泰女

真っさらな雪へ絵を描く孫のくつ

米子市　後藤　宏之

雪！雪！と言ってるうちに春が来る

豊中市　水野　黒兎

ふりだしに何度も戻るもの忘れ

堺　市　宮本かりん

うろうろと生きて終点近くなり

藤井寺市　鈴木いさお

十戒のたった一つも守れない

鳥取市　永原　昌鼓

この歳で再会したい人がいる

枚方市　丹後屋　肇

ケンカした日を思い出す墓掃除

米子市　後藤美恵子

嫁の味夫が褒めてちょっと妬く

羽曳野市　徳山みつこ

食べ頃ですと全身を出す小蕪

唐津市　山口　高明

拳骨をもろた恩師と酌み交わす

シドニー　坂上のり子

物好きな私と添い寝したい猫

堺　市　遠山　唯教

賀状の差　年ごと妻が多くなり

京都市　高島　啓子

六割引それでも儲けあるらしい

河内長野市　坂上　淳司

病室でまだ迷ってるオペのこと

寝屋川市　平松かすみ

私の得にならないバイキング

宇部市　平田　実男

勝負服脱ぐと女史から母の顔

鳥取県　平木　公子

感動はしたが内容すぐ忘れ

高槻市　片山かずお

やさしいね言えばやさしくなるオトコ

豊中市　安藤寿美子

駅で見た夕陽次の駅で半分

寝屋川市　森　茜

ペンだこもいびつにかたくなわたし

羽曳野市　吉村久仁雄

一人居に慣れてテレビと会話する

大阪市　西川　冷子

いつからかハミングも出ず介護の日

浜松市　岡田　史郎

修行者のような顔して散歩道

鳥取県　大塚美代子

堪忍袋締めて家族の和に入る

河内長野市　松岡　篤

肩たたき赤ちょうちんで予告され

大和高田市　鍛原　千里

コンビニはコロッケ一つ買い易し

寝屋川市　小谷　滋彦

床のなか温もり抱いて後五分

岸和田市　雪本　珠子

いつからか心に魔女が棲んでいる

出雲市　黒目　英男

思い出は仕事一途の若い頃

神戸市　輿水　弘

しつこさが真面目にみえて惚れました

大洲市　花岡　順子

自動ドア深い考えなど持たず

鳥取市　田村　邦昭
自分史に走り続けた跡がない

篠山市　酒井　真由
古傷に重ねがさねのご挨拶

大阪市　津村志華子
炊飯器今日の命と仏飯と

明石市　糀谷　和郎
炬燵から3歩で届く必需品

吹田市　大谷　篤子
ボジョレヌーボーいよいよ開ける誕生日

岩出市　村中　悦男
やわらかいプラス思考をくれる妻

堺　市　西村りつえ
小半日メガネ探しでロスタイム

大阪府　小栢こずえ
作り笑いしてでも笑顔つないでる

羽曳野市　酒井　一壺
写経する筆がそわそわして困る

篠山市　沢山　啓子
風呂嫌いエコ一徹で逝った義父

鳥取市　中宇地秀四
妻の愚痴耳に栓して酒二合

豊中市　松尾美智代
体に良い言われご飯は五穀米

高槻市　左右田泰雄
よく見よといわんばかりの鍵カッコ

加東市　中上千代子
立春の陽ざしへじっとしておれぬ

川西市　岡嶋　洋子
一番に咲いた紅梅誇らしげ

高槻市　安田　忠子
水仙の一輪香る診療所

弘前市　今　愁女
北方領土しどろもどろの日本国

大阪市　太田としお
本当の勝負は六十路過ぎてから

鳥取市　吉田　弘子
財源の矛先老いがターゲット

四條畷市　吉岡　修
古くさい奴だと言われても演歌

京都市　桝本　宏子
越えられぬ亡母の手秤ちらし寿司

富田林市　山野　寿之
歯に優しい豆腐やお粥ばかり食べ

阿波市　三浦千津子
念入りな化粧見つめている少女

西宮市　片山　忠
催促をするのが下手な律義者

和歌山市　松尾　和香
好きなもの好きなかたちで手巻き鮨

八尾市　前田　紀雄
新燃岳　牛豚鶏の怨念か

京都市　三宅　満子
クスの木にいつも元気をもらってる

豊中市　藤井　則彦
どん底にいてもゆったりマイペース

富田林市　片岡智恵子
無為という充実もあり老いの日々

富山県　有澤　嘉晃
決断を待つ普天間の青い空

鳥取県　石谷美恵子
食べず嫌いで納豆に相すまぬ

和歌山市　喜田　准一
ケータイの絵文字解った振りで見る

大阪府　畑中　節子
長ばなしリズム良くても肩がこる

安来市　原　煩悩児
度忘れと顔で笑って眼はうつろ

奈良市　加門　萌子
ありがとう互いに言える老いました

唐津市　樋口　輝夫
いたわりで愛の歩幅がいま揃う

池田市　栗田　久子
二日目のカレーが自慢できる味

泉佐野市　稲葉　洋
八十路旅人恋い唄の艶も失せ

神戸市　山田婦美子
不器用な手が焦ってる能率給

弘前市　稲見　則彦
降る雪がアナタとの距離遠ざける

熊本県　岩切　康子
馬鹿にする夫に叛く策を練る

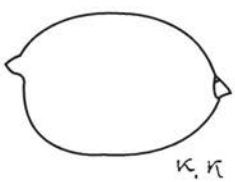
米子市　生田　寒之
電化してフライパンでは秋刀魚焼く

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　七七八句）



「くっきり」　三宅保州選

九条の会のくっきりした主張　大阪市　古今堂蕉子
被爆建物壁にくっきり人の影　竹原市　石原　淑子
ハヤブサよ君の軌跡は忘れない　泉佐野市　稲葉　洋
くっきりと先が見えてる辞令受け　堺　市　矢倉　五月
くっきりと生きた証を刻む句碑　弘前市　福士　慕情
束縛を解いてくっきり人間味　鳥取市　平尾　菜美
くっきりと稜線見えてサクラサク　八尾市　村上ミツ子
くっきりときみの歯型を見るりんご　和歌山市　喜田　准一
くっきりと歯形のついた毒りんご　大阪市　伏見　雅明
断捨離にくっきり出てる自分彩　和歌山市　土屋起世子
くっきりと断捨離をして春を待つ　豊中市　水野　黒兎
先達の歩みくっきりみえて晴　篠山市　酒井　真由
くっきりと晴れた夜空の子星追う　和歌山市　玉置　当代
くっきりと二つに見えたお月様　和歌山市　坂部かずみ
月光が消えてわたしが浮き上る　藤井寺市　太田扶美代

「くっきり」　山本希久子選

山脈が日本の冬を二分する　鳥取市　岸本　宏章
相撲界疲労の色がくっきりと　八尾市　前田　紀雄
目指すものひとつ輪郭ぼやけない　大阪市　栃尾　奏子
赤いルージュくっきりけじめつけに行く　奈良県　渡辺　富子
目鼻だちくっきり個性のないスター　八尾市　髙杉　千歩
故郷捨てた哀しみくっきりと残る　松江市　松本　文子
くっきりと格差社会の底にいる　橋本市　石田　隆彦
くっきりの眉が私の意思表示　大洲市　花岡　順子
まな裏にまだくっきりときのこ雲　札幌市　三浦　強一
くっきりと生きた証を刻む句碑　弘前市　福士　慕情
デジタルの世代小顔に長い脚　河内長野市　山岡富美子
くっきりと個性が目立つ赤と黒　吹田市　須磨　活恵
くっきりの言葉が霊峰富士にある　篠山市　遠山　可住
極彩色でカバーする加齢臭　八王子市　播本　充子
一番の土産くっきり見えた富士　豊中市　水野　黒兎

高感度カメラで顔は撮らないで　堺　市　奥　時雄
カメラにはくっきり残ってた笑顔　豊中市　江見　見清
くっきりとマグマを示すレントゲン　堺　市　澤井　敏治
輪切りした脳にくっきり隙間見え　藤井寺市　鈴木いさお
保健証くっきり歳で差別され　大阪市　笠嶋　恵美
くっきりと極楽行きの診断書　羽曳野市　酒井　一壺
献体を決めて仰いだ青い空　奈良県　渡辺　富子
羊水の胎児くっきり見えてくる　弘前市　今　愁女
まっ白なシーツに孫の置きみやげ　東かがわ市　川崎ひかり
仕付け糸くっきり母の形見分け　田辺市　岡本　昇
浮雲にくっきり母が現れる　高槻市　安田　忠子
最初で最後母の寝顔に紅をひく　枚方市　小林　わこ
くっきりと父の鋳型が残る門　鳥取市　倉益　一瑤
くっきりと親子で決める車間距離　美作市　福原　悦子
くっきりと結婚線はあるのだが　鳥取県　山下　節子
くっきりと団十郎は目の力　京都市　清水　英旺
イチローの目にはくっきり見える球　西予市　黒田　茂代
焦点の合うまで君に近付こう　橿原市　安土　理恵
かたつむり歩いた跡がしかとある　紀の川市　宇野　幹子
朝いちばん気合いを入れる髭を剃る　弘前市　髙瀬　霜石
くっきりと赤マルつけた誕生日　八尾市　髙杉　千歩
鮮やかに読みとるわたしへの思い　池田市　栗田　久子
くっきりと影がメタボになっている　米子市　政岡未延子

くっきりと涙のあとを見た訣れ　和歌山市　田中　みね
くっきりと一線を引く両隣　大阪市　神夏磯典子
息子に恥じぬ足跡くっきり残したい　篠山市　二階　幸子
携帯にくっきり残る悪の跡　池田市　上山　堅坊
復員船くっきりと見た桜島　美作市　小林　妻子
マフラーで引き立っている地味な服　東京都　岸野あやめ
くっきりと描いた夢がほやけだす　鳥取市　平尾　菜美
ハヤブサよ君の軌跡は忘れない　泉佐野市　稲葉　洋
世の中がくっきり見える無位無冠　大阪市　升成　好
くっきりと母の手形のつく姉妹　西宮市　山本　義子
くっきりの青空核は嫌いです　神戸市　伊勢田　毅
愛と憎くっきり出ます銭の音　鳥取市　倉益　一瑤
くっきりと胸に刻んでいる旅情　松江市　三島　淞丘
トンネルを抜けてくっきり海の碧　東大阪市　佐々木満作
くっきりとあったウエストいま不明　大阪市　原田すみ子
水茎の跡にくっきり見るこころ　東大阪市　北村　賢子
くっきりと格差が見える高級車　大阪市　太田としお
くっきりと私の色で染め上げる　岩出市　藤原ほのか
明暗をくっきり分けた予備知識　大阪市　大川　桃花
白黒にグレー・ゾーンはありません　寝屋川市　籠島　恵子
くっきりと影がメタボになっている　米子市　政岡未延子
まなうらにくっきり古里の山河　和歌山市　古久保和子
くっきりと虹が描いたテリトリー　富田林市　中井　アキ

柱の疵くっきり残し子ら巣立つ　京都市　桝本　宏子
平服の案内どおり来て目立ち　犬山市　金子美千代
転た寝の頬にくっきり畳の目　米子市　竹村紀の治
駄作にも花押くっきり押しておく　羽曳野市　吉村久仁雄
くっきりと思いがけない絵が描ける　紀の川市　北山　絹子
くっきりの線で省略したピカソ　香芝市　大内　朝子
水茎の跡にくっきり見るこころ　東大阪市　北村　賢子
目立ちたがりついにピエロになってゆく　米子市　白根　ふみ
くっきりと町をきり絵に夕焼ける　羽曳野市　徳山みつこ
川底がくっきり見えていた誤算　高知市　小川てるみ
白黒をくっきりさせて生きづらい　鳥取県　細田　裕花
友禅の色くっきりと川を染め　大阪府　米澤　俶子
くっきりと私の色で染め上げる　岩出市　藤原ほのか
結び目に技がくっきり絞り染め　河内長野市　木見谷孝代
ビビットな赤が女神をひき寄せる　八王子市　播本　充子
染めむらもくっきり藍の深情け　八尾市　宮西　弥生
夕焼けこやけ嘘がくっきりみえてきた　鳥取県　下田茂登子
透明人間がマスクして通る　堺　市　内藤　憲彦
底冷えにくっきり浮ぶさくら闇　青森県　松山　芳生

秀　句

座り跡くっきり残し家を出る　富田林市　関　よしみ
ひとの形にくっきりと認知症　鳥取市　土橋　螢
背伸びした日々が外反母趾にある　河内長野市　山岡冨美子

足跡をくっきり残す現在地　犬山市　吉田　幸子
寒の月くっきり冴えて生きるとは　西宮市　亀岡　哲子
鮮やかに愛は本物になった　和歌山市　柏原　夕胡
一瞬に未来くっきり稲光り　大阪市　柴本ばっは
稜線がくっきりしなくなって春　松江市　川本　畔
恋の闇路くっきり照らしてはならぬ　香南市　桑名　孝雄
胃カメラにくっきり企業戦士痕　茨木市　島田　誠一
一条の光に浮かぶ阿弥陀さま　東かがわ市　川崎ひかり
境界は髪ではっきりしてたのに　堺　市　奥　時雄
指輪あとくっきり残し愛終る　大和高田市　鍛原　千里
くっきりと余生の地図が見えてきた　藤井寺市　鈴木いさお
二世帯の線くっきりと白い壁　大阪市　津村志華子
死と対峙してくっきりとわかる生　紀の川市　辻内　次根
鮮やかに防犯カメラ捕まえる　枚方市　丹後屋　肇
くっきりと世代のギャップ知らされる、　和歌山市　堀　冨美子
白黒をくっきりさせて生きづらい　鳥取県　細田　裕花
くっきりと稜線飛んでみたくなる　出雲市　伊藤　玲子
くっきりと見えてないから頑張れる　大阪市　田浦　實
静止画像にくっきり残された証拠　藤井寺市　太田扶美代

秀　句

かたつむり歩いた跡がしかとある　紀の川市　宇野　幹子
焦点の合うまで君に近付こう　橿原市　安土　理恵
未練だろうか一直線の飛行雲　四条畷市　吉岡　修

『麻生路郎読本』余滴

(2) 明和病院青蛙会支部結成記念川柳大會
―薫風初心のころ―

桒原道夫

明和病院（西宮市上鳴尾町。現・西宮市上鳴尾町4―31）に川柳会「しろい山茶花」が発足したのは昭和24年2月のことで、小浜牧人の肝煎りで水谷鮎美が選者となった。同28年7月に青蛙川柳会と名を改めたが、その頃、満秋、善坊、鬼美、弦月等がいた。同年12月、阪大川柳会出身の西尾青一路が、病院事務長として赴任して選をすることになった。その後、青一路が西尾栞に指導を依頼し、薫風子、すゝむ、鵜汀、舟遊、菁風等が頭角を現し、川雑支部結成にまで進展した。（『句集　明和』昭33・9発行、青一路の「あとがき」要約）

橘高薫（昭和30年12月17日、初めて川柳雑誌社本社句会に出席したが、薫風子の号で出席している。「川柳雑誌」同40年1月号から薫風に改号。以下、薫風と記す）が明和病院に肺結核療養のために入院したのは、昭和29年の12月であった。川柳を初めて作ったときのことを、「川柳雑誌」（昭38・6）に、「雨の思出」と題して、次のように書いている。（以下の引用文も、「雨の思出」から）

「乱れ髪式部の世より恋は憂き　薫／私が初めて川柳を創ったのは、『乱れ髪』という題で、昭和三十年の一月か二月か、冷たい雨の降る日であったと記憶する」

同室にいた俳句も川柳も手がける片山鏡水という人が青蛙川柳会の新春句会で天位を獲得し、賞として菓子器を貰ってきた。

「私は、その日、その安物くさい菓子器がとても豪華に見えて仕様がなかった。鏡水さんが練りに練って創られた句が選者に認められ、最高位になったそのことは作家としてのよろこびや満足が大仰に私にまで伝わって来て羨ましく感じただけでなく、療養生活をひっくるめた人生の中ででも、何か高い価値を持つ誇りあるもののように思えた。それで翌二月句会の題から作句し出したのだったが句会には顔を出さず投句だけを続けていた」

川柳を始めた月を2月としているのは、「川柳雑誌」（昭36・7）の「現代柳人録」、「川柳展望」8号（昭和52年2月発行）の《人間を求めて》、「川柳塔」（平11・2）の「五十嵐播水先生」の三資料であり、『檸檬』『古稀薫風』『橘高薫風川柳文集』『喜寿薫風』では1月としている。1月の雨の降る日に「乱れ髪」の句を作って、2月句会から投句を始めたと考えたいが、はたしてどうか。句会開催日の記録が残っていないので、気象庁のホームページで当時の天候を調べてみると、西宮市の記録はないが、西宮市を挟む神戸市と大阪市の記録はあった。それによると、1月は、9日と25日に、神戸市・大阪市ともに、まとまった雨の降ったことが分かった。ただし、9日は夕刻から夜半にかけて降った雨である。2月は、19日に雨が降った。昭和29年の「川柳雑誌」の各地柳壇には、句会開催日を記したものがあり、青蛙川柳会は、1月～6月は、11日から15日の間に開催、7月～10月は、3日から6日の間に開催されている。句会が20日以降に開催された可能性は低いので、1月25日（火）に「乱れ髪」の句を作ったのではないかと思う。

「川柳雑誌」（昭29・12）の各地柳壇「川柳青蛙会」には「十月三日」の日付があり、それ以後も毎月、青蛙川柳会の句が掲載されている。「川柳雑誌」（昭30・4）に薫風の句は載っていないが、牧人の〈水垢離へいのちを懸けた乱れ髪〉があるので、「乱れ髪」が2月句会の題であったことは間違いない。

『橘高薫風川柳句集』（平13・9）の「乱れ髪」の章の冒頭九句は、薫風が療養していた頃の、真の初心時代の句。

乱れ髪式部の世より恋は憂き
乱れ髪恋の甘さは遠い過去
カナリヤもいてアパートの新世帯
病める子に母は茶断ちの思いやり
苦労人孫には甘い爺であり
肋骨のふくらむ程の若い夢
菜っ葉服着て春泥をためらわず
地震にも煙草を吸うて居った父
悲しさに酔う幕切れの紙の雪

昭和30年の「川柳雑誌」各地柳壇に掲載された薫風の句は次の二句のみ。

アベックの車がかけた春の泥（6月号）
午下り団扇一つの部屋静か（10月号）

片山鏡水の句も挙げておく。

割勘と決めて仲よし五人組（8月号）
麦茶冷たしはっと気づいた忘れ物（10月号）

「私が初めて句会に出席したのは、青蛙川柳会、阪神電鉄の川柳教室、角一ゴムの白鷺川柳会の合同句会が病院の講堂で開催され、水谷鮎美、須崎豆秋、長谷川三司、榎南夏六の諸氏が見え、選者として選をされた時で、今にして思えば、錚々たる大先輩が揃われた句会だった訳だが、当時の私は、豆秋さんがすばらしい作家の一人であることさえ知らぬ無関心ぶりであった。その句会の鮎美先生選で、／祇園まだ寝ている京の雨の朝／という句が天位に入賞した。題が『京の雨』というのだったので、これも雨に因縁があるわけだ。三〇年の十月か十一月かであった」

ところが、「京の雨」の句は、「川柳雑誌」（昭31・1）の、「明和病院青蛙川柳会」の欄に掲載されていて、合同句会とは記されていないのである。これは、薫風の記憶違いではないかと思う。その理由は、第一に、合同句会ならばそのように記して当然だということ。第二に、一七人の句が掲載されているが、一五人は青蛙川柳会の会員であること。後の二人は、太郎坊と柳太。太郎坊は、「川柳雑誌」（昭30・3）の各地柳壇「梅田支部」（鮎美支部長）に名がある。もう一人の柳太は所属未詳。合同句会ならば、青蛙川柳会以外の人の句ももっと多く掲載されるはずである。

それでは、なぜ、薫風はこのように書いたのか。「川柳雑誌」（昭30・12）の「柳界展望」に、「阪神電鉄川柳会、角一ゴム白鷺会主催の水谷鮎美句集出版記念川柳会は十一月二十日正午から大阪中央公会堂第一会議室で開催」とある。薫風は、この会と混同したのではないかと思うのである。薫風が鮎美句集出版記念川柳会に出席していたのは、「川柳展望」8号（昭52・2）の《人間を求めて》での、「美をぷらす（鮎美句集）発刊句会では、呼名される永田六龍子さんの大きな声に、川柳家って威勢がええなあと思ったりね」という薫風の発言からも分かる。

「京の雨」の句は、1月号に掲載されているので、普通に考えればその前年の青蛙川柳会11月句会の句なのだが、断定できない。というのは、この年の各地柳壇の7月号と9月号には、青蛙川柳会の報告がなく、もしかすると二ヶ月遅れで掲載されたかもしれないからである。しかし、青蛙川柳会で天を取ったのは11月句会で、鮎美句集出版記念川柳会と同じ月だったからこそ、薫風も混同したのではないかと推測するのである。

水谷鮎美は、30年の9月限りで不朽洞会を退会したが、川柳雑誌の支部ではない、川柳雑誌傘下の青蛙川柳会では、この時期にはまだ選をしていたことが分かる。

その後、西尾栞が指導者となり、昭和32年3月24日（日）午後三時から明和病院二階講堂で、「川柳雑誌社明和病院青蛙會支部結成

記念川柳大會」が開催されるに至った。

「川柳雑誌」昭和32年5月号に、德永鬼美が報告記事を書いている。

「(前略)路郎氏が満場の拍手に迎えられて登壇。『こうして皆さんを見ているとチットも病人らしくない、むしろこっちの方があやしい』など、お笑わしになったがなか〳〵古稀をお迎えになるとは思えぬ若さで滔々四十分間にわたって『川柳と倫理』について競馬の馬にビールを飲ます話やユーモラスな話題をとり入れて満場を魅了された。(以下略)」

当日の式次第を下の写真とは別の写真から記録しておく。司會者・酒井丹誦、支部長挨拶・西尾青一路、講師挨拶・西尾栞、講演・麻生路郎、祝辞・王子喜一(医博)・友國説郎(病院長)、答辞・橘高薫風子。兼題は、「力」(古方選)「皿」(白柳子選)「春着」(多久志選)「希望」(春巣選)「足音」(路郎選)の五題。披講のあと、閉會の辞・瀬崎紫路、賞品授与、記念撮影。「川柳雑誌」同号から当日の入選句を抄出しておく。

大自然の力に岩も位置を変え　道草
ひときれを皿に残してまだ飲む気　東雲
のど自慢春着にすまぬ鐘一つ　川太郎
希望まだ達せぬうちに子が五人　すゝむ
コツン〳〵とは淋しいぞ松葉杖　九里三

川柳雑誌社明和病院青蛙会支部結成記念川柳大會。「川柳雑誌」(昭32・5)によると、会員出席者は45名で、河相すゝむ・本城弦月・樋口舟遊等の名が見える。前列左から、西尾青一路・西尾栞・清水白柳子・中島生々庵・路郎・北川春巣・若本多久志・戸田古方・友國説郎病院長?。4列目左端が橘高薫風子。3列目左から5人目が樋口舟遊(小西雄々氏の御教示による)。写真提供は北川睦彦氏(春巣御子息)。

前向き

山口　光久選

前向きに幸福追って生きるだけ　(鈴)蛍いさお
前向きの姿勢崩さぬ古希の杖　獏沓
向い風強くなるほど湧く闘志　一風
前向きの子に育ってと鯉のぼり　注湖
前へ前へそんな気持が過去を捨て　キヨミ
前向きに生きる踵に助けられ　東吉
しがらみを捨てれば前に動き出す　(稲)洋
前向きより振り向く数が増えて老い　賢子
障害を乗り越え挑む車椅子　茂代
前向きに生きる力は好奇心　のり子
八十で習い始めたイタリア語　ふみ
前向きでなくてはこころはずまない　(宮)弥生
前向きの一歩が光るまで磨く　(吉)幸子
次ページへ望む新たな緊張度　久仁雄
前向きに生きて転んでばかりいる　婦美子
失敗が何だ勇気が背中を押す　菜摘
前向きに脳のスイッチ切り換える　(西)悦子
有言実行前向きのみである　淞丘
前向きな僕に逃げ道など要らぬ　正和
晴天の朝へ気合の深呼吸　典子
前向きになろうなろうと新刊書　(渓)千恵子
前向きでしっかり受ける向い風　勇
疲れますいつも前向きばかりでは　高明
口惜しさの涙を発条に精進す　振作
前向きに歩けとせかす万歩計　美籠
明日の夢見ているらしい子の寝顔　武彦
前向きになれと背を押す影法師　岳水
バックギア持たぬ働き蜂である　洋一
前向きがやっとあの娘に通じたよ　充子
ユートピア視野に泥舟漕いでいる　美智代
前向きに生きれば運も味方する　哲男
チャレンジを座右の銘に置く叢寿　昌鼓
前向きの暮らし笑顔が満ちている　遡行
この道と決めて後ろは振り向かず　碧
前向きの花にやさしく陽はそそぐ　(志)千代
小さくともひと花を咲かせたい　朝子
八起き目の男前向く正念場　佳
前向きに生きる人には愚痴がない　(岸)孝子
好奇心次から次と急き立てる　(岩)玲子
前向きな人です早い立ち直り　千鶴子
リハビリの汗は明日のために掻く　慕情
前向きに生きるしかない母子家庭　(佐)登美子
人
見習おう学ぼういつもそう思う　霜石
地
前向きな神で失敗叱らない　扶美代
天
前向きな花は大きい実を結ぶ　宇野幹子
軸
心機一転明日へ靴を履き替える

つかむ

春木圭一郎選

何時の間につかめるほどの腹の肉　(金)宣子
故郷に魚つかんだ川がある　好文
大金をつかみ周囲が怖くなり　花匠
夢つかむたびに少年ジャンプする　菜摘
手をぐっとつかんでくれた交差点　のり子
つかんだが逃げよ逃げよとする諭吉　篤
干支の運つかむ白兎という神社　照彦
うなぎ一匹つかむ達人わざがある　不二
捕まえたどじょうスルリと安来節　(吉)幸子
ドジョウすくいつかむ仕草が面白い　いくひろ
夫と会いつかんだ幸は世界一　一子
どうしても好物だけをつかむ箸　(岸)孝子
もみじの手夢をつかんで昼寝中　正雄
こつこつの汗でつかんだほんまもん　朝子
捕球する基本は素手と心得る　次根
身の丈に合った幸せつかんでる　(山)節子
あるんだな運をつかんだ玉の輿　百合江
端ばしに本音をつかむトーク中　(西)悦子
夢つかむ筈の投資に泣かされる　(西)和子
どんな運つかむのだろうモミジの手　美籠
欠点をつかんでシンプルに叱る　(福)英子
つかみ過ぎ欲の壷から手が抜けぬ　(俊)美恵子

そのむかしハート掴んだのが不覚　茶子
最後までつかんでいますコップ酒　振作
深呼吸両手で春をつかみとる　キヨミ
我慢することを覚えて運つかむ　公誠
虹の橋渡って夢をつかみたい　忠子
赤ちゃんのこぶしがつかむ未来地図　唯教
良縁をつかむ苦労はしたくない　小雪
つかんだら放しまへんでいい女　勇螢
そっと手をつかんで温み確かめる　セツ子
本物を掴んだこの手洗えない　ふみ
常識の中でつかんだ右ひだり　せつ子
情報をつかむと早く喋りたい　大鯰
掴んでも空っぽの手だ啄木よ　淞丘
脱皮した私をつかむまで学ぶ　シマ子
子離れはしたが心はつかんでる　佳
蛇つかみガキ大将の地位守る　時雄
夢つかむならばシッカリ汗を掻け　一粋
エルニーニョつかんだ者が勝ち抜ける　くにこ
力んでもつかんだものはこれっぽち　光久
幸運をつかんで欲しい子の字画　慕情
燃えつきる日まで離さぬコンパクト　人
突きはなす言葉をつかみ奥を知る　岳水
天　(宮)弥生
無駄飯を食って掴んだ虹の端　地
軸　高瀬霜石
あいさつが心をつかむもとになる　軸

いよいよ

石原　淑子選

本番が近づき人の字飲み込んだ　裕之
いよいよの出番を前にドレミファソ　修
八百長で存亡危機の大相撲　半徳
いよいよの世界制覇のサッカー戦　ゆきの
開幕がいよいよ迫るプロ野球　靖博
ボクシング最終回のゴング鳴る　一花
良妻賢母いよいよ死語になる兆し　シマ子
新燃岳ついに真っ赤な火の粉吐き　のり子
止まらないうねり民主化へと向かう　奏子
軽く見たアニメいよいよグランプリ　獏沓
いよいよかアナログテレビの独り言　道子
検診値酒も止めんないかんのか　像山
手術台麻酔が効いて眠くなる　慕情
延命の処置は無用と子に記す　小雪
口下手も待ったなしですプロポーズ　碧
いよいよの時は戻れと嫁に出す　倫子
孫十二赤飯炊くと娘のメール　好文
いよいよ後期他人の手借りぬ策を練る　康子
夫婦道いよいよこえる七十年　百合江
いよいよの時には妻がいる安堵　久仁雄
コツコツが実りいよいよサクラサク　賢子
入社式いよいよ巣立つ子にエール　巴子
春一番いよいよつらい花粉症　陽子
いよいよと言う時咳が止まらない　満子
値上げ機にいよいよタバコ止めさせる　強一
いよいよになると泣きつくとこがある　(花)順子
マニフェストいよいよ底が割れはじめ　章司
虎の尾を踏むことになる消費税　霜石
いよいよとなってあっさり逃げられる　一壺
いよいよの時は借金するお国　篤
解散もいよいよかしらきな臭い　惠美
多数決いよいよ椅子が奪われる　公誠
厳冬で野菜いよいよ増す甘さ　(深)千恵子
芽吹く音いよいよ野良へ靴をはく　律子
いよいよを何度も越えた肝っ玉　朝子
いよいよに示す日本の底力　東吉
あの日からいよいよ好きになりました　佳
胎動へいよいよ母の顔になる　ミツ子
分娩室新米パパが手を合わせ　昌鼓
呱呱の声いよいよ母となるいのち　一呑
巣立つ子の羽音だんだん高くなる　輝夫
いよいよの時は一言ありがとう　人
地　(奥)五月
いよいよを忘れた様に長らえる　志華子
天　富子
来る来ないいよいよ火の恋火のおもい　宮西弥生
さくらさくらいよいよの日へ背伸びする　軸

初歩教室

題 ― チーム

鈴木公弘

皆さんの句を一読して直感したことから申します。それは「この題、難しかったのかなあ」ということでした。決して奇抜な着想を望んでいた訳ではありませんが、句材を漠然と見ている句が少なくありませんでした。そして用箋に書く時は必ず見直してください。①たくさんの具を詰め込んでいないか②リズムはよいか③独りよがりな発想になっていないか④読んでくれる人の七割程度が理解してくれるか…など。以上を宿題としておきます。

【もう少し推こうしてほしかった句】

原 チームには必ず一人道化役　弘光
添 道化役一人はほしいチームの和
原 新しい風を取り入れ良いチーム　(中)章子
添 新風をあおってチーム上向かせ
原 男女とわずチームになったの頑張ろう　綾乃
添 混成のチーム仲良く頑張ろう
原 霜土を掘れば蕗のと春チーム　(宮)俊子
添 霜踏めば春のチームの蕗のとう
原 チームから外れたとこに明日の芽　(白)淑子
添 チームから少し外れて明日の芽
原 個人技を裏方チーム支えてる　(後)美恵子
添 個人技をチームの裏にいて支え

【やや描写になっている句】

原 五つ子がチーム医療で無事生れ　武臣
「生まれ」が正解です。
原 軒下に鳩のチームがフン溜める　ミヨノ
そうです。汚いですね。
原 チームワーク一糸乱れぬ渡り鳥　(高)道子
インフルに罹ったのもいて気の毒でした。
原 一人っ子チームに入りだだをこね　百合江
普段、独り遊びが多いのでしょうから。
原 ボランティア何処のチームも温かい　久美子
使命感をもった動きには温みを感じます。
原 女子四人遊ぶ計画すぐ決まり　(岡)洋子
温泉行きですか。
原 それぞれのチームになって三次会　振作
たぶん二人、三人でしょうね。
原 入場式国旗プレザー光ります　エミ
国の代表ですから輝かなくては…。
原 コンサドーレチームカラーの赤と黒　登美子
ガイナーレ鳥取というチームが J2 入りしました。
原 我が家ではチーム分けして大掃除　(山)久子
大家族ですか。うらやましいですね。
原 五十年チーム続いためおとです　清
よかった、よかった。秘訣を教えて下さい。
原 箱根路をチーム一丸駆けぬける　(稲)則彦
五区と六区の脚は見応えがあります。
原 新境地チームを組んで挑みたい　英男
転勤先かな？家族の輪かな？
原 共感する同志チームを組んでいる　温子
チームとしては一番安定しますからね。
原 増税は与野党チーム翼賛会　和幸
添 与野党が翼賛化して税を上げ
翼賛会と言えば結託、結託と言えばチームという連鎖を考えてもよいでしょう。
原 家族でもチーム力が問われます　(高)弥生
添 家族とてチーム力が問われます
原 人気者チームリーダー国訛り　智加恵
どこのご出身でしょうかねぇ。
原 みな同じ夢見てるから頑張れる　憲彦
添 みな同じ夢を見るから頑張れる
これぞチームですね。
原 支えあうチームの力煮えたぎる　一子
添 支えあうチームに燃えるものがある

【入選に準じる句】

どのチームまようもたのし春だから　美紗子
「どのチーム迷うも楽し春だから」
おしゃべりが好きでチームを抜けられぬ　律子
自主トレが終わりチームになってくる　寒之
自己弁解しないリーダー支える掌　よしみ
チーム分けでいつも地球が揉めている　留里恵
わがままもチームの中で蓋が出来　安子

鍛えられてチーム第一の行動がとれ出したのですね。

チームです笑顔で送るボランティア　㈲久　子
無事のご帰宅を祈りましょう。

駅伝の白のたすきに涙あり　眞砂子
チームとも呼べぬ常連縄暖簾　孔　一

「縄のれん」のほうがいいと思います。

連敗のチーム支える栄養士　敏　治

敏治さんが栄養士でなかった場合、他人事になりますが、栄養士さんですか。

ザックジャパンあの感動を有難う　正　彦

アジア杯でも活躍は凄かったですね。「有難う」と書いてください。

ユニフォーム揃えただけで士気あがる　志　延

仲間意識が強くなるのでしょうか。

チーム分けしてから煮ますおでん種　こずえ

よくある句材ですが着想が新鮮でした。

イレブンへ世界のベスト4を待つ　堅　坊

若手がどれだけ成長するかでしょうね。

チームワークまるくゆるくで夢育ち　㈱玲　子

鉄壁のチームワークには無理が潜んでいる気がします。多少の「遊び」があるほうがいいでしょうね。

【入選句】

信頼のチームプレーがなす手術　のり子

チームには良くも悪くも魔もの住む　一　兆

スローガン掲げチームに入れる喝　義　雄

「スローガン掲げチームに喝入れる」としたほうが、動きが見えてよいと思います。

無口でも愛が通じるチーム組み　開　子

公園の鳩にもチームあるのかな　妙　子

聞く耳を持ってチームの和を保つ　宏　造

走り込みまだ足りなくて予備チーム　冷　子

病魔へは家族が束で立ち向かう　孝　代

束という表現がいいです。

定年後燃え尽き組とヤンチャ組　篤

ユニークな仕分けが魅力的です。

子等の目がきらきらしてるいいチーム　菜　摘

結社から転がり落ちてきた秘密　幹　子

句材をやや白けてみているところに惹きつけられます。

はやぶさとチームの絆強かった　憲　司

不況でも成績上げるチーム組み　弘　泰

好い友が出来た日からの万歩計　㈱節　子

【佳句】

こだわりが無いとチームが動かない　恵　美

「こだわりが無いとチームは動かない」とするべきでしょう。

長短があって旨味を出すチーム　起世子

あなどるな山をも崩す蟻チーム　滋　彦

救命の医療チームに神の技　治　子

救命と医療はこの場合、同義に考えてよさそうですので、ご一考ください。

出番ない選手もチーム支えてる　ちづる

監督の更迭チーム立ち直り　宏　之

チーム組み大魚に見せる雑魚の知恵　隆　彦

笛太鼓チームを燃やす起爆剤　志　郎

なあなあのチームに未来託せない　㈱宣　子

チームワークおれがおれがで崩れ出す　真　澄

【今月の推薦句】

個性対チームワークがせめぎ合う　松原ひとみ

A対Bという比較はやや説明調ですが、着想を評価しました。現代社会の混乱は個性重視にあるのではないかという説もありますが、感性を重んじる世界では個性こそすべてです。

チーム敗退どうってことはありません　酒井　真由

こうもあっさり言われてしまえば、勝ち組も拍子抜けするでしょう。ケセラセラ感覚に乾杯を。

粒揃い集めたチームまとまらぬ　山本ふみ子

誤算の始まりを説いた句として評価しました。ただ、NASAなど緻密、正確な頭脳を必要とする職場では、強烈な個性の持ち主を把握（はあく）するノウハウを持っているようです。リーダーの腕が問われますね。

【私の句】

似たようなチームが打った千日手

独裁のチームに頭など要らぬ

（搭載漏れの方は役員が添削して返却します）

秀句鑑賞

同人吟　伊達郁夫
―3月号から

秀句鑑賞依頼状を頂き、自分でも想像以上に緊張しました。正直、『川柳塔』の句すべてを今までに読んだ事がありませんでした。お名前とお顔を知っている方の句を斜め読みする程度でした。みなさまの句をじっくり読ませて頂く機会を得たことに先ずお礼を申しあげます。何と素晴らしい句ばかりでしょう。丸一・五日かけて鑑賞しました。私が日頃心掛けている堤丁玄坊氏の川柳の味は〝ずばり斬る〟〝ぼろり泣かせる〟〝にんまり笑う〟〝ぼんと膝打つ〟句。即ち人を詠むこと。仏教の七情・喜、怒、哀、楽、愛、悪、欲を詠むこと。そんなことを心に留めて秀句を選ばせていただきました。

プランターの土をもたげる春の息

木本朱夏

この原稿を書いている日から、気温が十度以上になりました。日本中が雪に埋もれた今年の冬でした。我が家のプランターの土からうっすらと青い芽が覗きはじめました。やっと春の息吹が聞こえます。そんな息吹を肌で感じる素晴らしい句です。

病人を笑わせながらりんご剥く

石谷美恵子

お見舞いの場の雰囲気を作る気配りのむつかしさ。先日先輩のお見舞いに行ってきました。難病とのこと。慰める言葉に苦慮しました。作者の優しい言葉と仕草が目に浮かんできます。

つらいことあるといっぽん歯が欠ける

高瀬霜石

そうなんです。身を刻む試練に会うと揃ったものが欠けていく思いです。事実食い縛る我慢が歯を欠けさせていくものです。歯が欠けるくらいの辛さがこの句に滲み出ています。

必死で聴いている上司のからオケ

柿花和夫

聞きたくもない他人のカラオケ。でも上司の音痴のカラオケを身を乗り出して聴いている素振り。ブラックユーモアの楽しさが溢れています。

夕焼けが明日の卵を抱いている

大内朝子

今日の終わりの真っ赤な夕焼け。その夕焼けのエネルギーがあすの命を抱いて明日の孵化を助けてくれる。自然界の大きさと命へのはぐくみがじーんと伝わってきます。

冬らしい寒さに何故かほっとする

小川てるみ

今年の激寒には、日本中が難渋しました。でも、この寒さゆえに春に一段と早く来いと切望されます。温暖化で季節が歪んでくる昨今、冬が冬らしく寒さを連れてくることへの拍手を惜しみません。

宝くじ当たった顔をどうしよう

坂本蜂朗

諦めを今日も買ってるジャンボくじ（郁夫）でも、まぐれに三億円が当たったらどんな顔をしようかと思いますね。妻や子にも内緒かも。そんなことを真剣に想像する人間の本性・エゴが浮き彫りにされています。

うば捨てのように個室に引きこもる

菊地政勝

高齢化社会。家庭内でも爺・婆は除け者。子供夫婦、孫たちの会話についていけない。入れてもらえない現実。用事があるように振舞って家族の輪からじぶんで抜けていく哀

愁。よく分かるほど辛いです。

生命線とっくに消えている不思議

島　ひかる

掌の皺が、顔と同じくらいいっぱい。どれが生命線か判別できない。でも、生命線がなにさ。しっかり元気にいきています。生命線を当てにしない老骨の自己主張に万歳。

誰が飲むのか神社の樽が気にかかる

奥村五月

神様も使っているかお賽銭―こんな句をみたことがあります。初詣には大きな樽が並んでいます。いったい誰が平らげるのかしら。五月さん同様気になりますね。神の名を借りた曲者は―。

子羊のように待ってる手術の日

坂上淳司

この歳で、初めて手術を受けました。白内障です。妻が付き添いに来てくれましたが、もう口も利かずおどおどしたのを思い出します。偉そうに言っても弱い人の性を自覚しました。淳司さんも同様のご経験ですか。

補聴器に向かって話しています

志田千代

補聴器の人との会話。顔を正面に見ずに、補聴器の耳に向かって話をしている光景が目に浮かびます。不自然さのおもしろさと優しさが滲んでいます。

一枚の写真が時を止めている

宮本かりん

アルバムの本に挟んだ写真か。その一枚の写真に走馬灯と感動が音を立てて響きます。地球の自転が止まったかのように。時を止めている〃の表現がすべてを言い表しています。

詫びに行く長い廊下を歩いてる

山本希久子

お詫びに行く道のりは遠くて辛いものです。先生か上司の部屋は廊下のむこうにあります。しかし詫びに行く時の廊下はなんと長い道のりか。この重い気持ちを〃長い廊下〃という表現で見事に表しています。

落葉の終りを見届けて掃除

江見見清

何とも心優しい句ですね。すべての落ち葉が土に帰るのを待ってやる情け。庭の落ち葉の散乱は見苦しいものです。でも落ち葉の終わりを待ってやるのですね。

「てっぱん」が私の朝をあたためる

徳山みつこ

NHKの朝ドラ「てっぱん」を毎朝楽しみに見ておられるのですね。そして今日の元気を貰うのですね。寒い朝もこの元気印のドラマに背を押され朝の始動ですか。作者の毎朝のほほえましい様子が伺えます。

幸せを少しうすめて使ってる

太田扶美代

やっと手に入れた幸せを大事に一日でも長く持続させるのに少しずつうすめて使っている心情に賛同します。〃幸せをうすめて使う〃この表現に脱帽。

本気だな大阪弁になってきた

堀正和

本心が出てくると、もう敬語も余所行き語も忘れて〃そうでんねん〃と大阪弁になる大阪人の会話。本音の機敏をよく掴んだ表現ですね。同郷が故郷の言葉で話していますね。

悲しみを閉じ込めたのかうさぎの目

岸本孝子

うさぎの真っ赤な目。悲しみを閉じ込めているのですか。今年はあなたの年です。元気を出して跳んでください。と作者のエールが聞こえます。

暗がりに一灯くれた伊達直人

野口節子

伊達直人ブームです。善意の輪がもっともっと広がって欲しいものです。不肖私は伊達郁夫です。残念なことに善意はあっても金がありません。最後に私の名を句にしていただいた作者にお礼を―。

秀句鑑賞

―水煙抄

―3月号から

森村美花

早春譜樹々はおしゃれのスタンバイ

藤田千休

春霞の中から季節を敏感に知らしてくれる白い蕾。〝春ですよ〟と喜びと希望と元気を与えてくれます。まさにスタンバイ。

まな板の音弾んでる孫来る日

松岡篤

爺ちゃん婆ちゃん大好きという孫の言葉が嬉しくてまな板が弾む。喜ぶ顔を浮かべて。

極楽はこんなものかと冬至の湯

針生和代

冬の温泉は至福のひととき。これ以上の極楽はないかもしれません。

男でも女でもない人がもて

山根妙子

わかります。きっと安心して何んでも言える爽やかでさっぱりした楽しいお方なのでしょう。もう男も女もない大切な人間です。

二次会を抜けた二人は今夫婦

尾崎一子

川柳って楽しいなあ、と思います。そのお宅で思い出話に花が咲いているのでしょう。

忙しい友の元気を追い掛ける

坂部かずみ

生き生きと輝いて見える友。前向きに明るく生きている人なのでしょう。きっと貴女も

残高を見つめ眉間がしわ寄せる

松原ひとみ

ホント、ホント厳しい暮らしです。この上保険料、消費税が値上げされたら大変です。

めでたいが好きになれない亀の顔

後藤美恵子

そういえば亀の顔をじっくり見たことがないような気がしますが、グロテスクな感じでしょうか。ゆっくり酒を飲み長生きする生きもののようです。

黒枠の戦友お前も米寿だよ

小林妻子

凛凛しい青年だった友の写真に語りかける作者の複雑でやさしい気持。二度と戦争をしてはならない。痛恨の極み。

もう無理が利かないのよと逃げ上手

泉水冴子

そう言って逃げる事もあります。実は私もウーンうまい思わず唸る旬野菜

小松紀子

ありますね。甘味があって思わず声が出る野菜。農薬ゼロ、太陽いっぱいの愛情野菜。

背負うものちょっと減らせばまだ跳べる

初代正彦

同じ思いを感じています。まだまだ頑張れる、元気なのだからと。少し軽くして残りの人生を跳んでみませんか。

消しゴムがゆとりの文字を消しにくる

関よしみ

気持のゆとり、時間のゆとり、経済的なゆとりをさっさと消してゆく。ゆとりの人生を過ごすはずだったのに。

路地裏に愚痴を並べたカウンター

矢野良一

居酒屋で雄弁になっていく仲間達。その内に本心が出て愚痴に変る。それでストレス発散。いいですね。そんな仲間がいて聞いてくれるママがいて。

タダ働きなのでしっかり手抜きする

柏原夕胡

作者は専業主婦の方でしょう。気持がいい程の自己主張。妻が生き生きと手抜きするのは夫にとっても嬉しいはず。しっかり手抜きしていつまでも新鮮な御夫婦で。

4 「　」を使っても良いか？

質問を二ついただいていますので、二回に分けてお答えいたします。一つは、句の中に「　」（カギカッコ）を使用することの是非について。もう一つは、「夫」を「ツマ」と読ませる「読み替え」の是非についてです。

結論を先に言いますと、表現や表記については、すべて自由であり制約は一切ありません。憲法第二十一条一項の「集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する」が、その根拠です。差別的な表現や個人攻撃、そして営業妨害など、法律に触れることはもちろんダメですが、それ以外の制約はどこにもありません。

先輩や先生から「このようにしなさい」と指導されても、それは先輩や先生の考え方であって、あなたはあなたの裁量で指導内容を取捨すればいいのです。このコーナーで述べていることも私自身の考え方です。あくまでも参考意見として受け止めてください。

「　」は、文字ではなく記号です。他の記号では、「？」や「！」そして、「♪」や「○」「△」「×」などを句の中でたまに見かけます。極めて稀な例ですが「％」を見たこともあります。今回の質問はカギカッコを使用することの是非についてですが、他の記号も同じ考え方で結構です。

カギカッコを使用する目的は、「自分の想いを強調する」ことや「他者の言葉であることを知らしめる」などです。参考として、記号を用いている句を挙げてみます。

近頃は「ごめん」と言って蚊を殺す　高瀬　霜石
本人は「いい人でした」とは聞けず　水野　黒兎
うどん屋のメニューの端に「中華そば」　安土　理恵
鰻屋の「う」の字うなぎになっている　高洲　春雄
ん？　と思う何を忘れたかを忘れ　田鎖　晴天
花作りは○川柳は△かな　中川　一洋

前二句は、それぞれ「自分が言っていること」そして、「追悼の言葉」であることを明確にしています。次の二句は、「メニューの文字」と「暖簾などに書いてある文字」であることを、カギカッコで区別して示しています。

このように、記号は作品の内容を分かりやすくしてくれますので私もたまに使うことがあります。私自身は容認していますが、避けるように指導している人もいます。

否定する理由の一つは、「カギカッコやクエスチョン・マークなどに込めようとした作者の想いを、言葉で表現するように工夫するのが文芸であり、記号を言葉の代用として使用すべきではない」ということです。

もう一つは、「記号は音読に適していない」ことです。あなたなら、先ほどの例句を披講するとき、どのように読み上げますか？　それぞれ「カギカッコで括っています」とか「クエスチョン・マークがついています」など、補足説明しなければ正確に伝わらないはずです。

このような賛否両論を承知した上で、記号を使用するか否かはあなた自身が考えて判断しなければなりません。他者の指導を鵜呑みにするのはラクチンですが、「考える」というプロセスを踏まなければ自分の力にはなりません。

エッセー

熊本川柳会を語る

高野宵草

熊本川柳会の永田俊子さんは、大正元年十一月十日生れで今年、数えで白寿になります。ご本人は「まだ九十八歳」と恬淡としておられますが、当会の人間国宝です。

川柳を始められのは昭和二十八年頃のことで、それまでは熊本日日新聞に短歌を投稿されていたそうです。田中辰二（雅号・鳴風）熊本大学教授選の「熊日柳壇」に魅せられて川柳に嵌まり込んだとのことでした。

田中辰二先生はお若い頃から、麻生路郎先生とご親交があったと聞いて居ります。田中先生は東京のお生れで東京帝大をご卒業後、四国松山の旧制高等学校で教鞭をとられ、昭和初期に熊本第五高等学校にご赴任。江戸文学ご専攻で特に古川柳やその背景にご精通され、柳多留の句をよく解説してくださったものです。

熊本大学の教壇に立たれていた当時は学生から「辰ちゃん」と親しまれる名物教授、ユーモアあふれる講義は有名で、その時間には教室は満杯、廊下にまで学生があふれたそうです。

晩年、長崎にお出での路郎先生が熊本に立ち寄られ、病床の辰二先生をお見舞い下されたこともありました。それは昭和三十九年十月九日のことで、その時の写真が『麻生路郎読本』の十四ページに掲載されています。

その既に、路郎先生のご逝去にとてもお力落しで、後を追うように昭和四十年七月二十八日に逝去されました。

辰二先生ご逝去の報には、方々から惜まれる声をいくつも聞きました。七月の先生のご命日の七月句会は四十五年後の今も、「竜山忌」として、毎月例会より趣向を変えて行い黙祷を捧げております。

「竜山忌」の意味は、ご生前のご住所が竜田山麓でしたから、お住まいを「竜山居」と称しておられたからです。

その田中先生ご指導の「熊本川柳研究会」に永田さんは入会され、私より一年先輩で当時はご主人の勤務の関係で、八代市に居られ大会などでの面識もありませんでした。

ずっと後日にご主人が逝去され熊本の実家に帰られてから、面識を頂きました。田中先生が逝去されてから、当時の先輩や会員が先生の奥様にお願いして川柳会を継続して頂きました。

その後昭和六十年に奥様が亡くなられ、一時解散しましたが、先生と奥さまの徳を慕って八月に再び「熊本川柳会」を結成する相談をした時、永田さんが真っ先に参加してくださいました。

その頃、既に熊本には「噴煙吟社」という大きな川柳会があり、多くの方々が転籍して残った会員数は僅かでした。

そんな中、川柳塔誌を購読された永田さんは「塔誌を読んで目が醒めたようだ」と私に教えて下さったので、私も川柳塔の購読に踏み切ったものでした。

永田さんは昭和六十一年に「鶴の瞑想或は人より深からん」で、川柳塔賞を受賞。

続いて「ああ余生つるべ落しに日が暮れる」で、平成五年度、路郎賞を受賞。永田さんは「熊本川柳会」の偉大な牽引車として、謙虚なお人柄はみんなに慕われております。

また川柳作句以前からたしなまれている短歌も平成十三年、尼崎市文芸祭で「ひとつ覚えふたつ忘れてゆくわれか散りはじめたる花のおぼろ夜」が一席に入賞。その他「ときめきをいつしか忘れ乾きたる心うるほす窓の春雨」などの歌も発表されております。

高齢化の時代、八十、九十歳で川柳を楽しまれる人も多いのですが、永田俊子さんの益々のご健康と、ご活躍を祈ると共に私も精進したいと思います。

ご応募ありがとうございました。入選の皆様には賞品をお送りいたします。

第4回 オニザキ「ごま川柳」入選句発表

川柳塔社主幹　小島蘭幸　選

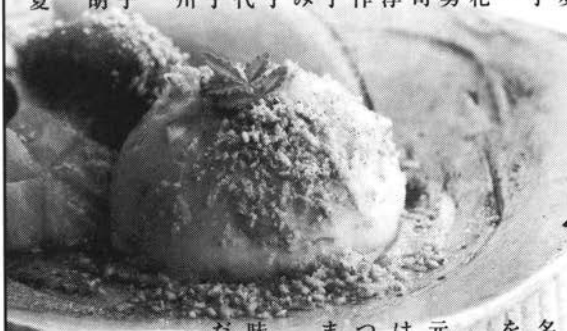
就活へ胡麻たっぷりのお弁当　河内長野　山岡冨美子
チャーハンに胡麻ひと振りの我が家風　西宮　小山　紀乃
照鰤ごま一振りが引き立てる　堺　澤井　敏治
ばあちゃんも母も私もゴマレシピ　枚方　寺川　弘一
ごま塩のおにぎり亡母のにおいする　和歌山　笠松　道代
三食にゴマが欠かせぬ母白寿　兵庫県　東狐恭仁子
アンパンをアンパンらしくさせる胡麻　鈴鹿　吉崎　柳歩
百歳へゴマの力は外せない　大阪　原田すみ子
坪庭の菜っ葉とごまが響き合う　札幌　三浦　強一
たっぷりのゴマで仲良くなるふたり　阪南　森村　美花
ゆで野菜きれいに飾るごまよごし　池田　吉川　勇
胡麻和えは姑ゴマダレは嫁の味　河内長野　坂上　淳司
顔の艶あなたもきっと胡麻党か　札幌　小沢　淳
すりごまの風味追随許さない　東大阪　佐々木満作
健康法ゴマたっぷりのお味噌汁　大阪　平嶋美智子
母さんのごま和えくすりより効いた　福岡　岡田かすみ
つきごまでご先祖の味出せました　神戸　田中　章子
自炊する子へすりごまの定期便　犬山　金子美千代
修業のひとつ僧侶のごま豆腐　芦屋　黒田　能子
脇役に徹してゴマの味が出る　海南　三宅　保州

【準　特　選】

春夏秋冬ごま食卓の顔になる　寝屋川　冨山ルイ子
長生きをしたくて胡麻を食べている　和歌山　柏原　夕胡

【特　選】

一汁一菜ごまのパワーが生きている　和歌山　木本　朱夏



杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、名称を変更し、パッケージを一新いたしました。

オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。

今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

本社三月句会

三月七日（金）午後一時
アウィーナ大阪

三月句会は、なにわの街に戻り寒の冷たい風が吹き抜ける七日、投句者5名を含む11名の参加で開催された。初参加は、東成区の栃尾奏子さん、茨木市の島田誠一氏の2名。

今月のお話は加島由一氏。「生き難い時代を言霊で」という少し難しそうな題だったが、堅苦しい内容ではなく、身近な日常生活の中での言霊の力を、ユーモアを混ぜながら易しく解説されたので、興味深く楽しく聴くことが出来た。

「人生が言葉をつくるのではなく、言葉が人生をつくる」とか「心の持ち方も大事だが言葉はもっと大事」などが心に残った。

お話の最後に、「妻から早く死んでほしいと思われないための10ヶ条」と、「夫を早く死なせるための10ヶ条」を紹介された時には、会場が大爆笑につつまれた。（いさお記）

月間賞は、富田林市の中井アキさんへ。

（司会―美籠・善純）（脇取り―芙美子・蕉子）（受付―宏子・順子）（清記―勝弘）

席題「洩れる」　山田耕治選

地軸から熱いマグマが洩れてくる　朱夏
水道も電気も洩れているようだ　蘭幸
ここだけの話と言えばすぐ洩れる　富子
やっぱりなあんたに言うて損をした　月子
ライバルも選から洩れている安堵　正雄
洩れやすい口と承知で言う内緒　見清
耳障り一つ残さず洩らさない　弥生
歴史から洩れたひとにも出会う旅　葉子
家計簿が赤字にならぬ記帳洩れ　正雄
出発は雨洩り受けた四畳半　たもつ
お洩らしをしてもいいのよお老母ちゃん　朝子
木洩れ陽が揺れる二人の散歩道　みつ子
メールからどう洩れたかで大騒ぎ　正和
無意識に溜息洩れる倦怠期　遠野
あの人はアンテナ秘密洩れそうな　紀乃
新調の入歯でものが言い難い　一歩
素顔から笑みが洩れてる今日の幸　隆彦
少々のおもらしみんなおますがな　深雪
お月さまが洩らしたらしい忍び逢い　深雪
聞き上手にうまく乗せられたと思う（忘）　千代
信じてた人が洩らしていた秘密　賢子
木洩れ日を探して歩く浅き春　美智子
人づてに洩れる話につく尾鰭　則彦
洩らすから芸能ネタでメシが食え　誠一
聞き洩らす言葉のほうにある事実　扶美代
良い町だ声もあかりも洩れている　満子
空気洩れたかこころなかなか弾まない　美智代
隠しても笑顔が洩れる恋してる　弘風
一面を大きく飾るリーク記事　玄也
保育所でわが家の秘密洩れている　和夫
子供から家の内緒が洩れている　宏子
ここだけの話かならず洩れてます　勝弘
佳
蛇口の洩れ続いて遺体まだ眠る　たもつ
若き日の秘密が洩れる通夜の席　紀子
官邸からため息洩れてくる深夜　正和
絶え間なく銃声洩れてくる地球　保州
ハインキング洩れる初音に歩数伸び　黒兎
人
溜息を一つわたしの返事です　扶美代
地
木洩れ日に明日を誓った車椅子　よしみ
天
卵から可愛い声が洩れて春　奏子
軸
父さんに言わないでねが洩れている

兼題「平行」　両川、無限選

噛み合わぬ平行線の深い溝　のん子
小遣いの値上げ平行線のまま　雅明
段違い平行棒のまま夫婦　保州
喜怒哀楽平行感覚乱す春　弥生
愛を語ると平行線が乱れ出す　アキ
交われぬ悩み抱えているレール　千恵子

別れ話平行線のまま夫婦　富子
大丈夫レールに沿って走ってる　扶美代
ジグザグも平行もあり元の鞘　ふりこ
夫婦別姓平行たもつヤジロベー　美籠
愛は未だ平行線の先の先　柳弘
平行線時々火花散らしている　(志)千代
夫婦です平行線はくずさない　月子
定年後妻のレールに添って生き　宣子
主張する個性接点みつからぬ　美籠
交わりを知らぬ与野党間の溝　玄也
廃線のレールに春の気配する　(久)千代
平行線心の奥で悔いている　一歩
平行線睨み合っても闘わず　(志)千代
平行線のままで桜は散りました　義
平行線の夫婦でとても仲がいい　美花
平行線いつか交わる日を信じ　わこ
平行が崩れ夫婦に雨季がくる　正雄
友以上恋人以下で続いてる　寿美
真っすぐな轍に父の意地を見る　俶子
平行でないからいつか結ばれる　一兆
火山帯いのちに沿って横たわる　完司
この恋も平行線のまま終わる　紀乃
平行線の真ン中辺にいて孤独　扶美代
平行を保って長く続く友　千恵子
平行棒の上で余所見をしてしまう　義
平行かどうかビー玉置いてみる　啓子
　佳
平行のふたりを結ぶ春の風　いわゑ

平行線のままではつらいので折れる　美智子
段違い平行棒のような愛　朱夏
意地っ張りどうしで距離が縮まらぬ　理恵
チョコレート平行線をくっつける　耕治
　人
ゆらりゆら平行棒の上で生き　蕉子
　地
ニアミスの無い距離計り合う夫婦　誠一
　天
平行線一本ずつが持つ野心　楓楽
　軸
ボトル一本空けて平行線のまま

兼題「スイーツ」　高島　啓子選

戦中派スイーツでしたイモだんご　キヨミ
ひと区切り付けスイーツに癒やされる　庸佑
スイーツな男でちょっとクセになる　真理子
極上のスイーツ亡母の蒸かし芋　冨美子
バレンタイン酒よりチョコをもらいたい　りこ
スイーツまで酒の肴にしてしまう　善純
ぜんざいを前に男が嬉しそう　美花
ズルチンをなにかと質す現代っ子　滋彦
一段落済めばスイーツモカが持つ　克己
スイーツの甘さが冬を忘れさす　美代子
スイーツで飲む焼酎も乙なもの　弘一
デザートはちょっと落ちつく抹茶風　光久
スイーツにすぐ反応のリトマス紙　朱夏
酒飲めぬ僕スイーツで死ぬ覚悟　蕉子

スイーツがふたつ根雪が溶けてくる　無限
ぜんざいとケーキ張り合うひな祭り　靖鬼
スイーツの好きな男でマザコンで　楓楽
犬用のスイーツ睨む青テント　誠一
爺ちゃんも堂島ロール並ばされ　(久)千代
晩酌を済ませケーキの輪に入る　時雄
スイーツの威力宿題急ピッチ　柳伸
強面も混じってケーキバイキング　真理子
スイーツを見ると女は蝶になる　玄也
甘い物食べる命を縮めても　美智代
分担は僕がスイーツ妻は酒　茂
貴婦人がソフトクリーム舐めたはる　則彦
休肝日はスイーツにするおとうさん　保州
スイーツで草食系が盛り上がる　修
いちご大福あまやかされていませんか　理恵
コレステロール忘れお菓子の森にいる　扶美代
スイーツの後で返事をするつもり　由一
シュークリーム愛をいっぱい詰めておく　寿之
　佳
チョコパフェを食べてる方が旦那さま　哲子
政治家も蟻もスイーツには弱い　完司
ババロアの好きな二人で火が点かぬ　冨美子
スイーツに弱いハンサムにも弱い　蘭幸
スイーツに目がない蟻を笑えない　好
　人
パテシエの帽子妥協を許さない　楓楽
　地
スイーツで本心などは吐けません　郁夫

天

主義主張なくてお八つを食べてます　義
軸

ザッハトルテ苦みばしった人と逢う

兼題「互　い」　**宮西　弥生選**

美しく痛みを分かち合うこころ　のん子
お互いの名前出るまで暇が要る　キヨミ
お互い様と核を持つ国増えつづけ　寿之
認め合っているから譲れない二人　蕉子
互いの手握らせ教師裁き止め　奏子
お互いに眼にも杖にもなりましょう　隆彦
年輪の皺はお互いさまである　賢子
杖よりも安心そっと手をつなぐ　完司
お互いにライバル　だけど無二の友　りこ
お互いに叩けば埃出る身体　直樹
六畳へ持ち寄ったのはハートです　いさお
お互いの合せ鏡になるふたり　哲男
路地裏にお互いさまが生きている　能子
きっと今あなたも僕を思ってる　俶子
お互いに角がなくなりよく笑う　真理子
お互いを知り過ぎました恋終る　寿之
お互いの欠点ふれぬ思いやり　和夫
お互いに気づかぬふりの愛もある　無限
見つめ合う互いを探り合うように　シマ子
お互いにちょぼちょぼだから仲がよい　理恵
弱点は私の方も知っている　弘一
ペンと紙互いに妥協などしない　ダン吉
お互いにごめんが言えぬまま暮れる　いわゑ
ああ言えばこうだと返すから喧嘩　いわゑ
互いの立場わかったふりの羅漢さま　月子
わたしが悪い僕も悪かったゴメン　宏子
物差しの違いを認め風が凪ぐ　美代子
折り返し点でお互い好きな道　冨美子
大概のことは握手で解ります　啓子
掛違いあって互いが見えてくる　蘭幸
愛と憎互いに嫉妬し合ってる　千恵子
佳　楓楽

喧嘩した数お互いを知った数　修
傷口を触らぬようにする二人　朋月
お互いに違う時計で生きる意地　よしみ
認め合うことだよ記念樹が伸びる　蘭幸
お互いの歯車きしむ古時計　㋇千代
人

八起き目の互いの虹を消すまいよ　わこ
地　正雄

野仏と互いに濡れる通り雨　正雄
天

老いてきて互いが必要になった　ルイ子
軸

打たれ強い小石互いに光り合う　茂

兼題「恥　」　**前　たもつ選**

恥掻いてなんぼ世渡り立泳ぎ　准一
携帯に恥という字が見当たらず　千恵子
危機管理が甘い国だと世界の目　りこ
少年は恥じらいながら席譲り　順子
恥かきっ子親孝行を貫いて　修
恥かいた数だけ度胸ついてくる　いさお
生き恥を晒してもう少し粘る　富子
恥たんとかいて人間でかくなる　美花
恥かいた数だけ夢が膨らんだ　哲夫
恥重ね明日の桜をまだ信じ　東吉
でかっ恥かいたら同じ轍踏まぬ　啓子
足跡と同じほどある恥の数　和夫
生き下手でまだ捨てきれぬ羞恥心　正雄
ポケットが浅くて恥が仕舞えない　弘風
恥かいて覚えた事は忘れない　郁夫
恥かいてやっと自分を取り戻す　光久
恥をかくたびに常識身につける　紀子
身じまいを恥じない程度整える　哲子
恥かいた猫へお前も歳だよなあ　義子
恥さらしの器だんだん欠けてくる　アキ
恥みんな呑み込み大河流れてる　太郎
恥を知るとはいい言葉だと思う　靖博
恥らいの残るばあちゃん愛らしい　扶美代
生き恥の一つかポリープが疼く　耕治
恥かいた話息子と飲みながら　耕治
ええ格好しました恥をかきました　義子
恥という字すこしこわれて角がない　東吉
進歩するネットに恥の心消え　由一
本物の一兵卒は恥を知る　㋆千代
ボロボロの体献体出来ますか

如月の恥は氷室に閉じこめる　黒兎

佳

恥かいてかいて綺麗に咲いている　朱夏
頬染めて恥じらった日の今の妻　賢子
恥をかく数だけ人に近くなる　ダン吉
知らんこと素直に聞いて恥とせず　月子
大人の恥しっかり見てる子供たち　能子

人

人類の恥軍隊も戦争も　完司

地

恥いっぱい生きた背中を子に見せる　美智代

天

亡父さんに恥じない様に生きている　アキ

軸

恩師の目にいつでも恥をかいている

兼題「毎　日」　**小島　蘭幸選**

近頃は毎日食べる多国籍　ばっは
毎日がバラ色だったのは昔　美籠
耕して毎日畑が新しい　黒兎
ありがたいことに毎日飲めるんや　由一
シャッターの開け閉めいつも社長さま　ばっは
お薬と酒は欠かさず飲んでいる　勝弘
近道はない毎日の修行僧　弥生
毎朝が戦争だった日も遠く　美智代
日に二回無縁社会へ犬の供　敏治
毎日だれかと口ケンカして祖母達者　シマ子
毎日の中に酷暑も極寒も　真理子
毎日が本音野心のない両手　無限
鯛焼きでさえも毎日跳ねている　一兆
心臓よ肺よ毎日ありがとう　真理子
テレビのない毎日がイメージできぬ　(志)千代
毎日が暗いニュースに昼寝する　紀雄
熱燗で毎夜肝臓鍛えてる　寿之
氏神さんへ毎日無理を頼んでる　太郎
終章の日日大切に丁寧に　いさお
日日好日妻はカルチャーボク昼寝　富子
口達者な女神と日日を過してる　蕉子
爪を研ぐことを欠かさぬ檻の中　保州
定退の夫毎日つきまとう　恭昌
むかしは妻も毎日知恵を借りに来た　一風
毎日をのんびり過ごすのは地獄　光久
手術後は毎日飯の夢ばかり　一歩
快食に快便が怪しくなった　(志)千代
あしたがある日めくり剥いでおく　啓子
いつからか日課になったハガキ書く　紀乃
いつもの道今日外泊の母といる　ダン吉
飯風呂寝る毎日開いて風になる　紀乃
日日好日翁嫗の顔になる　由一

佳

玄関は毎日ほくが開けている　完司
アホなこと毎日考えています　義
入院をすると毎日休肝日　玄也
ジェットコースターで毎日が過ぎる　啓子
微笑んでいますか毎朝の鏡　朱夏

人

継続は力毎日酒を飲む　敏治

地

愛のようなものに毎日水をやる　朱夏

天

晩学の森で毎日背くらべ　**中井アキ**

軸

ふたりきりになった毎日負けている

謹んで地震津波災害のお見舞いを申し上げます

このたびの東日本大震災により被害を受けられた皆様に、心からお見舞いを申し上げます。一日も早く復旧されますようお祈り申し上げます。

川柳塔社

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。編集部

松露川柳会(鳥取)　小西　雄々報

お祝に縁起かついだ鶴と亀　智恵子
リハビリへ折鶴づくりひたすらに　弘子
鶴亀と長寿の契り結びたい　和代
睦まじく共に白髪の鶴と亀　公美枝
祖父母から受けつぐ床へ松に鶴　鈴枝
鶴亀の絵が正月へ花をそえ　静江
ふところに大きな鶴を飼っている　正光
保護されているとは知らず鶴は舞う　雄々

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

漆黒の闇でもがいている鴉　保州
真っ二つりんごの種が黒すぎる　和子
何もって染め変えられる黒い色　元三
やり直し効かぬ覚悟で黒を塗る　明子
働いた分だけ黒い足袋の裏　幹子
ブラックユーモア小骨も少し交ぜてある　菜摘
黒猫を炬燵がわりに抱いている　美花
落ち度などあってはならぬ黒を着る　イセ
塩むすび黒胡麻チョンといばってる　喜久子
背景の黒が引き立て役になる　次根
腹黒いでも色白でもてます　桂香
黒い手が伸びて青春狂い出す　かずみ
怪しげな風情おんなの付け黒子　章子
眉に唾つけて聞いてるコマーシャル　武
何かある目線が宙に浮いている　理恵
泥吐かぬ怪しい貝がひとつある　孝子
怪しいと思いつ欲の皮を張る　東吉
ぺらぺらとしゃべる夫に裏がある　夢子
日本海の波が怪しく立ち騒ぐ　房代
やりくりの手からへそくり編み出され　碧
へそくりに試されている記憶力　町子
へそくりの私語が聞こえてくる仏間　絹子
へそくりは男を磨く常備薬　昇
へそくりが潜んでそうな胴回り　八重子
へそくりを融通しあう友がいる　義雄
豆のさやをやっとはじけて仲間入り　富子
重すぎた期待はじけてからの笑み　登美代
不況にも笑顔はじける母の鍋　起世子
また一つ弾けてとんだ水溜り　紀子
溜め過ぎた笑いはじけた柘榴の実　俶子
常識を超えた意見ははじかれる　准一
はじける様に笑う孫らが居る安堵　みね
鳳仙花はじけて飛んで星になる　当代
ポップコーンはじけて春が笑い出す　朱夏
陣痛の強さに弾き出る母性　純子

竹原川柳会(広島)　古田　太虚報

白無垢で嫁いだ妻にリードされ　慶子
白い物白く洗って良い天気　房子
点一つ打つと動いた白い画布　輝恵
元旦の雪てのひらにてのひらに　蘭幸
混ぜたなら白柔らかい色に変え　一路
白い画布インスピレーション待っている　幸子
一口のお酒が人を強くする　規代
ご先祖は山里守り五百年　半徳
ふりむけば強い味方がひとりいる　淑子
恩と愛強い心で老介護　節生
強い子に育てた母の木綿針　利子
途中下車試練の道に迷い込む　汎美
花見事途中は誰も知りません　笑子
驀進中夢の一歩をつかむ為　敬子
坂道の途中で妻を待つ傘寿　静風
途中下車あなたと旅を続けます　比呂子
マニフェスト途中でお色直しする　力
あれもこれも未完のものが棚の上　京子
ひらめきは大事に途中下車もする　千代美
門戸全開飛び込んで来たうさぎ　厚子
カレンダー私一人の予定表　栄香
夢一つころび出そうな初日の出　太虚
太陽のように輝け名は陽　史子
空のように広い心を持っている　千枝
ひらめきは天の声だと受けとめる　栄恵

川柳塔打吹(鳥取)　野口　節子報

竹垣の枝が隣の噂聞く　美代子
老いの手に今日も奉仕の竹箒　富恵
作る子も遊ぶ子もない竹とんぼ　龍枝
春を待つ竹の子地下で四分音符　玲子
どなたかな竹馬の友に忘れられ　美知江
竹割ったようなお人を好きになる　和子

鳥になろう空へ向かった竹とんぼ　みち子
追求に竹より客い柳腰　滋
身の丈に合わせて竹も節伸ばす　三津子
瀬を深し世間を渡る竹の杖　いさおくにこ
花まるをもらった竹は伸びてゆく　勝憲
登山者の無事アンテナで確かめる　善江
アンテナを張って山鳩悪さする　泰輔
アンテナに兎の耳を借りましょう　芙美子
アンテナは無いが噂が良く入る　久芽代
谷底に落ちてアンテナとどかない　貴恵
口チャックアンテナ役がやって来た　螢
アンテナが悪い情報持ってくる　公恵
ロシア大使アンテナ鈍く首になる　照彦
冬日にもアンテナを張る村雀　芳光
身体中アンテナにして風を読む　節子
アンテナが故障したのか波静か　紀美恵
アンテナが皆んな元気か見てござる　泰山
酔う程に枠を破って生地が出る　禎元
年金の枠で家計はママの知恵　清
国債の枠を設けて苣予算　克枝
温い枠の中であぐらをかいた日も　玲坊
まっ先に小遣い枠は仕分けられ　紀の治
飲み代は別枠として組む予算　重忠
わたくしの枠で溺れている私　義人
枠外し生クリームを塗りたくる　石花菜
黒枠の中に納まり不老不死

城北川柳会(大阪)　伊達　郁夫報

神様はよろしゃよろしゃの三ヶ日　喜美子
やさしさをもらい素直さ取り戻す　美智子
暦には仏滅とある誕生日　榮子
退職し百円ショップで買う暦　千恵子
宝船敷いて夢待つ三箇日　縣祚
孫九人家族揃ってハイポーズ　正
明けてまた純な気持で立ち向かう　満作
トイレにも暦つるして思案する　あさ子
痩せていく暦に少し嫉妬する　郁夫
暦にはいつも会いたい人を書く　義昭
二日から争奪戦の福袋　勝弘
今日一日命預けている暦　とし子
よく効いた薬は看護師の笑顔　かずお
素直だと言えばみんなが大笑い　弘風
不況ふきょう忘年会は別のこと　妻子
待っててね春にはきっと芽吹くから　杞香
酒が友僕のペースを狂わせる　一歩
日めくりの暦欲しがる父だった　東吉
褒め言葉わたしを美女にしてくれる　ルイ子
幸せは明日ひらくかも花ごよみ　志華子
万倍日に合わせて父は種を播く　克己
神神しい日の出を拝む初暦　野鶴
諦めか我慢かゆらり池の鯉　直樹
わくわくを悟られているコンパクト　賢子
右向けと言われて三日向いている　じゅんこ
ぴかぴかの心で歩き出す今年　朝子
許されて今年もめくる新暦　たもつ
惚れました君のペースに合わせます　典子
わくわくが酒一合で消えてゆく　修
速達が来た採用通知かも知れぬ　昭
内心はわくわくなのに渋い顔　倫子
作戦にはまりスパイクもがいてる　寿子

佳句地十選（3月号から）

白根ふみ

馳け抜ける龍馬は土佐の風になる　敬子
どれ程の供養も足りぬ父母の恩　志華子
洗いたくなるから買わぬ無洗米　宏章
不器用なふっくら丸い母が居る　一呑
故郷という筆順は忘れない　盛桜
情熱が枯れたら一度会いたいネ　扶美代
本日も晴天命輝かす　希久子
日本海の蟹が絶滅するツアー　ダン吉
不揃いのリンゴが母の掌で光る　無限
のどもと過ぎて運転荒くなり　宏之

わくわくと羽化を待ってる娘の晴れ着　満洲夫
長生きの秘訣を聞けばマイペース　麗
ありがとう素直に言って満ち足りる　集一

川柳ふうもん吟社(鳥取)　夏目　一粋報

支持率は流した汗の量だろう　洋々
支持率はあなたの力次第です　一京
雪積んで人も野獣も冬ごもり　妻子
ガンバーで泣かされた子に介護され　節子
妻兎大きい寅の俺に勝つ　清信
太陽に抱かれて溶けた雪だるま　美雪
終りなき介護うさぎの目が赤い　無限
ニセ者に心のすき間狙われる　せつ子
インフルの鳥にマスクはしてやれぬ　あしび
ニセ者と気付かず床の間へ通す　美恵子

兎目になった海老蔵みておれぬ　茂登子
住みにくい地球へ兎見切りつけ　雅女
低い鼻高い支持率得ています　一瑶
ドカ雪へ人間愛の輪が開く　金祥
ガンバーを許す度量が欲しい妻　雄太郎
赤い目は二日酔いかね兎ちゃん　享
ニセ者は春の光りに気付かない　菖子
消費税アップ支持率ダウンする　凱柳
支持率が下った老父の腰さする　蟹郎
支持率に思案しているマニフェスト　清帆
柳人と市議を兼ねてるほんま者　隆浩
ガンバーの妻は美人でもの静か　振作
あのガンバー親ゆずりだよ直らない　稔
金だけを掴み慣れてる手が恐い　圭一郎
思案している間に散った儲け口　春名
今日のパワー深呼吸して陽にもらう　菊香
子兎に一兵卒の風寒い　善夫
兎から亀に変身する古稀だ　とも湖
支持率は諭吉にものを言わせてる　秀四
髭づらでよく聴く医者はニセだった　孝二
耳よりな話兎が耳を立て　昌鼓
ニセ者がブランド品を売っている　はつ江
披露宴ニセ者客で盛り上げる　由美子
懐かしやガンバー時代ひと昔　弘康
ニセ者が針の筵でもがいてる　一粋

川柳塔おっぱこ吟社(香川)　**川﨑ひかり報**

新しい波紋見たくて石を蹴る　はつ恵
孫達に新札のせた春の風　賢
春座敷年始の娘等に明け渡す　八重子
新しく増えた友への賀状書く　放任
新政策野党中々寄って来ず　あきら
新潰を箸が喜ぶ妻の味　弘
新月の暁に見る流れ星　いさむ
新しいものに飛びつくクセがある　ひかり

川柳らくだの会鳥取)　**岸本　宏章報**

体中洗って明日のオペを待つ　紀子
ばあちゃんの地獄耳にはかなわない　善江
ウォーキング若い気持で背伸びする　仁子
民主党つかんだ椅子はふうわふわ　都
雪とけていよいよせわし畑仕事　冨貴子
ポイントが溜まるまでには無駄も買う　宏章
過去曳いて前に向えぬ意地っ張り　寿賀子
大金を掴んだ人が転居する　清
寂しさも一緒に捨てる着れぬ服　せつ子
不幸せばかりつかんで納得し　邦昭
生きてたらあれもこれもと母思う　孝子
風見鶏どんな風にも前を向く　大鯰

南大阪川柳会　**吉川　寿美報**

大学も金さえ積めば広き門　清
幸せにする誓い果して共白髪　たもつ
幸せにすると言うたはどなたさん　弘風
指切りで誓った指が疼きだす　ばっは
自己管理からだに誓う年はじめ　なぎさ
新春に神に誓った家族の和　ルイ子
浮き沈み再起を誓う風に逢う　更紗
神前の誓い単なるセレモニー　克己
誓約書書いてそれから奴隷です　正春
リベンジを誓って汗を積み上げる　栄子
一年の誓い書初め光る墨　弘泰
左遷よし地酒のうまい地方なら　楓楽
地方には地方自慢の顔がある　太郎
合併で町村減って市が増えた　和雄
地方都市子供手当にわく異論　柳伸
見得捨ててプラス思考でケセラセラ　忠昭
酒飲むと母の自慢がしたくなる　郁夫
淑やかになろうなろうと黄水仙　志華子
声出して新聞を読むぼけ防止　集一
定年のない母さんの割烹着　柳弘
義理あって白い平野を突き進む　あおい
冬枯れの町に善意のランドセル　弘子
寒風の中に蝋梅凛として　直子
おかしいねダテのマスクが流行ってる　勝弘
神さまが身軽を願う絵馬の数　憲太郎
趣味多彩プラス志向で行く余生　寿美
母さんと指切りしてるランドセル　とし子
誓っても要るものはいる台所　百合子
取りあえず誓っておいた初もうで　(吉)修
窓際でさびた包丁研ぐピエロ　恭昌
今善しとする人生最高だ　柳右子
すぐ誓う男を見ると影がない　昌紀
地方分権わが家の長は卑弥呼です　直樹
マイナスをプラスにかえる家計簿よ　(棚)修

川柳塔みちのく(青森)　**小寺　花峯報**

三途の川渡る路銀が貯まらない　信子
お茶会にそろそろ帯柄替える時期　つとむ
スカートはく春を迎えに行きましょう　初枝

産卵の鱒湾に入り込む　呑舟
泣けるだけ泣いたそろそろ上を向く　柳子
二浪したサクラそろそろ咲く予感　ひとし
歩き疲れるまで今日は森の中　芳生
誘われて誘われて行く講演会　隼人
一八時絵文字ひとつのメール来る　則彦
キーパーを左へ誘いシュート打つ　一呑
寒月の誘いに乗って凍て鶴に　花匠
そろそろと言われて有頂天になる　雅城
京の旅花のたよりに誘われて　ふさゑ
何時となくホームのチラシ丹念に　愁女
仕送りの親爺そろそろ白髪見え　井蛙
父という重い言葉を子に遺す　黙人
春の野に孫を誘って菜摘みする　岳水
吹き出したニキビそろそろ反抗期　花峯
イントロが流れてマイク持ち替える　慕情
思春期のあちらこちらに芽が生える　一花
柿八年そろそろ蕾欲しくなる　劦

川柳塔鹿野みか月(鳥取)　福西　茶子報

品のある木の芽だ末が楽しみだ　盛桜
銘柄のどれを飲んでもコーヒーだ　(西)和子
満ち足りた笑顔を見せて大往生　茶子
母と妻おんな演じてご満足　螢
厳寒に負けぬ木の芽の底力　弘子
コーヒーの匂いに負けた万歩計　彩子
メールに遠く私にはペンがある　(鹿)節子
辛い時偲えば今は満足だ　房子
珈琲はこぼれ話が好きですね　八重
胸の痛みの特効薬はブラックよ　宣子
僕に食われて満足そうなマツバガニ　完司
出るところ探す雪折れ木の若芽　照彦
青春の門出祝って木の芽立つ　いさお
天地人活けたまんまで芽ぶく春　実満
コーヒーも焼酎もどこが好いのかな　孔美子
年寄りを満足させる炉端焼　睦子
メールでは感情見えず物足らぬ　幸枝
この話あなただけにと来るメール　満
そばで年越餅で迎春満足じゃ　惣子
傘寿にて五体満足感謝する　露子
ジョーク出る満足母の退院日　くに子
孫からのメールに赤いハート出る　京
うっぷんを晴らすメル友いてくれる　みさ子
メール打つ顔も電波に乗って来る　永子
満足という顔になり一合酒　かおる
満足に銀シャリ食べている平和　美代子
柔らかく優しい満足な笑顔　みどり
意気地なし未練のメールまだ消せぬ　美恵子
木の芽どき急に逢いたくなる女　忠良
満足に足袋の小鉤が掛けられぬ　蟹郎
春の陽に満足そうな梅の花　久枝
満点に満足しては愚か者　小鹿

高知川柳社　小川てるみ報

ああ今日も無事に済んだと言う日暮　典雄
鍬洗い明日の鎌研ぎ夕暮れる　美々
夕日さんさん運動会の明日は晴　三郎
ケアハウスへ心残している日暮　京子
苦も楽も抱いて二人の日暮れ道　健
夕暮れてノルマ果せぬ蟻のうつ　千鳥
秋の日の釣瓶落しに人を恋う　てるみ
草食系だろう夕暮にはいない　和広

ほたる川柳同好会(大阪)　水野　黒兎報

効能は美肌のお湯に入りたい　正子
湯につかり孫と至福の時過ごす　信男
冬の夜は酒と湯豆腐赤のれん　長一
こだわりを捨ててすぱっと頭割り　久子
こだわりはありませんのと虫めがね　純子
一つでもこだわりを持つ覇気がない　契子
どこ行くのしっかり付いていくツアー　見清
介護の手しっかり繋ぐ夫婦仲　公子
しっかりせん夫放っては死なれへん　幹治
しっかりの結び目ゆるめ生きてます　桂子
テレビ見る老母のお膝は猫の席　春代
定年後妻が上座の席に居る　順子
貧乏性席あたためる暇がない　黒兎
ひとり住む3LDK広すぎて　洋子
ここ一番いう日は赤い服を着る　美智代
靴の紐結び直して就活へ　柳童

川柳花の輪(大阪)　妻谷　重風報

あかあかと迎え灯籠初祈願　一幸
満月が狼男そそのかす　敬子
どん底で明るい妻に救われた　勇太朗
知恵つくたび深みを増していく迷路　克衛
ある時は家の内まで迷路なり　重風
孫達と花の迷路でかくれんぼ　風
亡き父と同じ歳にて知る迷路　楽鬼
どの辺で終わる余生の迷路坂　泰子

迷路のような道だが行くしかない余生　薫

わかあゆ川柳会(島根)　松本はるみ報

庭の隅ぽっかり咲いたこぼれ種　ちよえ
明日への小さな夢ならまだもてる　かつ子
そのことは夢でなかった風が吹く　はるみ
百歳の笑顔にかたく握手する　好栄
もつれ糸笑顔があればとけもする　恵美子
笑顔にも嘘とほんとの顔があり　英子
草の芽も静かに仰ぐ春の雨　伸子
昭和史もよいとこばかり夢に出る　博利
九代もつづく笑顔の鬼瓦　清泉

川柳塔唐津(佐賀)　仁部　四郎報

拙者にも母校からきた奉加帳　四郎
吹き溜りうちの木の葉じゃないのだが　勝視
捻りさえすれば湯が出る有難さ　高明
問い合わせ半分決まりあと半分　實
領収書かき集めてる年度末　輝夫
地獄落ちしてもいいから恋をする　蜂朗

長柳会(大阪)　坂上　淳司報

趣味だから雪の中でも出かけるの　淳司
ねんねこで赤子を背負う人は無く　たけし
怒る妻シップ貼ってと背を出す　弘光
ただ一度叩いた父の手は重く　幸子
使わざる部屋にも春だホコリ舞う　エミ
趣味増えて友のタイプも様ざまに　孝代
定年後気合を入れてそばを打つ　輝子
小さな手に指切りされて困る爺　光弘

愛おしい雪の下から蕗の薹　ヒロ
ごめんねと素直に言えば済んでいた　正博
郷土愛詰めたゼッケン背に負って　篤
叩かれる度に大きくなる器　久美子
日の丸を背中に負うた日の遥か　正一
特急も雪に負けたと立ち竦む　靖博
祖母を看る母の背中のなお丸く　けい子
淋しさと背中合わせの喋り癖　三和子
修羅超える度に大きくなる背中　和代
七人の敵をしのいで来た背中　芳野
僕の嘘やさしく聞いていた背中　隆彦
熱燗が心の奥の戸を叩く　和子
叩かれて揉まれて鉄をも斬る鋼　直樹

川柳ささやま(兵庫)　遠山　可住報

予算立て暦に記し除夜の鐘　久子
本性が出るなら酔わせてみたい君　美緒子
酔っ払い言いたいことを言っている　二英
その言葉酔わず聞かせてほしかった　純子
にこにこといつか世に出る井の蛙　文子
新春のムードに酔って出る諭吉　美紗子
割り勘で下戸の肩借るほどに呑む　哲男
予定外出費かさんで四苦八苦　稠民
予定日は桃の花咲く頃でしょう　真由
朝刊の子供の詩に頬ゆるむ　啓子
予定にはない初夢に酔うている　多美子
ストレスを取る旅予定立ててみる　開子
宇宙から孫がケータイかけて来る　可住
賀状読み声もききたく長電話　かほる
酔ったふりしてちょっぴりと本音吐き　幸子

初孫の出産予定待ち焦がれ　照代
久し振りビルの谷間の人に酔う　美智子

川柳塔きゃらぼく(鳥取)大塚　恵子報

今宵見た月は兎が餅を搗く　瑞枝
変装に重宝してる冬帽子　恵子
計の電話しばし動悸が止まらない　春枝
福袋中身曝して客を釣り　麗
黒豆がほっこり炊けた日の平和　繭
豪雪で極限の不便さを知る　初枝
影うすくなったと思う昨日今日　寿々子
平成の記録に残る雪のあと　亜弥
骨太く二十の春を跳ぶがいい　未延子
どか雪に木々の裂けめが目に痛い　てい子
梅一輪蝋の色して綻んだ　千代
停電に昔ばなしの大晦日　ふみ
出土した埴輪に歴史問うてみる　喜周
一ときと入った炬燵小半日　鶴子

富柳会(大阪)　古田　千華報

待ち人は来るとトイレの神が言う　アキ
身の丈を少し縮めて喜寿を待つ　七朗
氷上の四回転にあるドラマ　和子
思う存分自分で祝う誕生日　よりこ
米櫃の底の怖さは子は知らず　伸雄
私をそっと入れてる貸金庫　田鶴子
太陽へ跳ぶ少年のジャンプ台　欣之
私に誰もくれない玉手箱　扶美代
ちょっと待て今の一言気に障る　壽峰
箱の隅つついて人の和が乱れ　紅紫朗

凧糸の端で生きてるアホやねん　高　鷲
花丸を付けて記念日待つ家内　武　人
一片の白い花弁の独りごと　奏　子
箱入りの妻がおこした風は青　華
迷ってる僕は紙風船の中　寿之
糸切れた凧で河内野もて遊ぶ　操
半割の白菜にある強い意地　よしみ
沸点に達しイライラ待つ恋よ　佳　子
春を待つ種が眠っている小箱　鬼　焼
深夜まで何を話すかオモチャ箱　登　子
わだかまり消す歳月がまだ足りず　信　子
ジャンプする術を覚えた座りだこ　澄　子
春からのジャンプへ赤い紅を買う　晴　美
出来るまで口出しせずに待つ至難　恵
風向きが変って嘘が寝返った　森　子
ジャンプして努力の証し晴れ舞台　千　華

川柳クラブわたの花(大阪)　西川　義明報

平成のあしながおじさん伊達直人　妙　子
ひと言がずしんと心和ませる　俊　子
坂の上雲探そうよ胸はって　晴　美
頼みますボーナスだけは現金で　浩　三
人はみな心なんだと思いたい　孝　子
名月が照らし忘れた影ぼうし　和　子
幸せな人生だから百めざす　ますみ
寒風に耐えて凛凛しく開く梅　はじむ
日本全国善意の味方伊達直人　たえ子
記念樹も子もすくすくと育つ幸　美代子
冬日温か二人で両手弊し合う　耀　一
丸四角雑煮談義に花が咲く　知佐子
口一パイ春が広がるさくら餅　民
新春を寿ぎ開く一ページ　博　子
ゴール点夫婦仲良く共白髪　愛　子
感謝する色紙に躍る友の愛　奈良司
鏡餅昔話を語らせる　宏　至
母に似て優しく包む雪囲い　いつふみ
心配よそに意気揚揚の午前様　宏
寺巡り京で出会ったあぶり餅　義　明
民主党船頭多く船山に　正　春
馬鹿になるむずかしさ知る酒の席　一　風

川柳茶ばしら(愛知)　板山まみ子報

家中の灰皿捨てる嬉しい日　遡　行
食べ過ぎが招く数値に高出費　百合江
鬼は外声を出すのは我家だけ　かつ子
力抜くコツも覚えた一輪車　美千代
極楽の真ん中にいる万華鏡　幸　子
極楽のポイント溜めて天国へ　雅　美
省エネに少し役立つ皮下脂肪　まみ子

川柳あまがさき(兵庫)　田原　一兆報

いらいらの炎に寒の水かける　一　兆
二等兵往復ビンタで鍛えられ　野　薫
いらいらがつのるテレビのバカふざけ　洋　子
邪魔にならず許されるなら百までも　幸　香
支え合い歩幅揃えて往復す　雪　菜
母とお茶この雰囲気よいつまでも　美代子
手袋を編んでくれたね母恋し　芳　治
タバコ断ちぴょんと跳びたい日向ぼこ　柳　明
豆を煮る静かに心落ち着ける　和　子
冷ややかにオペの手袋肌にふれ　純
しんしんと雪の隠した白い罠　靖　鬼
ペア旅行往復相手違う人　美　義
水仙がもう春ですと笑みひらく　芳　子
カニに酒温泉宿で過す夢　正　和
君に逢う日の手袋は深くはめ　里　江
高くても往復切符あの世行き　五　月
美女になる整形ならば許してる　江　美
くどいとは知りつつ又も口に出る　登　子
弁解ものらりくらりと夜が明ける　あかり
生ぬるい話が往き来する会議　紀　乃
おせちにも国連ほどある多国籍　哲　男
跳ねすぎて困るくらいになれ卯年　鹿　太
老いの道やさしい言葉に気を許し　美也子
潜んでる病魔出ぬ間に辞世の句　祐　康
おだやかになったと言われ覚悟する　キヨミ
今になり分かった亡父の言ったこと　かずお
よい返事往復ハガキ抱きしめる　勝　巳
禁煙もいらいら高じ続かない　朋　月
手袋を外してハート握られる　菜々子
嘘らしい嘘を笑って聞いてます　耕　治
未練抱き行ったり来たり風の道　ヨシエ
泣きたい日環状線に乗ってみる　ひとみ
いらいらを一変させたドアチェーン　美　籠

あかつき川柳会(大阪)　宮﨑シマ子報

絶頂に立てば三百六十度　宏
三浪よもう目標は下げなさい　明　子
等高線雪崩を避けて迂回する　野　鶴
バラ撒きで税金きっと高くなる　公　誠

高所恐怖5階以上に住めません　和雄
貧しさの底にも高い志　いさお
血圧が200発泡酒に落とす　たつお
のど自慢声高らかに鐘ひとつ　秀夫
鬼の顔高い高いして見せる　生枝
草ばかり食べてるせいか怒らない　鈍甲
父が怒るととても側にはおれまへん　太郎
怒ってはいるがいつでも味方です　義
怒らない人が怒ってまとまった　見清
怒っても今は逆立つ髪もない　たかこ
無党派の声が決め手となる選挙　房男
悪口は小さい声でも良く走る　忠昭
母の声大事にしてる胸の奥　美智子
勿体を付けてわざわざ声落とす　篤
声がやむ蟹と格闘中らしい　克己
いつからか黄色い声が出なくなり　すみ子
国民の声とマスコミ騒ぎたて　遠野
良いお声ですねと音痴には触れず　一志
声高に母を叱っていた介護　廣子
向い風耐えてる男の背の角度　弘泰
丁度好い角度で凭れ合ってます　哲男
協会の死角に八百長が潜む　愿
親切も角度変えれば恩を売る　敏子
したたかな構想知事の先走り　柳弘
日本人もっと怒ろう怒らなきゃ　勝弘
いっぺんも僕に聞かずに町の声　たもつ
名ばかりの春に震えている蕾　紀乃
就活の青いリンゴへ春よ来い　朝子
新聞を読めば機嫌が悪くなる　六点
日航は安全無視の解雇する　紀雄
年金の値下げだめです生きている　美世子

倉吉川柳会(鳥取)　竹信　照彦報

待ち伏せて偶然だねと言った彼　瑞子
出会うにはもってこいだな星月夜　鬼一
夢をもち出会ってみればただの人　宏
久しぶり出会った彼に幻滅し　英子
危機一髪出合いがしらに目をつむる　喜美子
山ぶどう摘む夫熊へホイッスル　和子
いい人生だったと言えるまで粘る　風露
粘り抜く力鍛えてくれる冬　完司
絵に描いた餅は味なし粘りなし　萩江
最後まで粘って池の主を釣る　重忠
母ちゃんも粘り続けてものにした　智恵子
雪女今年はなんとよう粘る　酔美蓉
粘り腰もって外交なされませ　茶子
和解してダイヤモンドになるのです　石花菜
和解してきれいな灰になりました　節子
子は鎹和解のチャンスくれました　日出子
火を囲みこころをかこみ和解する　螢
和解するためのお酒で又揉める　龍枝
和解しないわたし悪くはありません　けいこ
謝ってしまえば治る愚痴喧嘩　美代子
若い祖母孫には勝てず和解する　美津恵
和解する夫婦喧嘩に土瓶口　貞子
警笛が津々浦々で鳴る日本　次男
けいたいが笛の役目をひきうける　康子
笛吹けど誰も踊らぬ予算案　由紀子
樹氷から笛吹き童子現れる　賀寿恵
前を行く犬口笛で呼び戻す　泰輔
口笛を吹いてもあの娘振り向かず　祐子
口笛でデートの返事ホーホケキョ　悠子
太陽と月が和解し朝が来る　照彦

川柳塔なら　坊農　柳弘報

老春の日々を寿ぐコップ酒　隆之
氷河期の新卒うまく行くように　萌子
若水のお茶で寿ぐ下戸同士　芳子
初日の出拝み至福の帆を揚げる　満作
寿いで屠蘇飲み過ぎの初詣で　博一
呱呱の声あげて人間動き出す　次郎
OKです身辺整理すみました　勝弘
何べんも表札替えて生き延びる　千梢
覚悟するまでの時間が長かった　とし子
居酒屋を渡り歩いた札の染み　寿之
探さないでやっと樹海の迷子札　のりこ
札所巡り五欲がとけて透明に　ふりこ
頑張って金婚までは言う覚悟　弘風
覚悟してまな板に乗るいい度胸　一風
立札に命だいじと立つ名所　修
新年を寿ぐ妻の初かがみ　洋子
新年を寿ぐ雪になってくる　道子
千社札高く貼ってる心意気　惠美子
胸中の切り札めくり今発火　あかり
切り札は洗いざらしの愛ひとつ　富子
空っぽのこの手の平が切り札に　真理子
返り血を浴びる覚悟の両こぶし　順啓
名人戦初手は冷たい駒の音　國治
頂点に立つまで後を振り向かぬ　良一
しばらくは消さぬ表札のあなた　理恵

寿ぎのジャンプは大空に迫る　弥生
五欲まだあって往生ぎわ悪い　恭昌
百歳を寿ぎ老酒で乾杯　いさお
火の祈り水の祈りのご来光　柳弘
スタートは駆落ちでしたそのむかし　寿美
繋がりを確かめ合っている賀状　怜依子
人生のスタートダッシュ華やかに　おたか
彼女から睨まれている七並べ　完次
飛躍する抱負寿ぐうさぎ年　朝子
神の手にいつかは返す生きた恩　隆盛

ローズ川柳会(兵庫)　木村貴代子報

あれもこれもらりくらりと寒のうち　義子
喜ばせて喜ぶ事を探す日々　貴代子
先ず窓を明けて今年の風を入れ　てる
風の向き変って急にデカクなり　藍
恋人と歩けば風は早春賦　年代
梅の香を運ぶ風待つ君を待つ　みつ子
温暖化託びてドカ雪降り積り　哲子
花あられ華やぐ女たちに似る　いわゑ

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

可も不可もそのまま生きる現在地　和香
素ぴんは寒いクリームを塗り込む　小雪
もぎたてのりんごをガブリ美味しいな　月子
雨ニモ負ケズ素顔のままで生きて行く　大輪
そのままで待とう必ず春は来る　克子
八百長がばれたそのままではすまぬ　英子
素のままで話せる友がいる至福　美羽
苦言そのまま消化吸収して太る　泰女

自問自答つづく根雪が消えるまで　あきこ
義理チョコを飢餓の子たちに送れぬか　保州
触れ合った余韻そのまま掌に包む　寿子
触れないでずっと蕾でいたいから　俶子
身のまわり整理の後も変化なし　真里子
柳のよう生きてごらんと風は言う　義子
横文字と新語が脳を攻めて来る　准一
横車上手に押せる人もいる　よしこ
手は貸さずきつい横槍入れに来る　紀子
横なぐりの雨なら負けぬもっと降れ　徑子
横一線どう抜け出すかかたつむり　いわゑ
横糸の赤自分史すこし華やいだ　みつ子
五目並べ下手な横好き白と黒　佐一
凍てる夜は一升瓶がはなせない　輝子
おしくらまんじゅう芯から暖まる　ほのか
重ね着で冬中肩を凝らしてる　よりこ
床暖房猫もわたしも締まらない　冨美子
百態の風吹く街で頑張ろう　翠子
三四枚脱げば私もスマートよ　紀久子
ハイキング寒さ助けたゴミ袋　美子

川柳さんだ(兵庫)　北野　哲男報

失敗を重ねて見えたほんまもん　淑子
歳重ね言うことだけは立派です　歳子
合せた手の温いあなたと一つ道　婦美子
反省と愚痴を重ねる日記帳　宣子
ガラス越し口を重ねた名場面　祐康
ふらふらと男前ならついて行く　ひとみ
散髪に行って来るわと午前様　正和
ふらふらと恋の道づれ夢の中　一子

信念もお金もなくてケセラセラ　晃
音もなく霜は消えゆく天命か　和子
霜の朝雀とびかう冬の乱　ちあき
渋滞は君のせいだよ雪女　哲夫
地に溶ける雪へ我が身を重ね見る　美和子
銀世界何も遠くに行かずとも　章子
寒いけど誘惑蹴ってコタツ出る　裕美
兎年街角景気上向く　雅司
ひと匙でわたしを甘くするあなた　菜々子
嬉しくてやがて侘しい誕生日　一泉
失敗談大きい方が盛り上る　喜代子
バンザイはスポーツだけになった国　茂山
人間の心の鬼に豆を撒く　キヨミ
夫のファン天国までも行くつもり　順子
コンビニのおでんを褒める不意の客　好文
二十五度ぐらい斜めにハイポーズ　哲男

川柳同友会みらい(鳥取)　吉田　陽子報

薬より孫の笑顔がしゃんとする　君代
エコエコと題目唱え金遣う　勢津子
何にでも興味示すが続かない　久司
一兵卒舞台のうらでタクトふる　みどり
未熟児で産まれ等身大になる　章子
内緒事はしゃぎ過ぎたら見透かされ　温子
代替わり私のタクト仕舞い込む　ふみ子
キュービッド時に誤算の矢を放つ　美恵子
家計簿を煎じる母の腕まくり　安子
鍋の日と決めてる午後ののびやかさ　ひとみ
故郷の旬まな板と謳歌する　菜美
王道を歩けば神の玉手箱　くにこ

先人の大樹の下にいるわたし　綾野　一粋
人里へ派遣の熊をもて余す　華蓮　和子
霊場でぱくぱく食べる関係者　勇　幸子
いつの日か笑う無駄骨折っている　嘉子　美恵子
間違いであれと夜中の電話取る
ありったけのポケット押さえ捜し物　敦子
手から手へ渡るタスキが重くなる　陽子
思う程頼りにならぬ力瘤　千恵子　左余
箱庭へ松喰い虫が忍び込む　遊子　多喜
良い事があったか箸がよくしゃべる　和代　たえこ
思いやりの心伸びたり縮んだり　一眸　敬子
山鳩が掛け声くれる鍬弾む　信子　美江子
めそめそすると百歳までも生きられぬ　一聴　喜子
悲しみを煎じて明日の糧にする　はるお　徳子
公弘　靖乃

はびきの市民川柳会(大阪)　徳山みつこ報

納豆の糸をびょんと伸ばしてる　雄太　孝亮
縺れ切った糸を解くのはあきらめた　佳代子　祐次
相続が姉妹の糸をもつれさす　喜久子　テル子
都合好く記憶の糸が切れている　ちづる
蜘蛛の糸見えない様に張ってある　章司
ボクだって黒糸白糸持ってます　敏
赤い糸の縺れは神の悪戯か　庸佑
和服着て京の役所の初仕事　美喜
母が織る袖に残る南風　悦子
賽銭は神に聞こえるよう小銭　ヨシ枝
賽銭が頭上飛び交う初詣　獏沓
お賽銭ポンとはずんだ下心　扶美代
戎さんに賽銭弾む小商い　りつえ
女房に不足はないが喋りすぎ　一壺

ぜいたくに慣れてしまって不足言う　フジアヤ子
贅沢を言えば不足の種になる　登志子
余るよりちょっと足りない程がいい　泰子
足らぬもの補いあって共白髪　光男
愛情の不足か味の分からぬ子　いさお
デフレ続き零細企業虫の息　美代子
デフレ続いて書き直す遺言書　久仁子
大学は出たけどデフレ超氷河　みつこ
牛丼にデフレがぎゅっと詰め込まれ

岩美川柳会(鳥取)　石谷美恵子報

甘い蜜覚えてからは汗かかぬ　孝男
壺の蜜なめて和尚に叱られる　蟹郎
蜜の香の誘い魂奪われる　たぬ
耳よりな話に蜜がぬってある　雅女
二人共とうに忘れた蜜の味　昭弘
八百長もあって人生面白い　圭一郎
腐っても鯛だ八百長などしない　茶子
この国のために三食コメのめし　完司
草食系料理のカロリー計算　螢
快気祝食べてリズムを取り戻す　忠良
草食べて食べて暦は薄くなり　一瑶
禅寺の修行は廊下磨きから　節子
築半世紀ウグイス張りになる廊下　重忠
廊下には人世訓を貼っておく　一京
すれ違う廊下にぽっとラブマーク　公子
いそがしや廊下ふいてるひまがない　稔
静かです二人暮らしの廊下です　菖子
桜田門の廊下の外は大雪だ　清帆
難病を見舞う廊下で一呼吸　幸安

人生の縮図廊下に泣き笑い　一粋
我が住処廊下がなくて温かい　和子
カメ虫が廊下の隅で凍え死ぬ　幸子
食べず嫌いで納豆に相すまぬ　美恵子

いずも川柳会(島根)　佐藤　治代報

ポーズだけ格好つけて身が笑う　幸子
頬かむりポーズ苦手のままに生き　あきら
欲望が過去をときどきノックする　弘子
お願いのポーズに弱い夫です　昌枝
鳥でさえ異性の前ではポーズする　美佐子
長生きをする雑巾が忙しい　かずこ
やっと暇医者との縁が切れそうだ　房緒
息抜きの暇を大事にしています　桂子
水面下ごそごそ動き出す気配　佳子
首洗う暇さえ呉れぬ不況風　志げる
欲しい物あってお金が貯まらない　治代
風を読み次のポーズを考える　美智子
好かれても好かれなくてもこのポーズ　美千代
叩かれた背中意欲が燃え上り　左余
欲の皮剥いでもすぐに生えてくる　多喜
まだ生きる欲があるから恋をする　たえこ
欲ばりを捨てれば老いが近くなり　敬子
雪降りて他人の恩を知りました　美江子
天国へ向かって靴が動き出す　喜子
欲もっと世の中歩きにくくなる　徳子
暇潰しポットの中に波が立つ　靖乃
合掌のポーズで母が枯れてゆく　孝亮
鉛筆を削って余暇を過している　祐次
もういいかい壊れたおもちゃ動き出す　テル子

暇ですなも一人子供作れそう　茂美
変身のポーズカメラに恥じている　幸
酒一合やわらいできた欲の虫　蘭水
立春ときけば嬉しいなごり雪　ちえ
貧富の差白一色に雪が塗る　玲子
終章へ欲をきれいに掃くところ　歌子
もっとまだ使い分けする老いの欲　寿美
過去現在とったポーズの泣き笑い　きみえ
ポケットの暇を流すと春がくる　章峰
私を動かす電話鳴っている　文子
モナリザのポーズの裏がまだ読めぬ　ちかし

川柳塔すみよし(大阪)　岩崎　公誠報

三歳児白雪姫を演じきる　温子
大脳も凍えていますこの寒さ　直子
平抜きであれど呼名は堂々と　克博
いとしいと言うて呉れたは二三年　半銭
えらいなあ恩を売らない伊達直人　勝弘
もう少し大事にしろと胃が痛む　まつお
年賀状がんばりますと大きな字　芳香
大型店じじばばの店食いつぶす　たかこ
微笑みを返してくれる乳母車　定子
いとしさを取り違えたかモンスター　裕之
堂々と勝ち取った汗誇らしい　舞夢
思わぬとこで見知らぬ人に受ける恩　かりん
堂々とちゃらんぽらんで生きてます　りつえ
ふと亡父を呼びたくなったラムネ瓶　ばっは
太陽と雨は天恩だと思う　太郎
一病得てなお愛おしさます命　美籠
縄のれん大きな法螺が吹き荒れる　㊊五　月

就活の子一生懸命いとおしい　美世子
大声で叱ってくれた父が好き　シマ子
ほんとうのいとしさ言葉にはならぬ　のん子
電話口あのねあのねと孫の声　萠
いとしさに母の肩抱くケアハウス　桃花
カルチャーで大きな夢を育てる　日の出
堂々と男女不明の人がもて　妙子
媚売らず信じる道を生きる雑魚　賢子
正直を叩き込まれた父母の恩　朝子
後ろから追掛けてくるいとおしさ　篤子
いとし子も今はわが子をだいている　チエコ
ひとりだけいとしい人が居ればよい　昌紀
波風のない日じっくり煮るおでん　㊍五　月
坪庭へ四季を彩る花を置く　庸佑
大袈裟に呑んで騒いで以下余白　柳弘
いとしさがなくならぬよう「カギカッコ」　蕉子
ヘアーブラシいとしいものをむしり取り　遠野
雪こんこいとしい人はまだ来ない　公誠

西宮北口川柳会(兵庫)　小林　わこ報

病む妻へ窓の高さにするベッド　折杭
窓枠が一幅の絵にする雪景色　比ろ志
胸の内男は修羅の窓をもつ　毅
窓際の経験糧に飛躍する　浩司
窓からの雪景音も吸いこまれ　弘子
まっすぐに歩いて余生青い海　千代
追伸の一行こころ熱くする　美籠
余ったらあげると千円渡す祖母　てる
割り切れず余りとりあい又もめる　基輔
人生は割り切れないで余りあり　盛夫

民増税企業減税目に余る　勝弘
春の風幸せすぎて手に余る　哲夫
他人には余り俺には余らぬ時と金　いたる
遠い日にあり余る愛受けました　直
子に託す夢がまだまだ余ってる　わこ
常識は守るも又破るもの　美津子
沈黙は金ただ笑ってる母だった　章子
常識に温度差がある嫁姑　順子
人の道知らぬ存ぜぬではすまぬ　嘉代子
子を生むと母の態度でかくなる　忠
人前の化粧恥ずかしかったのは昔　朋月
梅匂う路地にちらちら雪も降る　紀乃
鳥インフル空をちらちら黒い影　りこ
別れにはなぜか粉雪散るドラマ　茂
核心を衝かれちらちら本音吐き　野鶴
優先席ちらちらと見る目と出会い　耕治
孫独死がちらちらよぎるコップ酒　秋果
祐ちゃんかマー君良いか老談義　キヨミ
農民をいじめないでね活火山　歳子
医者嫌い躰納得してくれず　玲子
妻の留守句作りばかりとはいかず　武臣
今宵もまた誘眠剤になる読書　敏夫
マイカーが雪を被って雪うさぎ　哲男
じっくりと煮込んだ言葉味がある　宏造
踏み出せばきっと追い風吹くだろう　光久

岬川柳会(大阪)　八十田洞庵報

雪の中元気で参加初句会　和香
前向きに生きる八十路のうさぎ跳び　年子
うさぎ年今年の景気ジャンプして　清一

年経るもお神酒は凛と初詣　茂平
仏像展阿修羅見るだけこんな列　蛙城
追風に後押しされる散歩道　寛
青菜積み人を呼び込む道の駅　洋子
一粒の種が咲かせる縁もある　富美子
年の暮やっぱり猫の手がほしい　利武
菜の花やひと足お先に春うらら　貞夫
紅梅のひとひら君の肩にのる　洞庵
霜ふりの肉が土鍋でダンスする　桜琴
嫌なことプラス思考で希望わく　圭子
新年の希望はどこに寺の鐘　峻史
ひしひしと仕分けの予感愛煙家　和美
休耕田三年経てば窮荒田　覚庵
欠点をかばう心で今日も生き　冨美

川柳塔まつえ吟社（島根）三島　淞丘報

清張の器の中は砂嵐　芳山
今は未だ器は知れぬ孫を抱く　知恵子
底知れぬ器だったと夫の指　畔
ドラマ抱き土から上がって来た器　桂子
器には盛り切れません彼の夢　茂美
欲しいのは総理の器はかる升　柳歩
向日葵は明かりの方へ媚び会釈　注湖
蝋燭の灯数ごまかすバースデー　芳恵
天地人愛燦燦と初明かり　螢
雪明かりまるで音符のような人　ゆき
あの窓の明かり気になる友がいる　邦代
手を添えて明かり求めている介護　たけし
日向ぼこ誰のものでもない自由　寿代
伸び縮み自由自在な仕舞い風呂　民子
履き違い自由が世間騒がせる　長吉
身勝手な自由が巷闊歩する　幸
自由帳愛だ恋だと走り書き　政子
ゆっくりと自由な余生なごやかに　ちえこ
ケータイに丸秘番号入れてある　治代
ケータイとあそぶ鍵っ子母を待つ　きみえ
ケータイに去年の桜入ってる　禮子
ケータイで用事を済ます筆不精　和歌子
本当は書いたが早いメールする　雪代
ケータイの進化人間振り回す　昌枝
頬染めてバレンタインのチョコを買う　幸代
日に一度感動染めて老い知らず　とも子
五十年貴方好みに染められた　澄子
手を染めるあれもこれもと好奇心　美智子
出世欲自分の色に染めたがり　町紅
薄墨で心を染める冬の鬱　淞丘

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

満々の脂肪わたしの地下資源　芳山
晩酌を続けることを誓います　紀の治
平和なら二等国でえじゃないか　石花菜
大雪で鳥取県の名が売れた　すみゑ
湯豆腐がとても美味しい雪景色　水歌
雪おろしした爺さんが死んでいた　螢
狂いたいときもあろうに団子虫　芳光
花を買う少し楽しい午後になる　美ッ千
我が住み処まるごと妻の色になる　照彦
見解の相違で抜ける法の網　宏章
豆まきが済んで家中福の神　孝子
国民を騙す方便はやりだす　忠良
誓いの詞あなた覚えておりますか　美恵子
何もかもあなたの色に染まりたい　圭一郎
手を当ててもらえば消えてゆく痛み　ひかり
札束の前で誓いを立ててみせ　大鯰
大変だ年金は減り税上がる　泰輔
人影が消えてしまった商店街　けいこ
誓ったが一緒に冥土行けないわ　由紀子
意に染まぬことも承知の宮仕え　やえ
空焚きで風呂釜とかし腰ぬかす　紀美恵
単細胞言われるままにすぐ染まる　久絵
この世から消えてしまうと忘れられ　幸子
苦を語る手垢の染みた従軍記　重忠
「誓います」大きな嘘はつきません　鈴野
大雪も太陽熱で消えうせた　恒子
夫まで倒れて先が真っ暗だ　仁美
にんげんは消えてほしいと啼く鴉　完司

川柳塔さかい（大阪）　村上　玄也報

大阪に生まれ落ちたらタイガース　としお
こだわりません只で下さるものならば　世紀子
みすぼらしいポーズは見せぬにらみ鯛　りつえ
どなたにも明かさぬ呪文持っている　天笑
焼酎は芋にこだわる薩摩の出　健吾
いつまでもくよくよとするあかんたれ　雅明
止まり木の奥の端しか座らない　時雄
勝負にはこだわらないと負けてから　玄也
顎引いた姿勢が長く続かない　愿
カクテルのピンクに恋をしたらしい　月子
こだわりの蕎麦屋は無愛想が売り　誠一
絶唱の姿勢でさくらぱっと咲く　公誠

ライバルの訃報こだわり捨てさせる　和　夫
淡々と話せるようになった過去　かりん
死ぬまでに見えたらいいな妻の顔　進
穏やかな朝のルージュは淡く引く　五　月
直立不動兵隊さんは偉かった　美代子
こだわりを捨てる時来た紙おしめ　つづや
燗だけは母にさせない父の猪口　像　山
春春春うす桃色のサングラス　扶美代
友情をとおす姿勢をくずさない　唯　教
決めた道だからこだわり続けよう　のん子
せっかくのチョコへサンキューだけ返る　みつこ
天窓の淡い光で飲んでいる　朋　月
くるしみのるつぼの中にみるあかり　冬　虹
こだわってみんな主役として生きる　日の出
苦労したルソンの壺に見惚れてる　敏　治
苦労したルーツ辿ればみな戦　ダン吉
こだわらず昨日と同じ服で行く　篤　子
女系ですペットもオスは飼いません　千　代
空気読みルーキーの所作身に付ける　山　彦
あくまでも麺は腰だと譲らない　好
悔しいが留守番役で土産待つ　雅　子
癖を読み舉を狙って身構える　政　男
こだわりの化粧品でも伸びぬ皺　俶　子

六甲川柳会(兵庫)　伊勢田　毅報

亡き人の励ます声が二階から　みつ子
正直な肌年齢は隠せない　能　子
百均の罠にはまった資本主義　無　限
大物と言われ気を抜く場所が無い　(鮫)弘　子
大物の片鱗見せるガキ大将　和　恵

大物を夢見て走る夜明け前　繁　義
大物は最後の最後現われる　和　郎
春の陽に包まれ毬がよく弾む　武　彦
包みこむ手のぬくもりに安堵する　忠　貞
御祝儀を包む中味が決まらない　政　一
竹灯す悲しみ包み映す顔　(奥)弘
気持だけ包んで渡す心づけ　芳　江
ほかほかの焼芋包む小さな手　孝　子
あこがれの定年でしたその誤算　美　穂
職退いてあこがれの髭たくわえる　(青)弘
あこがれた御下げ少女もやがて古希　武　臣
花嫁にあこがれブーケ奪い合う　礼　甫
遠き日に憧れた夢今も追う　盛　夫
苦も楽に変える貴方にあこがれる　利　子
あこがれた白衣の裏にある悩み　美恵子
影武者が出番まだかと樽の裏　毅
飾っても言葉の裏が透けて見え　浩　司
豪雪が思い知らせる無力感　茂
雪吊りの縄兼六園を持ち上げる　義　博
真夜中に妻の寝言で本音知る　洋　一
見出しのみ読んでうなずきしたり顔　基　輔
幼児の笑みがこぼれる一歩二歩　勤
冷えますねぇちょっと熱燗縄のれん　寿　朗
宴会で座を盛上げる芸達者　(山)弘　子
はらはらと指にこぼれる初の雪　夏　子
樹氷から流れる水で里芋吹く　和　子
ディナーよりお鍋の湯気にある至福　千賀子
氷河期をじっと耐えてる雑魚である　光　久
罠にかかった自分自身をみつめてる　いわゑ
かいた汗天は決して見逃さぬ　楓　楽

八尾市民川柳会(大阪)　宮西　弥生報

納得はせぬが介護費引かれてる　紀　雄
幸せの真ん真ん中にある笑顔　寿　鶴
サクラサク大空見上げ笑う春　賢　子
いい笑顔投げてきっかけ探してる　華
春の絵に笑い転げる命達　朝　子
それまでの笑いを消した輪に入る　幸　生
お互いに笑うと軽くなる介護　あかり
納得の人生だから悔いはない　いさお
東京の戦火のがれて生きている　園
僕を支えた君の笑顔にありがとう　耀　一
納得の線一本がまだ引けぬ　欣　之
愛の巣へ捨て猫福を招き入れ　一　風
火がついたハート手作りチョコにする　秋　子
もう一度見たい地球の笑う顔　留里恵
じろじろ対じろじろ火花散っている　扶美代
強いられた納得赤い妥協線　森　子
火の鳥をふところに飼う河内弁　美代子
透明になれよと水に教えられ　寿　之
人間の隙間が好きな風邪の神　弥　生

翠洋会(大阪)　佐々木満作報

箱庭の広さで芽吹く春うらら　捷　也
菓子箱にすまんすまんを詰めてくる　正　雄
貯金箱いつもお腹を空かしてる　浩　二
棺という箱が口開け待ってはる　蕉　子
密室のエレベーターにいる不安　満　作
そのキャリアどんな犠牲の上なのか　すみ子
華やかにキャリアつとめて今孤独　舞　夢

キャリアなど持たず過ごした無為徒食　紀子
ITの女社長が増えつづく　日の出
妻と母両立させて来たキャリア　志華子
キャリア捨て一兵卒の意地を張る　滋彦
しおらしいけれど敬語を間違える　千歩
しおらしさ武器に女の城守る　集一
イケメンにしおらしくなる女房殿　げんえい
髪染めてせめて心の若返り　照子
孝行は出来る間にしとかねば　善之
まっすぐに人を見る目がかすみ出す　富子
行列があったら並ぶ好奇心　知之
場を読まぬ軽口深い溝を掘る　真澄
初雪にテンション上がる都会の子　桃花
就活に疲れ婚活に乗り換える　弘子
ご免ねと素直に言えた日の温み　昭
頬杖の窓見えないものを見ています　みつ子
もう一度聞いてみたいな父の声　義
一期一会九十歳の誕生日　千梢
勉強に家内のぐちをかみしめる　公平
屠蘇一献禁酒の誓い揺るぎだす　恭昌

岸和田川柳会(大阪)　仲谷　弘子報

工夫して生きて来たのにこの始末　武志
親と子の工夫の作を見る教師　宗博
工夫して一品となるくず野菜　香代
過去を削る明日を夢見て歩き出す　忠太
雪雲を削ぎ落とすのか季節風　洋
芳一の削がれた耳に人の性　勝彦
里芋をこそげる母の背が丸い　いさお
遊びから学べる事を削がれてる　蕉子
しがらみを削げば夫婦も丸くなる　俊昭

ユニセフへ年金削り伊達直人　弘子
心臓も削る音する歯の治療　房枝
生活のリズムは妻の振るタクト　直子
一輪のバラが潤す我が暮らし　幸子
清貧も心豊かに句が詠める　滋
生活のレベルが透けるゴミ袋　玄也
ONとOFF使いこなして恙無し　ひろ子
子が育ちホット息継ぐ生活費　隆昭
生活苦感じさせない妻の顔　珠子
正解は一つではない人生路　仁緑
サアやるぞ覚悟のほどが試される　彦弘
一円玉断じて引けを取らぬ銭　義泰
そんな事断じてないとシャツに紅　泰弘
その暴挙断じて許されぬと許し　昭
虐待は断じてならぬ子は宝　淳風
万引の現場カメラは見逃さず　力子
時効など断じてないと遺族たち　愿
断じての啖呵の割りに肚が無い　東吉
振り返ることなしこの道を行こう　ダン吉
災害のニュースはさすが声おとし　楢代
朝昼晩気分が悪い菅小沢　清
わたしにはこどもニュースが丁度いい　和美
犯人が東大卒というニュース　蛙城

川柳大阪　長井　善純報

孫成人ひとりで育った顔してる　喜楽
姿より心の美人育てます　彦太
そろそろと未来に向かって歩く孫　川童
えらそうな振舞いするが私の子　美世子
振り向けば育っていない私です　勝弘
こんな子に育てたつもり母はない　花笑

愛されて育った愛で子を育て　一風
すくすくと育って欲しいつぶらな瞳　美籠
新たなる一歩踏み出す心意気　功
初めての今じゃ忘れたキスの味　珠生
初詣で家族揃って皆が吉　とし坊
初夢は跳んで足折る老兎　東吉
粛々と玉砂利の音初詣　司
書初の元気な孫に初笑い　鉄心
盆正月ずらす初発の駅泊り　比呂志
歳月をゆるりと解かす初日の出　柳弘
ビル掃除のおばちゃん乗せて初発バス　一歩
助け合い何時か芽を出す春信じ　信酔
生花も工夫次第で豪華なり　和
資源ない国の成長工夫だけ　五月
特売の工夫が詰る冷蔵庫　義明
工夫して低カロリーでダイエット　笑歩
ひと工夫欲しいあなたのその化粧　照月
政権に何の工夫もない政治　いつふみ
工夫する夫が傍に居てくれる　芳香
工夫した自信男の顔になる　まつお
家計簿に妻の工夫が溢れてる　善純

豊中もくせい川柳会(大阪)　藤井　則彦報

髭そってまあまあと逢いに行く　萬的
是々非々で生きてゆきます万華鏡　肇
書きながら腹立てているお詫び状　寿美子
母と娘の内緒で父は蚊帳の外　庸佑
春一番今日の予定を書き換える　佳恵
是非と言う求婚蹴って雪椿　行兵衛
あなたにとこころ託した草書体　きらり
旧姓をふと書いてみる喧嘩あと　美津子

沖縄の基地を見ないで是非を説く　歌留多
過ちはなかったように雪の白　幸雀
内緒事抱える人に陰がある　(永)玲子
ぜひにとの言葉の先の落し穴　佐和子
過不足のない人生で和を保つ　雀舎
祝儀袋にしっかり書いておく名前　千恵子
聞こえない振りで調和を保ってる　隆
喜寿過ぎて絵馬には書けぬ甘い夢　堅坊
歳月がすべてを濾過し春日さす　夢
またひとつ恥を重ねて過去太る　千代
美しくなった過去にムホンをおこされる　葉子
書きさしの手紙が宙を睨んでる　則彦
わたくしが消えない様に書く日記　美智代
過去は過去と思い切れずにいる不安　わこ
大好きと書いたら波が消しにくる　満子
水茎の跡にこころが伺える　賢子
新たな日幕開けですと日が昇る　巴子
まだまだと夫婦で続くあみだくじ　(岩)玲子
言い過ぎた言葉が往き来する寝床　見清
待ち過ぎたチャンスだんだん色褪せる　哲子
荒れている君のハートに傘をさす　美義
ほとばしる想い一気に書く手紙　朝子
内緒話聞きたい膝がにじり寄る　幹治
明日はぜひ炎になれと風が揺れ　求芽
同意書のサイン手術が恐くなる　能子

米子住吉川柳会(鳥取)　渡辺多美子報

松風の口笛聞いてる湯宿　すみえ
雪の花公園墓地の桜木に　登美枝
ぼくの夢青葉の下で飲む珈琲　公一
青葉は伸びて追いつけそうも無い高さ　未延子
いじわるをしてみたいような年になり　宏之
銀世界見たと喜ぶ都会の子　礼子
見栄っ張り無精ひげ剃り散髪に　正親
新雪に猫の足跡梅の花　多美子
雪道に太陽あたりサングラス　欣子
地吹雪も受け止め青葉待ちどうし　ふみ
明けまして大雪と言うお年玉　紀の治
偶然の言葉の出会い生かされる　正二

京都塔の会　都倉　求芽報

白髪が並ぶ寒村初詣　ますお
ケガしてもゴールをしても大ヒーロー　満子
富士山も噴火したいかも気にかかる　宏子
デモ隊にぴくぴくしてるピラミッド　則彦
尖閣を火種にニホン取るつもり　美義
結局は箪笥で貯めた母の勝ち　由美子
迷走の子供手当に雪が降る　としこ
婚活で連れ合い探す民主党　昭肇
手招きに肩をすぼめるネオン道　比ろ志
敵方に混乱招く噂撒く　益子
招かざる鳥インフルに灰までも　俊宣
万馬券悪友ばかり寄ってくる　弘之
生返事重ねて招く破裂音　啓子
腎を持つ人屋台の灯が招く　公子
入口をバリアフリーに福招く　綾子
くにの山河ありきたりでも飽きぬ　求芽
ありきたりの人生よかったなと思う　庸佑
俗談でひと息入れるティールーム　朝子
俗縁というしがらみを脱皮する　欣之
三ヶ日終って俗が纏いつく　啓子
好き好きと俗な言葉で口説かれる　かずお
民俗語彙世界にいくつあるだろう　義昭
しきたりを崩せないまま座り胼胝　昌乃
節分はやっぱり鰯食べておく　葉子
俗っぽい作務衣が粋に見えている　輝美

川柳ねやがわ(大阪)　籠島　恵子報

記帳して後で気付いた空袋　とし子
馴れ馴れしく私に懐く杉花粉　柳弘
食べ歩き別人なる妻の腹　博泉
甘い声騙されまいと身構える　三郎
新人に花を持たせておく余裕　栄二
ユーモアがせちがらい世の潤滑油　忠央
ハート型チョコをあなたにワッハッハー　弘風
杉花粉春は律儀にやってくる　仁清
ポケットの奥で切り札笑ってる　郁夫
もう少しユーモア欲しい日本人　さち子
大惨事たったひとつのネジ甘く　亜成
余裕もち家を出たのに忘れ物　美江
しあわせな顔へ悪さがしたくなる　寿子
塩分と甘さ控えてこれが愛　じゅんこ
雪合戦猫のひたいでままならず　尚世
ユーモアで笑いころげていく余生　麗
失うもの何もないからあわてない　修
ストレスが溜まりすぎてる山の神　秀雄
マラソンのトップ余裕の笑顔見せ　一風
うちの子に限りと思う親心　洋
ユーモアが醸し出されて座が和む　ルイ子
瓦屋根減って雀の宿さがし　茜
わが妻が菩薩に見える火の加減　鈍甲
子や孫が困っています国の付け　祥昭
ユーモアを四角四面に混ぜてやる　恵子

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田 川柳会	**16日(土) 吟　行** 青春・逸れる・ちくちく	牛滝温泉いよやかの郷 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川　柳 ねやがわ	17日(日) 午後2時締切 のどか・ガイド・鉢巻・自由吟	寝屋川市立総合センター　4F　第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
川　柳 藤井寺	17日(日) 午後2時締切 干支・つぼみ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	17日(日) 午後2時締切 追う・暗示・あくび	淡輪17区集会所　南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊　中 もくせい 川柳会	18日(月)午後1時40分締切 触れる・見栄・どんどん 自由吟	豊中市中央公民館　阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
川　柳 さんだ	19日(火) 午後1時から 信心・浮く・土・揺れる	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5—2—4　堀　正和
川柳クラブ わたの花	22日(金) 午前9時半から ツバメ・花見・耐える・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1—4—8　西川義明
川柳塔 すみよし	23日(土) 午後2時半締切 労・異なる・どうなってるの (読み込み不可)	住吉区民センター　南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸 川柳会	23日(土) 午後0時30分から 鳴る・弁当・顔	和歌山商工会議所4階　第2会議室 ニュース和歌山編集部 「読者のひろば和歌山三幸川柳会」係
はびきの 市民 川柳会	24日(日) 午後1時締切 新・不満・ハッスル・移る	綾南の森　公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川　柳 ふうもん 吟　社	24日(日) 午後1時半締切 独身・テキスト・泥くさい	鳥取駅　2F　シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205—45　萩原美雪
南大阪 川柳会	25日(月) 午後6時から ほろり・筆箱・慣れる・財産	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京　都 塔の会	25日(月) 午後2時締切 眺める・あべこべ・指	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202　都倉求芽
松　露 川柳会	25日(月) 午後7時半締切 帰る・月・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

4月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	2日(土) 午後1時開場 救う・ぼちぼち・愉快・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	2日(土) 午後1時開場 手間・ゼロ・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉川柳会	2日(土) 午後2時締切 林・足る・すべて	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔な ら	6日(水) 午後1時開場 注ぐ・神・新顔	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口 徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
あかつき川柳会	8日(金) 午後2時締切 速い・口・星空	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分 道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	9日(土) 午後2時締切 やっぱり・口・好感	地下鉄長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔まつえ	9日(土) 午後2時締切 坂・相性・狂う・ひらひら	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳塔みちのく	9日(土) 午後5時締切 留守電・人気・こっそり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53—1 小寺花峯
川柳塔打吹	9日(土) 午後2時締切 靴・学ぶ・損	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3 牧野芳光
川柳塔さかい	10日(日) 午後1時から 勢い・この世 「きらい(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
八尾市民川柳会	10日(日) 午後1時半締切 白紙・里・咲く・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔わかやま吟社	10日(日) 午後1時40分締切 花・計算・まるで・入学	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188—14 川上大輪
西宮北口川柳会	11日(月) 午後1時45分締切 線・吠える・のらりくらり 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3—15 亀岡哲子
川柳あまがさき	12日(火) 午後2時締切 ムード・埋める・御免・自由吟	尼崎女性センター トレピエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる川柳同好会	12日(火) 午後1時半締切 東・保つ・まだまだ	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1 水野黒兎

柳界展望

★平成22年度川柳塔わかやま吟社四賞発表

葵水賞

第一位　松尾　和香
自分史の影も写している鏡

第二位　山本　義子
広い海でいわし一匹追っている

あおい賞

第一位　森下よりこ
不器用な指だが使い込んである

第二位　河野真里子
毎日がよいしょの声で立ち廻る

第三位　坂部紀久子
満足な顔で焼かれている鰯

たちばな賞

第一位　三宅　保州
逆らいたいときもあろうに吹き流し

第二位　米澤　俶子
こぼれ種花の美学に憧れる

課題吟賞

第一位　堂上　泰女
コスモスが揺れる待ち遠しい返辞

★平成22年度四国新聞社、読者文芸部門年間最優秀賞

礒野いさむ選
まん中で父が威張っていた昭和　川崎ひかり

★第60回西大寺会陽川柳大会は2月27日に開催。同人天位次の通り

麦飯と煮干が強くしてくれた　新家　完司

▽同人動向△

☆河内天笑名誉主幹は、2月10日の㈳全日本川柳協会理事会総会で承認され、常務理事に就任した。

▽柳界動向△

◇川柳さんだは四月一日より代表を、北野哲男氏から堀正和氏に交代。

◇六甲川柳会（代表・山口光久氏）はメダカの学校の川柳作品展を、4月9日～17日まで、六甲道勤労市民センター4Fロビーで開催する。

▼訃　報▲

●櫻庭順風（同人・弘前市）は2月15日逝去。享年88歳。2月19日通夜、20日葬儀には斉藤劾理事、福士慕情理事他、同人多数が参列。（追悼文は5月号予定）

▽お詫びして訂正△

▼1月号＝P89下段21行目
掘った→**握った**

▼3月号＝P73上段15行目
あ・ち・こ・ち→**あ・ち・ち・ち**。P115 4段2行目、奥水→**コ・シ・ミ・ズ**

▽新誌友紹介△

八尾市　**西川　義明**
紹介者　村上　直樹

〃　山岡冨美子

河内長野市　**竹田　隆明**
紹介者　村上　直樹

〃　山岡冨美子

大阪市　**栃尾　奏子**
紹介者　池　森子

三田市　**雑賀　一泉**
紹介者　北野　哲男

三田市　**上田ひとみ**
紹介者　北野　哲男

神戸市　**楫元　世津**

常任理事会＝3月7日(月)出席者22名。①第17回川柳塔まつり②定例確認事項③各部報告事項④その他

次回＝4月7日㈭午後13時30分～

新同人紹介

加門萌子（かどもんもえこ）
―朝子・恭昌・ふりこ推薦

石橋芳山（いしばしほうざん）
―淞丘・天笑・完司推薦

前田孝子（まえだたかこ）
―楓楽・洋々・一粋・一揺推薦

竹口清信（たけぐちきよのぶ）
―楓楽・洋々・一粋・一揺推薦

高田振作（たかたしんさく）
―楓楽・洋々・一粋・一揺推薦

第17回 川柳塔まつり

と　き　平成23年10月10日（月・祝）
午前11時開場・午後1時開会

ところ　ホテル・アウィーナ大阪　4階　金剛の間（中・西）
大阪市天王寺区石ヶ辻町19－12　TEL 06－6772－1441
（近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車）

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし　「R・H・ブライスと川柳」
R·H·ブライス研究者・岐阜保健短期大学教授　吉村侑久代　氏

兼題
「勢い」　神奈川　菊地政勝　選
「平均」　鳥取　倉益一瑶　選
「積む」　青森　佐藤古拙　選
「気くばり」　兵庫　黒田能子　選
「アップ」　大阪　村上玄也　選

事前投句　「道」**（9月1日必着）**　川柳塔社　主幹　小島蘭幸　選

◎各題2句・欠席投句拝辞
出句締切　正午（午後4時半終了予定）　※各題の「天」位に賞呈
◎会費　2,000円（当日いただきます）　※記念品　呈
ご昼食は各自でお済ませください

《懇親宴》

と　き　平成23年10月10日（月・祝）　午後17時～19時
ところ　ホテルアウィーナ大阪　3F　葛城の間
☆会費　7,000円（会席料理）　先着申込　120名様
☆宿泊　ホテル・アウィーナ大阪　8,000円（朝食付き）

＊事前投句および懇親宴·宿泊のお申込は**チラシに刷りこみのハガキ**（御希望の方は事務所）にて9月1日（木）までに本社事務所宛、お送り下さい。
＊懇親宴・宿泊のご送金（句会費除く）は同封の振込用紙でお願い致します。

主催　川柳塔社
大阪市天王寺大道1丁目14番17号201
〒543-0052　☎·FAX 06－6779－3490
振替　００９８０－４－２９８４７９

編集後記

★万愚節万民を愚に消費税　　薫　風

★提出句は衆原道夫さん編纂の改定・増補『橘高薫風川柳句集』全句索引によれば「川柳塔」平成9年5月号に発表されたもの。抒情句が薫風作品の特徴といわれるが、「へらへらと泳ぐ魚に似た汚職」「豪雪の今年つくらぬ雪だるま」など、時事吟にも秀作が多い。

★平成17年4月24日に先生が逝去されて、今年は7回忌にあたる。翌25日にはJR福知山線脱線事故という悲劇があった。あの両日の心のさむさを今も忘れない。先生を偲んで特集を組んだ。

★ご執筆頂いた野沢省悟さんは青森市在住、現代川柳の一翼を担う論客である。また芳賀博子さんは時実新子に師事、これからが楽しみな40代後半の新鋭。お二方には新鮮で感覚的な、レモン滴るような玉稿を戴き心からお礼を申し上げます。

★「強靭な抒情」と題した衆原道夫さんの薫風論は書き下ろしである。「恋人の膝は檸檬のまるさかな」はレモンでも、れもんでもなく檸檬こそがこの名作の真髄であると教えられた。

★「薫風…この一句」に寄せられた作品からは、今なお先生が私たちの胸に生きており、薫風作品の数だけ熱い思い出があることを実感した。特集をまとめながら、先生は幸せな川柳人生を送られたのだと、つくづく思い至った。

★健筆家で知られる札幌の新川洋洋氏には「『麻生路郎読本』を読んで」をご執筆いただいた。ご多忙にもかかわらずお引き受け戴きありがとうございました。

★同人・誌友の皆さんの中にはこのたびの東北地方・太平洋沖地震の被害に遭われた方も、居られることでしょう。一日も早い復旧を心からお祈り申し上げます。また被災しなかった私たちも、今何が出来るかを考え被災地へ暖かい手をさし伸べたいと思う。　（朱）

▽楽しみに見ていた朝のドラマの「てっぱん」もとうとう終ってしまいました。それにちなんでユニークな「てっぱん」の川柳の募集があり皆様も投句なさったことと思います。尾道と大阪とを結ぶドラマで、麻生路郎師の碑が建立されている尾道と大阪に本社を置く川柳塔とのご縁をつくづく感じてしまいます。

▽広島も大阪の人もお好み焼きは大好きですが、少し違うようで、広島はそばを入れキャベツたっぷりでボリュウムがあります。それでも熱い鉄板を皆で囲みフウフウ言いながら、大きな口を開けて食べるのは同じ。ソースの匂いが食欲をそそります。嫌いな人はいないのではないでしょうか。気取っては食べられません。

▽人間性の出る気取らぬ川柳と同じですよね。ざっくばらんなお付き合で川柳を楽しく続けていきたいと思っております。　（能）

川柳の魅力

川柳は、心の支えであり、トンネルの出口から差してくる光のようなものだと考えている。ふだんの暮らしに息づく気持ちや小さな発見を表現すればよい。時々、ジュニア川柳を拝読して、純粋な心に驚き、感動することがよくある。

川柳とのおつきあい。題詠を中心にしていたが、自由詠により魅力を感じているこのごろだ。

まんまるい一日があり
三角な一日があり
残念な一日がある。
飾らなくてもよい
自分の想いを
正直に吐き、つづっていこう。
大切な時の積み重ね。
ふがいない私と向き合って
それでもちゃんと生きて
いればよいのではないか。
形の見えないココロを
言葉で色付けしよう。
どうあろうとも
後戻りはできない
わたしたちなのだ。

（小谷　小雪）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（6月号）

地名　都道府県市

姓雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

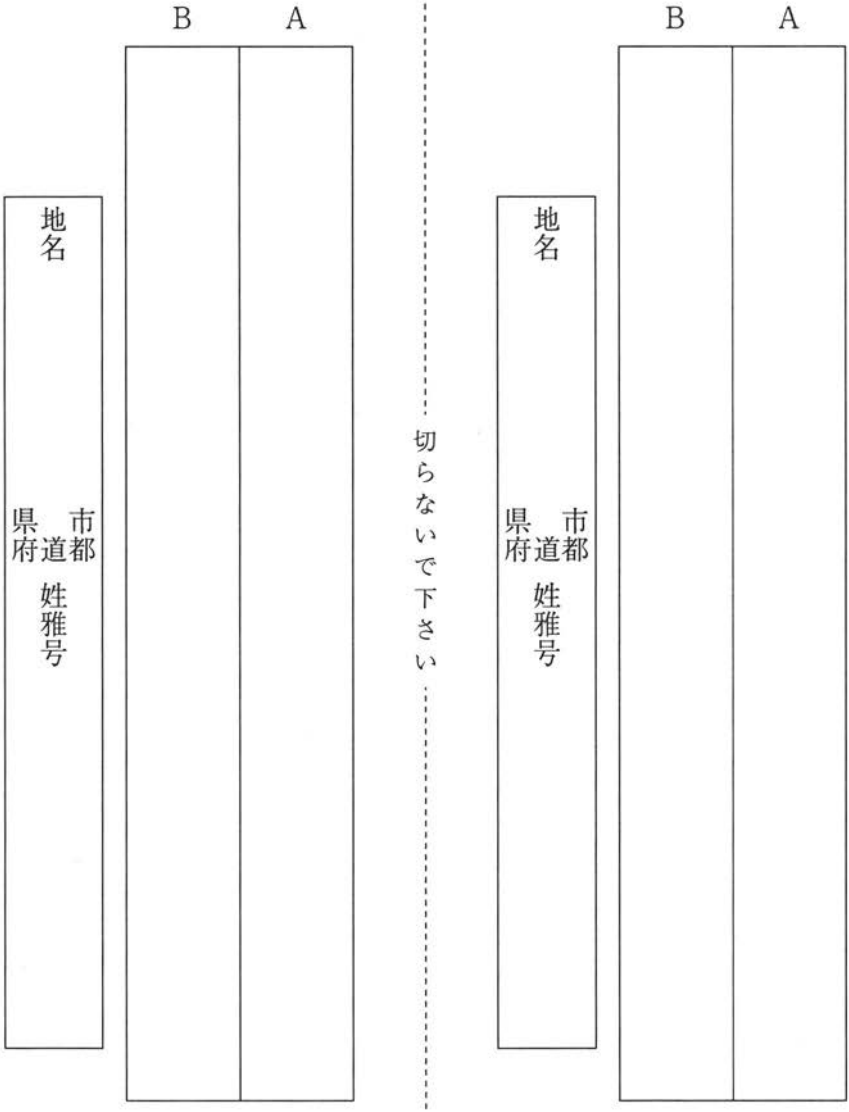
投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「時　代」　（4月15日締切）

6月号発表

山本希久子　選 ―― 共選 ―― 三宅　保州　選



左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌**新規**購読申込書

年　月　日

氏名	
住所	〒　－
電話	－　－
紹介者	

○　年　月から半年　5000円
○　年　月から一年　9800円
該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話　06－6779－3490）
振替　00980－4－298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

本社４月句会

とき　４月７日㈭　午後５時開場・６時20分締切り
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　４階　金剛の間
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし「健やかな老後を過ごす」　朝田真司氏

席題「　　」　安土理恵選

兼題「檸檬」　鈴木いさお選
「遠い」　江見見清選
「草の芽」　黒田能子選
「鳴呼」　新家完司選
「師弟」　小島蘭幸選
（各題２句以内）

会費　１０００円　投句料　５００円（切手可）

本社５月句会
６日（金）午後５時から

兼題「角　度」「バランス」「狡　い」
「迫　る」「物　腰」

作品募集

６月号発表（４月15日締切）

川柳塔（８句）　小島蘭幸選
水煙抄（８句）　西出楓楽選
愛染帖（３句）　新家完司選
檸檬抄「時　代」（２句）　（三宅保州・山本希久子共選）
一路集（３句）
「茂　る」　平田実男選
「　川　」　片岡智恵子選
「役　目」　石谷美恵子選
初歩教室「　口　」（３句）　鈴木公弘担当

７月号

檸檬抄「不揃い」
一路集「　泡　」「敷　く」「ライン」
初歩教室「まずい」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4)各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第29年度　夜市川柳募集

第11回「張　る」　大野風柳選
ハガキに３句　**４月末日**締切

投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

定価　八百円（送料92円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇一一年（平成二十三年）四月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル２０１号室
発行所　**川柳塔社**
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十三年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇〇七号　川柳塔　四月号　定価　百円（送料　九十二円）

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、名称を変更し、パッケージを一新いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号　〒103-0021
（日本橋川村ビル４F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

雑誌 05703-4